
死のクリスマスイブ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のクリスマスイブ

【Nコード】

N6197Z

【作者名】

けせら

【あらすじ】

十年前に世界各国の首脳が集まり「世界統一宣言」が出された。それにより世界から戦争がなくなり人々は平和に暮らすようになった。だが、戦争の皆無、医学の進歩のため人口の増加は世界の大問題となっていた。国々は宇宙コロニー計画、海上人工大陸計画など独自の計画によって人口問題をクリアしようとしていた。日本もまた独自の政策を打ち出した。「特権者優遇計画」だった。毎年クリスマスの時期に一週間、国が指定した特権者、特命者を指定し、特権者に特命者や市民を殺害させるものだった。クリスマス間近の日

曜、風間克行のもとに特権者指定の通知が届けられる。

死のクリスマスイブ・1

一

十二月 十日(日)

クリスマスまであと二週間と迫っている。

今年は週末と重なることもあってか、例年以上に街は盛り上がりを見せていた。気象庁の予報によると、ちょうど日曜のクリスマス・イブには雪が降るらしい。

街は十一月も半ばになると早々とクリスマスソングを流し、店先にはサンタクロースやクリスマスツリーを形取った商品が並び年末の一大商戦を繰り広げる。いまやクリスマスは正月以上に国民あげての一大行事となっていた。

風間克行はベッドのなか休日朝を、そして街の騒々しさを嫌気がさすほど十分に感じ取っていた。部屋は二時間も前から十分に暖まりベッドのなかは蒸し暑くさえ感じられるほどになっていた。そのベッドのなかで克行は毛布のなかに頭を突っ込み、光や音によって眠りを妨げられるのを避けようと試みていた。そうしておいて、しばらくの間暗闇のなかであくまでのんびりといういろいろなことを考え巡らせた。

(今年の正月は田舎で過ごすことにしよう)

(ポーナスの残りで何を買おう)

(年賀状を早めに書いておかないと)

どうでもいいことを考えることで頭をゆっくりと目覚めさせるつもりだった。しかし、その暗闇のなかにまでジングルベルが侵入してきた。

克行の住むマンションは商店街に面しており、嫌でも街の様子は聞こえてくる。すでにジングルベルは克行が目覚めてから数えても

二十回は鳴り響いている。目覚めの音楽としては少々賑やかすぎる。克行にとってクリスマスなどはどうでもよかったし、マスコミやデパートに勝手に煽動されるのも嫌だった。子供の頃からサンタクロースが嫌いだった。おそらくそれは風邪をひいて病院に行った時、そこに置いてあった雑誌に載っていたマンガの影響だろう。そこには豊かな白い髭を生やし、真っ赤な服と帽子を被った体格の良いサンタクロースが左手にナイフを、右手にイバラの鞭を持ってニタニタを気味の悪い笑みを浮かべている姿が描かれていた。そして、別のページにはそのイバラの鞭でトナカイの背を血が出るまで打っている姿があった。その夜、熱にうなされている彼の夢のなかにその姿が現れたことは言うまでもない。

まったく、どうしてあんなもののばかりが毎年騒々しく鳴り響くん
だ？

克行はうんざりしながら毛布のなかから頭を出すとやっと目を開き時計を見つめた。

時計の針は十時を回っている。

約束は午後一時だ。十二時にここを出れば間に合うだろう。

五十嵐麻美から電話があったのは昨夜の三時過ぎで、克行はその時ちょうど眠りにつきそうになった時だった。彼女は相変わらず夜に強いところをしつかりと教えてくれた。

——ごめんね、私ったらいつもこの時間に目が覚めちゃって……明日休めるんでしょ。午後からでいいからいっしょに映画でも観に行こう。

(ひょっとするとあれは夢だったかな?)

もしそうだとしたらそれほど楽なことはない。しかも、ここ一週間の間、風邪で微熱が続いていて、やっと昨日になって熱がさがったばかりだ。麻美に会うのも三週間ぶりで克行も会いたい気持ちはあったが、今は少しでもゆっくりと休んでいたかった。

今年も終わりに近づき完全週休二日制も有名無実になっている。克行の務める会社は決して大きな会社ではない。どこにでもあるよ

うな中小企業で大きなメーカーなどからの依頼によって、システムの設計や開発を行うことを主としている。それでも年末になると決算を睨んだ会社の上司や、正月明けを見越した顧客の注文によりこの時期が一番忙しくなる。

克行は手を延ばすとテレビのリモコンのスイッチを押した。買ったばかりの大型のステレオテレビは部屋の狭さなど気にならないようにまだ半分眠っている克行に対し情報の提示を行い始めた。どことなく会社の上司に似ている年配のアナウンサーがニュースをぶっきらぼうに読んでいる。

朝から会社を思い出すようなそのアナウンサーの顔に克行はほんの少し嫌悪感を持った。特にその上司とは常に気が合わずに何度言い合いをしたことだろう。そのたびに『いまにその頭を叩き割ってやるからな』と心のなかで密かに毒づくのだった。

それでも克行はチャンネルを変えようとはせずに、ぼんやりと目覚し替わりにそのつくったような声を聞いていた。

――次のニュースです。

突然、アナウンサーの声が重みを帯びたような気がして、克行はまだ少し眠い目を開けるとテレビに耳を傾けた。

――今年もまた「特権者優遇計画」が実施されることになり、先日、特権者が決定されました。特権者に関しては内密に特権者に内示される予定になっています。

では次のニュースです。

アナウンサーは早々にそのニュースを打ち切ると次のニュースへと話題を移した。

そうか……今年もやってくるのか。

克行は憂鬱な思いにかられた。

「特権者優遇計画」

それは五年前政府が発表した究極といえる人口制御政策であった。今や人工増加は深刻な問題となり、十年前に世界各首脳による「世界統一宣言」によって一切の戦争放棄が誓われるに至って、人口

の増加は誰の目にも人類最大の問題になっていった。各国はその問題に頭を悩まし、それぞれ独特の解決手段を取っていった。ロシアのコロニー計画、アメリカの海上人工大陸計画などが次々に発表されていった。日本も一時期は小子化によって人工が激減した時期があったが、養育費保護などの政策も影響し、今では再び人工は増加しつつあった。そんななか日本政府は一つの人口削減計画を打ち出した。それは毎年ある特定の一週間の間、国や県、市などが一定の特権者を指定し、指定された特権者は市が選び出したリストを中心に自由に六名を削除——つまりは殺害することを許可するというものだった。そのリストに載る人々は俗に「特命者」と呼ばれていた。その多くは百歳を越える老人や犯罪を犯した者で構成されていた。ただ、それはあくまで市が選定した候補リストであり、特命者リストに含まれない一般市民が、時折は特権者までが殺害されることもまれにあった。

全国で何名の特権者が選ばれるのか、また、何名の特命者、一般市民が殺害されるのか、それは一切伏せられていたがそれでもかなりの人口削減につながっていることから見て、その一週間の間、相当の数の殺人が行われていると見て相違なかった。

マスコミは政府の弾圧によりほとんどそのことに関し触れることは出来ず、国民のほとんどはその悪魔のような政策を身近に感じることはなかった。だが、克行のように偶然その殺人行為の現場に居合わせたことのある人も決して少なくはなかった。

（くそ、つまらないことを思い出してしまった）

克行は一瞬感じた不快の思いをすぐ断ち切るように、ベッドから抜け出ると窓辺に近づき、外の様子を見下ろした。

厚手のコートを着こんだ主婦や男たちが忙しげに行き交っているのが見える。ここ二、三年は暖冬が続き、地球の温暖化が例年以上に騒がれていたが今年の冬はオゾンホールも例年より狭く、珍しく寒さが厳しいらしい。環境対策がうまくいっているということだろうか。

克行はそつと窓を少しだけ開けた。天気は良く、暖かそうな日ざしが街を覆っているが、それでも肌を刺すような冷えた外の空気が暖まっている部屋の空気を犯すかのように飛びこんでくる。克行はその冷たさにすぐに窓を閉めた。

ピンポーン！

突然、玄関の呼び鈴の音が部屋のなかに響き渡った。

「はい！」

克行はパジャマ姿のまま玄関まで行くと、レンズから外をそつと覗いた。若い郵便屋が寒そうに足踏みしながら立っている。その帽子の下からはアルバイトであることを証明するように黄色に染めた髪がのぞいている。

克行はチェーンを外すとドアを開けた。

「書留です、印鑑お願いします」

郵便屋は無愛想なまま趣味の悪いうすい紫色の封筒を差し出した。克行が急いで印鑑を取ってきて差し出し出された書類に印鑑を押すと、郵便屋は何も言わないまま黙って次の配達へと早足に進んで行った。

克行はドアを閉めると鍵とチェーンをしっかりとかけてから部屋へ戻った。「世界統一宣言」以来、外国人が増えこの日本も欧米なみに治安が乱れてきている。特に麻薬が昼間でもあちこちで取り引きされるようになり、警察の手にもあまるようになってしまっている。ということがよくテレビでも取り沙汰されるようになってい。そして、それが一つの原因ともなり、強盗、空き巣などが多発しており、克行でなくてもこのくらいの用心は今では当然となっている。克行は部屋に戻ると改めてうすい紫色の封筒を眺めた。克行の想像どおりその封筒は市役所からのものだった。

（なんだろう……）

市役所など選挙の時以外はまるで関係のないと思っていた克行は

不思議な面持ちで開封した。なかにはたった一枚の白い通知だけが入っていた。

だが、その通知を読んでいくうち克行は自分の顔からすっと血の気がひいていくのを感じていた。

『風間克行様

このたびは誠におめでとうございます。

今年も再び「特権者優遇計画」が実施されることにあいなりまして。今年のみごとあなたが特権者として市の指定を受けることと決定し、取り急ぎ連絡させていただきます。

なお、詳しいことにつきましては十二月十一日（月曜）、市役所内にてご説明させていただきますのでお忙しいなか申し訳ありませんが、午前十時までに身分証明書、印鑑をお持ちのうえお越しくださいますようお願いいたします。

市長』

克行には一瞬それが、自分自身の死亡通知書のように思えた。

なぜ自分が特権者なんか選ばれたのかがわからなかった。

克行はしばらく通知を手にしたままぼんやりと考え続けていた。治ったはずの風邪が振り返ったように体がかつかと熱く、そして全身がだるく感じていた。今眠れば間違いなくイバラの鞭を持ったサインタクロースに出会うことが出来るだろう。

これはあくまで噂だが「特権者」というのはかなり市や国にとって模範的な市民、国民と認められた人物でそのほとんどは公務員が多いとのことだった。

都内の小さなコンピュータ会社に務める若干二十六歳の克行が特権者を選ばれるなどこれまで夢にも思わなかった。

（それなのに、今年は俺が特権者として人を殺すことになる……）
もちろん、特権者というからにはあくまでも権利であって放棄す

ることが出来ることになっているということは聞いていた。だが、その反面権利を放棄した者が、翌年は逆に特命者として選考されるという噂もまた克行は聞いたことがある。いずれにしてもそんな権利を望んでいる者は少ないはずだ。

テレビでは昨年からのアメリカの冷害によって米の供給量が需要を遥かに下回り、米価が以前国内だけでまかなっていた頃の3倍にも跳ね上がるだろうというニュースをアナウンサーが深刻な顔で伝えていたが、今の克行にはそれはあまり重要なものには聞こえなかった。

（どうしたら……）

克行は麻美との約束の時間に遅れることにも気づかず、ただ呆然と立ちつくしていた。

死のクリスマスイブ・2

二

待ち合わせの時計台の下には、麻美だけでなく多くのカップルたちの姿を見ることが出来た。そのなかでも麻美は一際目をひく存在のように思われた。それともこれはその場に存在しているカップル全てがお互いをそう思っているのだろうか。

「どうしたのよ、あれほど遅れないように言ったでしょう」

麻美は三十分ほど遅れて待ち合わせの場所に現れた克行を見るなり怒ったようにふくれてみせた。丸い童顔に流行にとらわれないショートカットの髪、それに紺のコートが手伝い、とても二十四歳には見えない。以前にも学生と間違われたと言って喜んでいたこともあったほどだ。

五十嵐麻美とつき合うようになってからすでに二年がたとうとしていた。麻美は人材派遣センターに登録されており、克行がよく伺う顧客先に彼女が派遣されていたことをきっかけに知り合い、つき合うようになった。

麻美の全てを克行は愛していた。今では克行にとって最も大切な人ということが出来る。ただ一つ難点をあげるとすれば、それは麻美が飼っている猫のことかもしれない。どこから拾ってきたかわからないような黒猫のルシファー。決して猫が嫌いなわけではないが、あの野性を離れ人間に媚びて生き、それでいて人の顔を見るとベッドの下へ潜り込むような陰しさが克行には妙に気に入らなかった。あのルシファーの青い目を見るたびに心の奥底を覗かれるようなそんな不気味さがあった。

今、麻美のそばに当然ルシファーはいない。それでも気分はあまり良いとはいえなかった。麻美の顔を見れば心もなごむのではないかと思っていたが、心のなかに広がった暗雲はそう簡単に晴れては

くれなかった。

「ごめん……」

軽い鬱病にかかってしまったかのように、克行は暗い顔で頭をさげた。特権者優遇計画のことが頭から離れない。

「どうしたの？」

麻美はその克行の様子に、心配そうに克行の顔を覗き込んだ。

「い、いや……」

克行は麻美に特権者に指定されたことを隠すつもりだった。なぜだか、そのことが麻美に知られれば二人の仲が終わるようなそんな気がしたからだ。

「でも顔色が悪いわ。風邪、治ったんじゃないの？」

「大丈夫だよ。さあ、行こう。映画に遅れるだろう」

すると麻美は――

「あ、実はそれ嘘なの。本当は三時半から。きっと克行のことだから遅れてくると思って早めの時間を伝えといたの。だから本当はまだちょっと時間があるの」

そう言って克行のジャケットの袖をそっと摘んで、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「酷いな。そんなに遅れちゃいないだろう。時間までどうするんだ？」

「どこか喫茶店で休んでいきましよう。そうすればちょうどいいわ。克行もそのほうがいいでしょ？ 映画までは元気になって、ちゃんと観られるようになってね」

麻美は克行の体にもたれかかると、克行を引っ張るようにして歩き出した。克行はそんな麻美を見つめながら、自分が特権者に指定されたことを麻美が知ったらどう思うだろうとしきりに考え続けた。いた。

そんな克行の元氣のない様子に、麻美は口にこそ出さないものの密かに不安なものを感じているようだった。

二人は麻美の言うとおりに喫茶店で少しの間時間をつぶすと映画

館へと足を運んだ。最近、仕事のほうがあまりに急がしすぎて好きな映画を観ることもなかったので、克行にとっては映画館に足を運ぶのも久しぶりだった。だが、映画を観ながらも、どうしても克行は今朝の通知のことを忘れることが出来なかった。スクリーンと自分の間に常にあの白い用紙に印刷された文字がちらついて見える気がした。

『――今年のみごとあなたが特権者として――』

そんなもの俺は望んじやいない。

映画を観ている間中、克行はこれから自分がどうなってしまおうだろうという不安に取りつかれていた。

「克行、どうしちゃったの？ やっぱりなんだか今日はいつもと様子が違うわ。何かあったの？」

映画が終わったあとに入ったレストランで、麻美はまじまじと克行の顔を見つめた。すでに六時を過ぎ、外は暗くクリスマスシーズンにだけ光る街路樹に付けられたイルミネーションが美しく街を彩っている。

「そうかな……べつに何もないよ。最近忙しかったからちょっと疲れただけさ」

克行は麻美が不思議がるのを避けるようにつぶやくと食後のコーヒーに手をのばした。実際に自分の今日の態度がいつもと違っていることは克行も気がついていて、けれど、それを隠そうにも今の克行には隠しきれなかった。それほどまでにあの通知は克行の心をしめていたのだった。

（どうしてあんな一枚の通知のために俺はこんなに苦しまなきゃいけないんだ！）

不安で微かに苛立っていた。

「それならいいけど……仕事そんなに忙しいの？ 来週はともかく、再来週はちゃんと予定空けといってね。仕事で会えないなんてこと言わないでね」

克行の心を解きほぐすそうとするかのように麻美はしきりに冗談

めいた口調で喋り笑顔をみせる。

「再来週？ 何かあったっけ？」

「やあね。冗談のつもり？」

「え？」

「クリスマスじゃないの」

美しい夢を見る少女のような口ぶりで麻美はつぶやいた。けれど、そのつぶやきさえも克行の耳には恐ろしい呪文のように聞こえ思わずギクリとした。その日こそが「特権者優遇計画」のメインともいえるフィナーレとなるのだ。人々はクリスマスの華やかさに心を奪われ「特権者優遇計画」などのことなどまったく忘れ去り、そして知らず知らずに何人もの特命者たちが凶弾に倒れることになる。

まるで――

（鼠取り！）

このクリスマスのきらびやかな光が餌になるわけだ。今更ながらにクリスマスを利用する国のやり方に腹がたった。

「そうだね。もうすぐクリスマスなんだね」

弱々しく呟く克行を不思議そうに麻美は見つめた。

「どうしたの？ 本当に今日は変よ。クリスマスに嫌なことでもあるの？」

「いや、そうじゃないけど。ただ、今日部屋を出るときにちょっと嫌なニュースを見たんだ」

「嫌なニュース？」

「特権者優遇計画さ」

さりげなく言った克行の言葉に、さすがに麻美も少し表情を曇らせた。

「そう……そうね、もうすぐその季節だったわね」

特権者優遇計画のことを知らない者は世の中に誰一人としていないだろう。だが、誰もが極力口に出さないようにつとめているし、実際にはその当日まではほとんどの人たちが忘れてしまっている。また、もし口に出すことがあったとしても、単なる話題の一つとし

て喋るだけで、決してそれに対しての不平不満を語ろうとはしない。いつどこで誰がその話を聞いているか、そしてまたいつどこで自分が特命者リストに載るかわからない。そんな恐怖が知らず知らずのうちに心を支配しているのだ。克行も麻美も昨年まではそんな中の一人に過ぎなかった。

「何人くらいが対象になるんだろうな」

克行の何気ない言葉に麻美はびくりと体を震わせた。克行自身その言葉が特権者に対するものなのか、それとも特命者へのものなのかわからなかった。

「やめてよ、怖くなっちゃうじゃない」

そう言った麻美の顔が克行には少し青ざめているように見えた。無理に笑顔をつくろうとする麻美が愛らしく見えた。

克行はそんな麻美の顔を見つめながら、ふとつぶやいた。

「もし僕が特権者選ばれたとしたら……どうする？」

言ってしまうのか？ 言っても心の重みもとってしまいたい。克行の心の中にそんな衝動が走った。

「克行が？」

麻美は驚いたような目で克行の目をじっと見つめた。その目はひどく怯えていた。コーヒーに砂糖をいれようとする彼女の手がぴたりと止まった。

「例えばの話だよ」

「例えば？」

「そうさ、実際にそんなことあるわけないだろう」

麻美の怯えたような態度に克行は真実を語るのを避けた。あえて麻美に伝える必要はない。ほんの一週間のことだ。麻美を不安にさせる必要などない。何とか自分一人で全てを解決してみせる。

「やだ、そんな冗談言わないでよ。そんな話しても仕方ないわ。またいつもみたいに知らないうちに過ぎてゆくわよ。もうやめましよう、その話は」

麻美は再び笑顔をつくると話題を別のほうへともっていった。

（俺だってそう思いたい。だけど、今年だけは去年までのようには
いかないんだ）

克行は麻美の話に耳を傾けながらも心はいつまでも離れることが
出来ないでいた。

死のクリスマスイブ・3

三

十二月 十一日 (月)

「あなたたちは非常に大きな任務を与えられたのです！」

市長は特別会議室の演壇に立ち、大きな体を震わせながら演説を続けている。暖房がやけに効いているせいか市長は体中から汗をふきだし、それはまるで鯨が潮を吹いているように見えた。

克行はそんな市長の姿を眺めながら、子供の頃に深夜のテレビで観た「白鯨」という映画を思い出していた。

特別会議室には内側からしつかりと鍵がかけられ、市の関係者と特権者以外は出入りが許されないようにされている。学校の教室程度の特別会議室のなかには克行を含めて、三十名ほどの特権者が長机を前に座っている。ただし、実際にはここ以外の場所でも同じような説明会がされており、全ての特権者がここにいるとは限っていない。ほとんどの者がその市長のつまらない演説にあきあきしたような顔をしながら市長の演説が終わるのをじっと待っていた。

克行はこれが終わりしだいに会社へ行くつもりで、いつものようにベージュのスーツを着て出席していた。もちろん会社へは遅れる本当の理由を伝えてはいない。体調がすぐれないため、病院に寄ってから出社すると既に連絡済だ。

「この政策はこの日本を、そして世界を救済するために設けられたものです。つまり、あなたたちは世界を救済する者として選ばれたのです！」

ヤニで黄色くなったような歯を剥き出しにしながら、市長のお世辞にもうまいとはいえない演説は続いた。

(よくこれで選挙に通ったものだ)

克行は冷やかな目で市長の姿を眺めていた。多少の緊張感があったが、不思議とそれほどコチコチになるほどではなかったし、昨日通知をもらった時ほどの不安も感じてはいなかった。特権者といってもしよせんただの権利に過ぎない。権利を放棄することで翌年すぐに特命者にされるというのも、根も葉もない噂かもしれない。克行はなるべく楽観的な考え方をするように務めた。ただ、市長の演説を聞いているうちに体のネジがきしんでくるような感覚に襲われていた。そこで、克行は出来るかぎり市長の声を聞かないように心がけながらそつと他の特権者たちを盗み見た。

スーツ姿の四十過ぎのサラリーマン、まだ大学生らしい若者、いったいどんな方法で選んだのだろうと思うほどさまざまな人々が集まっている。

みんな、どんな思いでここに集まっているのだろうと克行は思いめぐらせた。だが、どんな思いであろうとここに集まった者たちはみな、殺人者となる可能性を持っていることだけは確かだ。もちろんそれは合法的なものとしても、それでも人を殺すという行為に違いはない。

ここにいる人たちは皆本当に人を殺すことになるのだろうか。

窓際の前の席に座っている若者が市長の演説に抗議するつもりなのかあからさまにあくびをした。だが、市長はいつこうに臆した素振りもみせず、淡々と演説を続けている。その市長の態度に以前聞いた噂を思い出していた。

——あの市長はずうずうしさだけで選挙に当選したのさ。あいつが市長になりたい一番の訳は特権者優遇計画を自分の思いのままに操りたいからなんだ。それにな、ここだけの話だが特権者の数は国から指定されることになってるんだ。けど、毎年決まって市から指定される特権者はそれよりも一人少なくなってる。なぜかわかるか？つまり、あの市長が自ら特権者になるってことだ。

(なるほど……)

克行は改めて市長を観察した。あの時はまさかと思ったが、この

市長ならばありえる話だ、と克行は市長の狂喜とも言える熱意のある演説を聞き思った。

「この世界を救って下さい！ 人々を救って下さい！ それが出来るのはあなたたちだけなのです！」

突然、市長の叫び声とともに演説が終了した。誰一人として拍手をしようとはしなかったし、市長もまたそれを期待しているようではなかった。

市長が満足そうに演台から下りると、すぐに傍らで待機していた市職員の一人が入れ代わった。

「では、これより「特権者優遇計画」を実施するにおいて、規則、注意等について説明をさせていただきます」

牛乳瓶の蓋のような分厚い銀斑の眼鏡をかけた職員は、そう言うてから一度特権者たちをぐるりと見渡した。気のせいかその目は克行のところでほんの一瞬だけ止まったように思えた。その姿は一種独特な不気味な雰囲気を持っていた。

「まず、みなさんがたの席の前に置かれた封筒を開けて下さい」

市職員の指示に従い特権者たちは自分の前にある封筒に手をかける。

克行もみんなに習い封筒を手にとった。封筒の膨らみで封筒の中身は想像がついていた。紙包みでくるまれた拳銃がそのなかから姿を現す。実際に取り出してみるとそのずしりとくる感触が妙に生々しい。もちろん拳銃を手にするのは初めてのことだ。

「みなさんが手にしているのは今年使用されることになったK-9-6Mという型の拳銃です。これは毎年、ある限定された数だけ国によってこの特権者優遇計画のために作成されたもので、これにあって弾丸も支給されるものはありません。以前にも特権者として登録され弾丸を残されているかたもいるかと思いますがそれらは使用出来ませんのでご注意ください。弾丸は後ほどみなさんが退出する時に各々六発ずつ支給します」

まるでテレビショッピングのコマーシャルでもするようにあっさ

りと市職員は説明し続けた。

「この拳銃ですが、これは実に簡単な操作で実に正確かつ十分なほどの威力があります」

そう言うのと職員は突然、サンプル用の拳銃を構えたと部屋の隅に用意された人形の頭めがけ引き鉄を弾いた。弾けるような火薬の音と共に弾丸が放たれ、人形の頭を吹き飛ばした。その爆音に特権者たちの何人かがびくりと肩をすばめた。

「実際にはこのように人の頭を吹き飛ばすほどの威力はありませんが、それでも殺傷能力は十分にあります」

（つまりそれだけ簡単に人が殺せるということだろう）

克行は心のなかでそう罵った。

「次に規則について説明します。封筒のなかにさらにもう一つ黄色い封筒がありますので出して下さい。ありましたか？　それが今年みなさんに配布される「特命者リスト」です。決して他の人には見せないようにして下さい」

さすがに手が震えた。自分の手のなかに、これから最優先で殺される人々の名簿があるのだ。

「特命者は一人につき、およそ五人の特権者のリストに名前を載せられています。同一の特命者に対して五人の特権者ということで行時にダブルではないかと危惧されるかと思いますが、一人の特権者のリストには三十人の特命者が名前を連ねているのですから、そうそうダブルことはありません。もし、自分のリストに載っている特命者が無事、この世から削除されましたら皆さんのリストでもこまめに削除して余計な手間のかかるようなことを避けるようにして下さい。なお、これは言わずとしたことですが、このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしも、それを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることになります。厳重に注意して下さい。また、その他の規則についてですが――」

市職員はさらに続けた。だが、克行の頭のなかにはさらなる規則の説明よりも、特命者リストのことが頭にひっかかっていた。特権

者のほとんどはすでに封を開け、なかのリストを取り出して見ている。なかには何が楽しいのか笑みを浮かべている者さえいる。

克行は封筒を手にすると思いきって中のリストを取り出した。ざらざらとしたあまり良質とはいえない白い紙に印刷された名前が縦に並んでいる。克行はその名前の列を読みながら、自分の顔から血の気がひいていくのを感じた。

（なぜこんな……こんなことって……どうなってるんだ！）

今にも叫び出したいようなそんな苛立ちにも似た恐怖感が克行を襲った。まるで自分一人だけが群れから取り残され、どこか遠い世界に消え去ってしまうようなそんな感触に包まれているような気がしていた。

克行は震える手で必死にリストを押さえながら回りの特権者たちの行動を見回し、それからもう一度視線をリストへ向けた。

そこに書いてある名前の半数は、克行の見知った者たちだった。会社の同僚、近所の老人、そして……そして何よりもショックだったのはそこに恋人である五十嵐麻美の名前があったことだった。

楽観的に考えようとしていた気持ちなど遠くへふっとんでしまい、代わりに大きな恐怖が押し寄せていた。全身の毛穴から汗が吹き出している感じがした。

克行はその欄を何度も何度も見直した。ひょっとしたら見間違いないじゃないかと思い、同姓同名の別人であることを祈った。しかし、そこに書いてある名前に間違いはなく、住所、そして職業ともに麻美本人と認めるほかなかった。

（なぜ……なぜ麻美がリストのなかに……なぜだ？）

克行は運命を呪った。自分の手のなかに恋人の命がある。しかし、もっと恐ろしいのは麻美の名前の入ったリストをあと少なくとも四人の特権者が握っているということだ。もし、克行のリストにだけ載せられているのなら麻美に危険はない。だが、克行以外にも四人の特権者が麻美を狙うことになる……。しかも、麻美の名前の載ったリストを持っているのが今ここに集まっている者たちだけとは

限らない。特命者リストはあくまでも政府からの依頼でしかなく、特権者には実際には対象を自由に選ぶことが出来るのだ。

（どうしたら……俺はいつたいどうしたらいいんだ……）

克行の頭のなかに麻美の姿がちらついた。麻美の愛らしい笑顔、あの笑顔がこの世から消える……。そう思うたびに克行の心はかきむしられるような苦しみに襲われた。

「あんた、大丈夫かい？」

隣に座っていた三十過ぎの男が克行の顔を覗き込んだ。だが、その顔は決して心から克行のことを心配してはいない。ただの興味本位でしかないことはすぐにわかった。克行は慌ててリストを封筒のなかに突っ込んだ。

「い……いえ……」

「あんた、今年が初めてなんだろう」

男はにやりと笑って言った。その男の落ち着いた素振りに克行は不思議そうに男を観察した。

黒いダブルのスーツに黒のネクタイ、まるで葬式に行くときのような格好だ。

「俺は立花勇作ってんだ。よろしくな」

男は名乗って左手を差し出した。

「え？」

「えっじゃないよ、ただ名乗ってるだけだ。別に特権者同士が名乗りあっちゃいけないって規則はないだろ。さあ、握手だ」

立花は克行の手を取ると無造作に握手した。それは握手というよりも一方的に克行の手を振り回しているというほうが近かった。

「で、あんたは？」

「風間です。なぜ僕が初めてだとわかったんですか？」

「そんなの一目でわかるさ。そんな拳銃おもちゃを握って震えてるなんて、初めてに決まってるじゃないか」

「あなたは何回目なんですか？」

「俺かい？ 俺は三度目さ」

立花は自慢げに答えた。

「そうですか、それじゃ拳銃のほうも慣れてるんですか？」

「慣れてるよ。けど、俺はもともとそういう仕事なんですね。慣れるのが当然なんだ」

「仕事？」

「警察官なんだ」

「警察官？」

克行はどきりとして立花を見返した。人々の治安を守るべき警察官が殺人者の予備軍として克行の目の前に座っている。そのことに克行は不気味な感じを抱いた。

「変かい？ 警察官が人を殺すのは。だが、特権者優遇計画ってのは別にどんな仕事をしていようがそれなりの資格がありゃあ特権者になってもいいものなんだぜ。警察官だろうが医者だろうが、それこそ政治家だろうが……」

立花はヒヒヒと薄きみ悪く笑うとじろりと辺りを見回した。「見なよ、現にあっちのは医者だぜ。それにあっちのは学校の教師とくらあ」

立花は一人一人克行に説明していく。克行もそれに合わせて一人一人顔をじっくりと眺めていった。やけに神経質そうな者もいれば、自分の置かれた立場など気にも止めていないような態度でぼんやりと窓の外を眺めている者もいた。だが、ここに集められた特権者たちはどこか、一種独特な雰囲気を持っているように克行は感じた。

（このなかに麻美の名前の入ったリストを持っている者がいるかもしれない。ひよっとするとこの男が……）

克行は思いをめぐらせ、一人一人の顔をしっかりと覚え込むように心がけた。

「どうだい、こうやって見てるとなかなか面白いだろう。俺なんかここに来るだけでもう嬉しくなっちゃまう」

「嬉しい？」

「そうさ。なんといっても天下御免で人を殺すことが出来るんだぜ。」

そんな楽しいことはないじゃないか。それに人間、死を間近にする
と心が表に出るのさ。普段見ることの出来ない人間の浅ましさがじ
つくり眺めることが出来る。こいつぁ、どんな芝居よりも面白いぜ。
赤の他人が死ぬのにどうして躊躇する必要がある？」

「けど、特命者リストには――」

「特命者リストには自分の知らない人間しか載っていない。もちろ
んリスト以外の人間を殺すのも特権者の自由だがね」

克行は立花の言葉に一瞬哑然とした。

「それ、本当ですか？」

「何が？」

「本当に知らない人の名前しか載らないことになってるんですか？」

「そりゃそうさ。いくら何でも顔見知りの名前は載ってないだろう。
そんなことをしたらさすがに殺しをためらう奴も出てくる。もちろ
ん俺は別だがね。なんだ？ あんたのリストには知り合いの名前で
もあるのかい？」

「……い、いえ」

克行は口ごもりながらも答えた。自分のリストだけがなぜ他の特
権者たちと違うのかそれはわからない。だが、この男に克行の置か
れた立場を知られたくはなかった。

「なら問題はない。一人くらい顔見知りが入っていたところで三十
人のうちの一人だ。気にすることなんかない。もし、他に殺したい
奴がいるなら別にリストに載ってなくたって構わない。殺っちまえ
ばいい。ただ、そうなると来年は特権者になりそこなうかもしれない
がね」

立花の言葉はまるで市の圧力そのものに感じられた。克行は言葉
を返すことも出来ず汗ばんだ手でリストを握りしめていた。

死のクリスマスイブ・4

四

全ての説明が終わったのは十一時を少し回った頃だった。市長の演説分だろうか、予定よりもほんのわずかながらオーバーしている。特権者たちは皆それぞれ茶色の封筒を片手に市役所を後にした。

克行は足取りも重く、ゆっくりと会議室を出た。誰かにリストのことを問いただしたかった。だが、そんなことが出来るはずもないし、聞くことも怖かった。

（「だから何の問題があるというんです？ あなたは特権者でこの女は特命者選ばれた。あなたはこの女を殺さなければいけないんです！」）

もしそんなことになったら……。

会議室から市役所のロビーまでは十六段からなる階段四つと二十メートルたらずの廊下でつながっている。そのあちらこちらに大理石のテーブルが置かれ、その上に花が飾られている。

（何て嫌味な……）

克行はその花全てをひっくり返して歩きたい衝動に刈られた。花は今日に限ってか全て真っ赤なバラで統一され、その色は克行にどす黒い血の色を連想させた。

克行はなるべくその花から視線を逸らしながら、とぼとぼと出口の方向へと歩いて行った。頭の中は今カバンのなかに入っているリストのことについてになっている。ふと、どこからか誰かを呼ぶ声が聞こえてきたような気がした。だが、そんなことなど今の克行にはどうでもいいことに思えた。

「克行！」

声はもう一度克行の耳に届き、克行もやっとそれが自分と呼ぶ声だということに気づいた。振り返るとベージュのスーツを着た若い

女性が走り寄ってくるのが見えた。その姿に克行は思わず驚きの声をあげた。

「涼子……」

三浦涼子とは大学時代に一度つき合っていたことがあったが、卒業以来一度も会っていなかった。

「久しぶりね」

涼子は軽快な足取りで走り寄ると懐かしげな視線を克行に向けた。長い髪がさらりと肩口で揺れている。

「どうしてこんなところにいるの？」

克行は涼子を見つめて言った。初めて見る涼子のスーツ姿がやけに大人っぽく感じられた。

「働いてるのよ」

「働いてる？　ここで？」

克行は驚いて涼子を見つめた。涼子のもっと野心家だったはずだ。役所で事務員をやっているということは涼子には似合わないように思えた。

「そうよ。私らしくないかしら」

克行の心を読んだかのように涼子はクスリと微笑んだ。「それよりも克行こそどうしてこんなところにいるの？」

「……」

克行は何と言っているのかわからず目をキョロキョロさせた。その克行の様子にさすがに涼子も気づいたようだった。

「まさか……克行が……？」

「ああ……」

克行はなるべく涼子の目を見ないようにして頷いた。涼子もまた市の職員だということが克行の心を暗くしていた。涼子もまた、そんな克行の心中を察したのか言葉を選ぶかのように視線を動かして誰にも見られていないことを確認するように周囲を見回した。それから、思いついたように克行の目を見据えると言った。

「ねえ、克行、今時間ある？」

「時間？」

「うん、ちょっとつき合って欲しいの。どっかでコーヒーでも飲みながら話でもしない。克行と会うのも久しぶりだしね」

その言葉の裏に克行は涼子が何を話そうとしているのかすぐにわかった。

「いいよ、少しくらいなら。おまえのほうはいいのか？　まだ仕事じゃないのか」

「もう十一時を回ってるわ。もうすぐお昼じゃない。どうせお役所仕事だからさほど忙しくもないし、それに他の仕事と違って仕事に期限がないようなものよ」

涼子はそう言って笑った。その笑顔に克行は彼女の暖かい心づかいを見てとれた。

克行と涼子の二人はそのまま市役所を出ると少し市役所から離れた喫茶店に入った。市役所の近くの店には入りたくないと言った涼子が言い、克行もまた同じように思ったからだ。ただ、その涼子の言動は克行にはひどく危険なように見えた。

涼子はそこでコーヒーとサンドイッチを、克行はコーヒーだけを頼んだ。まださっきのことが頭にこびりついていて、とても食事をする気にはならなかった。

「それにしても本当に久しぶりね」

涼子は改めて克行の顔をじっと見つめ直した。その潤んだ瞳はつき合っていた頃とまったく変わっていない。それだけに克行はその涼子の眼差しがつかう感じがされた。涼子と別れたのは彼女のことを嫌いになったためではなかった。ただ、まだ若かった克行にとって涼子のひたむきな愛が重荷に感じられたのだ。

「……うん」

「それで？」

克行の思いを察したかのように涼子はすぐに話題を変えた。

「……うん」

どう話していいものか克行は迷った。

「特権者に選ばれたんでしょ」

「先週通知が届いたんだ」

「どうして克行が選ばれたんだろう」

涼子はまじまじと克行を眺めた。

「俺にもさっぱりわからない。確かに俺は刑事事件を起こしたわけでもないし、市や国に反することをやってるわけじゃない。でも、別段模範市民ってこともないと思うんだが――」

「そうね。本来なら――というより、去年、私が委員をやった時なら克行は決して特権者になんか選ばれる立場じゃなかったと思うんだけど」

「委員をやってた？」

「そうよ、去年だけだけどね。ちょっとしたお手伝いみたいなものよ」

軽く笑って答える涼子の様子に克行は時間の流れをひしひしと感じた。

「それじゃ選定方法が変わったのか？」

「さあ……」

涼子は一つサンドイッチを取り上げ口に運んだ。

「おまえはどうして今年は特権者計画実行委員にならなかったんだ？」

「つまらないのよね……」

「つまらない？」

「そう、私は国の中枢で働きたかったの。いろいろ手を回したんだけど駄目だったの。だから仕方なく市役所に入ったんだけど。特権者優遇計画って国からの指示によるものですよ。うまくいけばどこかの国家機関に入れるんじゃないかと思って志願したの。でもやってみたら全然そんなチャンスもなかったわけ」

「それじゃ辞めればいいじゃないか」

克行はインスタントじゃないかと思えるほど粉っぽいコーヒーを口にしてから言った。すると涼子はいとも簡単に答えた。

「うん、私も今それを考えてる」

あまりに簡単な返事に克行は驚きの目を涼子に向けた。

「本当か？」

「本当、もうほとほとあんな市役所なんか嫌になっちゃった。別に仕事が好きじゃないわけじゃないの。仕事は楽だし給料だって悪くない。ただ上司とうまういかなきゃ先だって見えてるようなもんでしょ」

「そう……」

「でも辞めるって決めたら楽になっちゃった。やっと私も自由になれるわ。ただ――」

涼子は突然表情を厳しくした。

「ただ――」

「心残りが一つ出来たわ」

「出来た？」

「克行のこと」

「俺の？」

「克行が特権者に選ばれるなんて……まったく思いもしなかった」

「そんなおまえが心配するようなことじゃない。いくら特権者に選ばれたからって何もその権利を絶対に使用する必要はないんだ。特命者にならないだけ良かったんだ」

克行は自分の心のなかにある不安すらも吹き飛ばすよう、わざと明るく振舞おうと試みた。だが、涼子はいっこうに表情を崩そうとはしない。それどころかますます表情を固くする。

「本当にそう思っているの？ 本当にそれで済むと思っているの？」

「どうということだ？」

「克行が特権者に選ばれるなんてどこか間違ってる。今年の特権者優遇計画は去年とはまるで違う」

涼子の目は真剣そのものでさっきまでの表情とはまるで違っている。克行は突然、思いもしない恐怖にさらされているような気持ちになった。

「それじゃ、おまえは俺が特権者に選ばれたのはどんな意味がある

って言うんだ？」

克行は声を潜めて尋ねた。「特権者」という言葉を発するたびに自分自身に何か悪いことが起きるような気がしたし、さらに店のウェイトレスや客に聞かれたくなかった。

「それがわからないのよ。だからこそかえって不安になる。そもそも「特権者優遇計画」なんてものは間違った政策よ。それが毎年のように行われる。しかも国民のほとんどが知っているようにまるで知っていない。そんなものの裏にまともなものが潜んでいるわけないでしょう。それに私がそう思うのはもう一つ理由があるの。実はこれは噂なんだけど、特権者優遇計画の上でクーデターみたいなことが起きたらしいの。もしかしたらそれが影響しているのかもしれないわね」

確かに涼子の言う通りかもしれない。克行は特権者に選定される通知をもらってから得体の知れない不安にかられていたが、涼子の言葉を聞きその不安の姿が一部見えたような気がした。

「これを見てくれないか」

克行は涼子に全てを打ち明けようと思い、今日手渡された書類をテーブルに出した。

「これって特命者リストじゃないの」

「そうだ、こいつは俺が受け取ったリストだ。よく中を見てくれ。俺は今日同じ特権者に選ばれた男から少し特命者について聞いた。その男が言うには特命者というのは特権者にとってまったくの第三者的な人間が選定されていると言うんだ。つまり知り合いがリストのなかにいるはずがないって」

「その通りよ。まったく知らない人間ばかりというわけじゃないかもしれないけど、それでも直接的な知り合いと思われる人間はリストのなかには入れないことになってるわ」

「ところが、俺のリストのなかに入っている特命者の半数ほどは俺の直接的な知り合いなんだ」

「何ですって？」

思わず涼子が驚きの声をあげ、その声に店にいた人々の視線を集める事になった。涼子はすぐに声のトーンを低くして喋り始めた。

「知り合いが？ そんなはずないわ。有り得ない」

「本当なんだ。その有り得ないことが、俺のリストのなかには起こってるんだ。同姓同名ってことも一瞬考えた。だが、全員調べたわけじゃないが住所や職業、電話番号、どれを見てもそれは俺の知っている人なんだ」

克行の心のなかに麻美の姿があった。自分の持つ特命者リストのなかに麻美が入っている。そんな悪夢のような出来事から早く逃れたかった。

「……やっぱり何か間違ってる」

涼子の目がぼんやりと遠くを見つめるようになっていた。

「涼子？」

「いいわ」

突然思い起こしたように涼子の視線は克行を捕らえた。

「どうしたんだ？」

「三日だけ待ってちょうだい。その間に私が調べてみる」

「調べる？」

「ええ、おそらく今年も特権者優遇計画に関する資料は、パスワードくらい変わっていても去年と同じディスクに入っていると思うわ。調べるくらいわからないわ」

「だけど、おまえ今年は実行委員からはずされただろう。そんなことしても大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。少しくらいディスクのなかを見たってバレやしないわよ。それにバレたところで何てことないわ。どうせ市長に恨まれたところで特命者リストに加えられるだけじゃない」

冗談交じりに涼子は言った。克行は驚きの目で涼子を見た。しかし、涼子のほうはまったく動じることなくニッコリ笑うとおもむろにバッグを開いて中を見せた。バッグの奥に何か黒い金属の固まりが見えた。

「それ……」

「スタンガン、FBC2X、克行も名前くらい知ってるでしょう」
克行もそのスタンガンのことだけは知っていた。見たことはないが聞いたことはある。三年も前に売り出されたものだが、売り出されてすぐにある事件にこのスタンガンの名前が出たことがある。事件そのものはどこにでもある婦女暴行事件だった。深夜、帰宅途中のOLが近所の大学生に襲われそうになったというものだった。だが、結末は他のものとは違っていた。襲われそうになった女性がこのスタンガンを持ち歩いていたのだ。スタンガンは通常のものよりも三倍もの電流が流れるようになっており、さらにその電流の発せられる部分はバネ仕掛けで目標に向かって十メートルは飛ぶようになっていた。あいにく夏の暑い時期で大学生はTシャツ一枚という姿だった。その裸同然の心臓部分にスタンガンは噛みつき、一気に電流を放電したのだ。大学生は一瞬のうちに硬直状態になり、騒ぎに駆けつけた住人によって救急車で運ばれたがそのまま目覚めることはなかった。あまりにも強力なそのスタンガンはその事件で社会的な問題にもなったが、その反面女性の強力な味方として人気を得ることになった。結局、スタンガンは改良され通常のものとの二倍程度の電流に押さえられることになった。

今、涼子の持っているものは改良後のものではなく、旧式のもののように克行には見受けられた。

「おまえ、いつもそんなもの持ち歩いてるのか？」

「いつもじゃないわ。特権者優遇計画を実施期間中だけ、職員には皆これが配られることになっているの」

「何のために？」

「市で選んだ特権者に逆に命を狙われないためよ。私もまだこんなもの使ったことはないけどね。いくら何でもこいつを使うことにはならないでしょう」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、そうすれば克行がなぜ特権者に選ばれたのか調べられる」

「それならもう一人調べて欲しい人がいるんだ」

「誰？」

「特命者リストにある五十嵐麻美、彼女がなぜ特命者になったの調べられないかな」

言い出しづらかったがそれでも言わないわけにはいかなかった。

危惧した通り麻美の名前に涼子の顔がこわばった。

「誰なのこの人？ ひょっとして克行の恋人？」

「……うん」

二人の間に一瞬冷たい空気が流れた。一瞬、涼子がきつく唇を噛んだのが見えたが、それでも何も深くは聞こうとはしなかった。

「いいわ、そのリスト、今夜にでも私のところにファックスで送って」

涼子は克行から視線をそらすとポケットから名刺を取り出すとその裏に自分の携帯電話の番号と、ファックスの番号を書き込んだ。

「頼むよ」

克行はその名刺をクリップで特命者リストにはさむと書類といっしょに封筒のなかに入れた。

死のクリスマスイブ・5

五

克行がマンションに戻った頃にはすでに昼を過ぎていた。市役所に寄った後、そのまま会社へ向かうつもりでいたが、今ではそんな気持ちも失せてしまっていた。自分の持つ特命者リストのなかに、会社の人たちも数名載っている。彼らにどう対応したらいいかわからなかった。それに何よりも拳銃を持ったまま仕事をする気にはならない。

克行はコートを着たままダークグレイのカーペットへ腰を降ろした。まだエアコンがきいていないために、部屋の空気もカーペットもひんやりとしている。

克行はバッグのなかから書類を出してテーブルの上に広げた。拳銃の入った包みがコトリと音をたてて落ちる。

そっと包みを開くと黒く真新しい小型の拳銃が姿を現した。見た目は玩具の拳銃と変わりないのに、実際に握ってみるとそのずしりとくる重さで、それが玩具などではないと改めて実感させられる。弾倉にはまだ弾は装填されていない。試しに拳銃を操作してみると思った以上に扱いが簡単に出来ていることに驚いた。説明書のようなものが一枚封筒に入っていたがそれを読まずとも扱うことは出来そうだった。

見ると小さな透明のプラスチックのケースに金色の弾が六発、綺麗に並べられて入っている。一つ一つには丁寧なナンバーがふられている。克行の弾丸にはTR13-TX-6001から6006までのナンバーが刻まれている。このナンバーによって、誰が殺つたものか判断するためなのだろう。

（まるで小学校の時の無記名アンケートと同じだな）

克行は心のなかで嘲った。

克行が今でも憶えている小学校の時のアンケート。それは教師が子供たちに無記名だということをくどいほど説明した後、結局は席順ごとに並べて回収されるという卑怯な手段のものであった。そしてそれは子供たちが秘密にしておきたいものに対してほど行われた。もちろんそれが実行出来たのは低学年のうちだけだったが、それでも克行はそのからくりに基づいたとき教師に対して強烈な不心感を抱いたことを今でも憶えている。

克行はケースのなかから一つ取り出し、試しに一発だけ弾倉に装着してみた。ガチャリという音で弾倉が拳銃の中心に吸いこまれてゆく。まるでそれを待っていたかのように。この型の銃は外側からは弾の有無を判断することは出来ない。

何の気なしに部屋の隅の花瓶に狙いをつける。ふと、妙な感覚が心のなかに走る。そして、同時に今まで知らなかった自分が眠りから醒めるようなそんな不安が湧き上がる。

克行の瞼にヘラヘラ笑いながら楽しげに拳銃を乱射する男の姿が蘇った。

寺泉とか、泉谷とか、確かそんなような名前だったと克行は記憶している。

昨年の冬、克行が特権者優遇計画を初めてこの世のものと実感した時だった。深夜、仕事の帰りに克行は駅のホームで最終より二、三本前の電車を柱に寄りかかるようにしながら待っていた。ホームには克行と同じように仕事で疲れ今にも眠りこみそうにしている中年のサラリーマンや、デートの帰りらしいカップルがベンチに座りながら話をしている。少しして克行は泥酔状態でふらふらとホームの端から端を歩いている男が目に入った。男は電車を待つ人々に一々何かをつぶやきながら、ただふらふらと歩いていた。たいがいの人たちは男が何を言おうと何をしようと無視して構おうとはしなかった。男はベンチで身を寄り添わせているカップルにも同じように近寄り何かをつぶやいた。それはたんなるカップルに対する冷やかしのものだったのかもしれないし、あるいは女性に対して卑猥な言

葉でからかったのかもしれない。どちらにしてもさほどたいしたことでないことだろうと克行は見ていた。しかし、それに対し青年はからかわれたことに怒りを覚えたのかすつくと立ち上がり、そして泥酔している男に対して怒鳴り始めた。

「おまえには関係ないだろう！ どっか行け！」

青年の声は離れた場所にいる克行にさえ聞き取ることが出来た。

周りの人たちはやれやれとばかりにぼんやりと横目でちらちらと見ている。

青年は二度、三度男を突き飛ばし男が黙っているとジロリと睨つけさつさと彼女のいるベンチへと戻って行った。

アナウンスが聞こえ電車が入ってくることを伝えている。

誰しもこれで酔っ払いと青年との争いは終わったのだらうと思っただ。青年もすっかり深夜に出会った酔っ払いのことなど忘れてしまったかのようにベンチから立ち上がり入ってくる電車に合わせるようにホームで二人立っている。しかし、酔っ払いは真っ直ぐに背を向けている青年の背後につかつかと近寄ると何か黒いものをポケットから取り出し青年に向けた。

ズガン！

克行の目に、一瞬スローモーションのように写し出された。

青年の体はつんのめるように軽く前に浮き上がり、重量の法則に従いそのまま電車のはいつてくるレールの上へと落ちていった。

電車の急ブレーキ。

女性の叫び声。

そして、男のへらへらとした笑い声。

聞こえるはずのないもの、聞こえなければいけないものが交差しあいごちゃごちゃになって克行の耳へ届く。

男は青年を撃ったことで自制心を失ったのか、それとも酔っ払っていたことでもともと失っていたのか、触覚を失ったアリのよう

うろろうとうろつき、至る所に拳銃を乱射しはじめた。当然のように誰も男を止めようとはせず、逃げ惑うだけだった。克行も例外ではなくただ驚くばかりで何をすることも出来なかった。結局男は拳銃に装填されていた全部の弾丸を撃ちつくし、それでも撃ち足りないのか弾丸の入っていない拳銃をカチリカチリと鳴らしているところを鉄道警備員に取り押さえられた。

男が特権者でそれがわかりしだい釈放されたということを、克行は翌日の朝のニュースで知ることになった。

本来、特権者優遇計画で犠牲（国に云わせれば受刑）になった者は被害者として扱われない。そのためマスコミでも事件として発表しない。しかし、この時はあまりにも事件が大きすぎたためにほんの二、三分だけが放送されることになった。それでもキャスターが淡々と、事件のことを報じた後でこれは事件ではないという意味のことを付け加えた。

男の名前は忘れてしまったが、男の顔だけは忘れることが出来ないでいる。

（今度あの男がどうなったのか涼子に調べてもらおう）

今の自分の姿がああ男の姿にだぶるようなそんな嫌なイメージが克行の頭を霞め慌てて弾丸を取り出すと銃をテーブルの上に投げ出した。

拳銃は軽く二、三回テーブルの上をクルクルと回ると銃口を克行のほうへ向けてピタリと止まった。それはまるで

（「おまえが撃たないのなら、俺がおまえを撃ってやるぜ！」）
と言っているようだった。

克行はすぐに銃をもとのように紙包みに包みどこにしまおうかと思案した。部屋には克行しかないのだから、どこへしまっても良かったのだがそれでも出来るだけ目につかない場所へ、そしてすぐに何かあったら手が届き忘れてしまうようなことがないところへ置いておきたかった。部屋の家具といったらほとんどが棚の類いで引き出しのあるようなものは一切見当たらない。部屋を見渡した結果

克行はベッドの引き出しへしまうことに決め、その一番奥へ拳銃を突っ込んだ。

（これで拳銃はいい、あとは……）

克行の目に市役所からよこされたいくつかの特権者優遇計画に関する書類が目についた。一番上に黒い厚手の表紙のついた特命者リストがある。

克行は恐る恐る手をのばし、もう一度リストを開いた。今度は市役所で見た時よりも一人一人じっくりと確認していく。確認のうえ別人であればいいと何度も思いながら確認していく。けれど、克行の祈りは通じることなくやはりその多くは克行の知った人々の名前だった。そのなかでも何よりも麻美の名前がひととき大きく克行には見えた。そしてそれは他の特権者にも同じように麻美の名前が特に目立って見えるのではないかという錯覚さえも引き起こした。

（五人、俺をいれて五人の特権者が麻美の名前の入ったリストを持っている）

そのことが何よりも心配だった。もし、自分のリストだけに麻美の名前があつたなら何の心配をすることもないだろう。来年特権者を外されることを、最悪の場合自分の名前が特命者リストに載ることを覚悟すればいいだけの話だ。麻美に銃を突きつけられるよりも自分に銃を突きつけられたほうが数倍気楽でいられるだろう。

（だが、今年銃を突きつけられてるのは俺じゃない。麻美なんだ）

克行の心のなかには暗く、重々しい影が広がっていた。例えばそれが参考リストとはいってもリストに載っているのと載っていないのとは大きく違ってくる。

（何とか救えないだろうか）

克行は書類を袋から出し、その規則や条文を読み始めた。そのなかから麻美を救う手段をなんとか捜し出したかった。しかし、そこに書いてあるのは本当に簡単な今日あの分厚い眼鏡をかけた市職員が喋った以外のことは一切載っていなかった。確かに憲法のように

細かく規則が載っていたところで裁判に持ちこむことが出来るわけもなく、市に麻美の名前をリストから削るように進言することも出来ないだろう。一つだけ特命者のリストからの削除という項目があったが、それはまったく話にならない。特命者リストから外される条件は唯一その当事者が特権者優遇計画の直前に死を向かえた場合、または他の特権者によって受刑になった場合だけなのだ。いずれにしても特命者の未来にあるのは死だけしかない。一週間逃げ続ければいいなどという考えも基本的に無意味な考えだ。なぜなら特命者リストに名前が載ったことは発表されるわけでもなく、また特権者が特命者に伝えたとその特権者は処罰（内容は不明）されることになっている。

（処罰？）

克行の心にある一つの思いが走った。

（処罰？ そんなものくらいで麻美が救えるのなら……。それに特命者全員は無理だとしても麻美だけならば伝えたところで市役所にばれることだってない。そうだ、麻美に特命者リストに入っていることを伝えて一週間特権者から逃げればいいんだ）

それはごく単純な考えかただったが、暗闇のなかを暗中模索してきた克行にとって一筋の光となって未来を照らしているように思えた。

RRR……

突然、携帯電話の電子音が部屋中を満たした。部屋はすでに暖まり少し暑くさえ感じ出している。克行は思い出したようにコートを脱ぐとベッドへ投げ出し、その手で上着のポケットのなかから携帯電話を取った。

「はい」

——風間さんですか？

会社の後輩である磯崎和歌子の声だった。

「ああ」

——体、大丈夫ですか？

「体？」

——医者に寄ってから出社するって言ってましたけど。休まれるんですか？

磯崎和歌子の言葉に克行は具合が悪いと嘘をついたことを思い出した。時計を見るともう一時を過ぎている。

——もしもし……あの、そんなに悪いんですか？

克行の下で働いていることもあってかその声は本当に心配しているようだった。

「いや、そんなこともないけど……でも念のため今日は休ませてもらうよ」

実際に熱があがってる気がした。

電話をしてきたのが彼女でよかったと克行はほっとしながら答えた。彼女の名前はリストのなかに載ってはいない。今日はリストに載っている当事者とはまともに話が出来そうになかった。

——何か用事ありますか？ 仕事のことで何か。

「そう……特に思いつかないな。この前頼んだプログラム、明日までに仕上げられるかい？」

——はい、大丈夫です。あ、西崎さんに変わりますか？

同僚の西崎の名前に克行はびくりと身構えた。西崎の名前はリストの十三番目に載っている。電話の向こうで電話が微かに西崎に送られる気配がした。

「いや、いいよ。別に用事はないから」

克行の言葉で西崎の出る気配が消える。

——そうですか。他に何か？

「ないよ、明日は出社するよ。それじゃ、明日」

——はい、お大事に。失礼します。

「さよなら」

克行は静かに、けれど素早く切った。

死のクリスマスイブ・6

六

十二月 十二日 (火)

駅から歩いて約五分、そのオフィスビルの七階に克行の務める会社がある。

そのビルにあるのは克行の会社ばかりでなく、他に五社ほどがビルを借りていて、そのためかあまりセキュリティは厳しくなく、誰でも自由に出入り出来る。克行の会社では七階から九階の三つのフロアを借りている。社員数は約二百人、このビルではその半分ほどが働いており、他の社員たちは皆顧客先での勤務が多い。

九時十五分、克行はいつもよりも少し遅く出社した。今ではフレックスタイムの導入は常識のようにはなっていない。もちろん克行の会社も導入してはいるが、克行の会社の場合顧客との密接した打合せなどが頻繁なためそうそう遅く出社するわけにはいかないため、社員のほとんどが九時までには出社するようになっていた。

「おはようございます」

オフィスに入るとすでに仕事に入っていた社員たちが顔を見上げた。

「おはよう」

克行は出来るだけ視線を避けるようにしながら自分の席へと歩いていった。克行のいるフロアは若い社員たちで占められ、管理職以外は克行と同年代か年下の者が多かった。

「よう、体大丈夫か？」

席へつくとすぐに向かいの席の西崎が声をかけた。西崎とは同じ年に入社し、その後ずっと同じ課で働いてきていた。日焼けしたその顔はスポーツマンらしさを誇示しているようにも見えた。

「たいしたことないよ」

「良かった、今おまえに倒れられちゃ大変だからな」

西崎はそう言って笑った。その笑いすら今の克行には苦痛に感じた。

（おまえの命は今、危険にさらされてるんだぞ）

そう忠告してやりたかった。だが、そんな忠告が出来るはずもなく、それどころかなぜこの男が特命者リストに載せられるのだろう、と好奇心すら覚えた。

実際、特命者リストのなかに登録されている人たちのなかに克行の知っている人たちは何人もいるのだが、なぜその人たちが特命者リストに登録されているかそれがまったく克行にはわからなかった。

「あ、そうだ……風間、おまえのことを部長が呼んでたぞ」

「部長が？」

「おまえ何かしたのか？」

西崎は冗談めいた口調でそう言うと、克行の答えを待たずにすぐに仕事に戻った。それは今の時期まったく当たり前の動作で克行も気にならなかった。それほど皆仕事に追われているのだ。

オフィスの一番奥の部長席を見ると、部長の桜川が克行の出勤に気づいた様子でこちらを見ている。

部長の桜川登は今年ですでに七十八歳を向かえている。八年前高齢化社会により政府は年金支給年齢をついに八十歳以上と決めた。その影響で企業の定年年齢も引き上げられたために桜川は今でも現役として働き続けている。すでに頭は剥げ上がり、残っている髪もほとんどが白く変わっている。

克行は所せましと並んでいる机のわきの通路を通過して部長の席へ歩いていった。足がやけに重く感じる。

「やあ、体の具合はどうかね？」

克行が近づくと桜川は相手を探るような目で言った。

桜川の名前は特命者リストに入っている。

（なぜ、部長が？）

克行は不安になった。桜川が知っているのではないかと克行は危惧した。これまでも体調を悪くして休んだことがなかったわけではない。だが、そんなこと今まで尋ねられたことなど一度もなかった。それどころかこれまで桜川とは口をきいたこともほとんどなかったからだ。

「……ええ、もう大丈夫です。けど……なぜです？」

「ああ、いや……」

克行の問いに桜川は言い難そうに目をそらした。

「どうかしましたか？」

「いや……べつに……ただ会社も今だいぶ忙しくなってるんで体でも悪くしたんじゃないかと思ってね。君、昨日休んだらう。大丈夫かね」

その言葉の様子に克行は、桜川がもっと別のことを聞きたいのだと察知した。それは克行が最も知られたくないことだろうということも。

（部長は昨日何があったか知ってる……でもなぜ？）

克行は当惑した。もちろんそれは克行の想像でしかないし、桜川が知っているなどということを信じたくもない。だが、桜川の不可思議な言動は克行の心を揺り動かした。

「風間君？」

桜川の声に、克行は我にかえった。

「は、はい」

「君、本当に大丈夫かね？」

「ええ、もちろんです」

克行は平静を装った。

何かが起こったのはその日の夕方だった。克行はあの後何も考えないように務めた。特権者優遇計画のことを一切忘れ、仕事だけに意識を集中した。

だが、一本の電話が鳴ったことで事態は急変した。

——やあ、風間さんかい？

一瞬克行には誰からの電話なのかわからなかった。

「どちら様でしょう？」

克行の頭のなかを顧客先の人たちの顔がいくつも横切って行く。

だが、どれもその声に該当するものはなかった。

——俺だよ、俺、立花だ

克行の頭のなかが真っ白になった。

「立花……」

——そうだ、昨日市役所で会ったろう。忘れちゃったわけじゃないだろう

もちろん憶えていた。特権者に選ばれることを唯一の楽しみとしていた警察官。克行は一瞬自分が過去に大きな犯罪を犯したことのある人間に思えた。これは刑期を終えて出所した受刑者が昔刑務所で知り合った受刑者に会うのに似ている。ほんの少しの間忘れかけていた計画のことが一気に蘇ってきた。

「……なんでしょう？」

克行は周りの社員に気づかれないようにしたが、それでも声はやけに重々しく変わってしまった。はす向かいの席の磯崎和歌子がちらりと克行に視線を向ける。

——今日、何時頃仕事終わるんだい？

「え？」

——ちよつと会えねえかなあ

「なぜですか？」

——聞きたいことがあるんだ。それにせっかく知り合えた仲間じゃないか。少しくらいつきあってもいいだろう。俺、今日非番なんで暇を持て余してるんだ。

「仲間」その言葉がなおさら克行の心を重くした。

「今どこにいらっしゃるんですか？」

——あんたの会社のすぐそばさ

克行はどきりとした。そういえば先日はただ名前を教えただけで

克行がどこに勤めているかを教えたつもりはなかった。もし、教えただところで大手の会社と違ってすぐにわかるようなものでもない。それなのに立花は昨日の今日でもう克行の職場まで電話をかけてきている。

——おい、どうしたんだい？ 会ってもらえるのかい？

「は、はい。それじゃ——これからどうですか？」

——これから？

「ええ、三十分くらいならいいです」

——かまわんよ

「それならロビーで待っていてもらえますか。すぐ降りて行きます——待ってるよ

プツリと電話が切れる。

克行は少しの間茫然と電話を見つめていたが、やがてしかたなく立ち上がった。本来ならば二度と会いたくない相手だ。しかし、もし今日会えないと言ったところであの男はきつと明日、明後日また連絡してくるだろう。それに、なぜあの男が克行に会いたがっているのかその理由も気になった。あの男は「仲間」などという感情で動くような男ではない。もっと何かあの男にとって大事なことがあるのだろう。

克行がロビーに降りると立花がソファに座ってのんびりと煙草を吸っているのが見えた。

「よお」

立花は克行を見て軽く手をあげ立ち上がった。昨日と同じ上下黒いスーツを着こんでいる。

「お待たせしました。さあ、こちらへ」

克行は事務的な口調で、立花をうながして地下へ歩き始めた。地下には三件ほど喫茶店が入っており、よく顧客との打合せはそこで行われていた。本来、会社のそばで特権者優遇計画に関連する行動はとりたくなかったが、それでも立花と二人でどこかで話すというのは気がすすまなかった。何よりここならばあまり時間ととらずに

済むと考えた。

克行は喫茶店のガラス窓からなかを覗き、知り合いがいないのを確かめてからなかに入って行った。

克行たちは奥のなるべく周りに人がいないところを選んで座った。

「なんでしよう」

克行はウェイトレスにコーヒーを頼んだ後さっそく立花に尋ねた。

「何か聞きたいことがあったんでしよう」

「まあな」

立花はとぼけるような感じできよろきよろと周りを見渡した。

「それならどうぞ、仕事の都合であまり時間がないんです」

「そうかい、それじゃてっとり早く済まそうか……あんたの会社に桜川って部長さんいるよな」

「桜川部長？」

突然出てきた桜川の名前に克行はどきりとした。だが、次の瞬間その意味を悟った。立花の特命者リストにも桜川の名前が載っているのだ。

「いるだろう？」

「ええ——でも、なぜです？」

克行はわざととぼけて聞いた。

「いや……どんな人なのかと思ってね。それで出来たら……」

ウェイトレスがコーヒーを運んできて立花は言葉を切った。立花は砂糖もクリームもいれなままコーヒーをすすったが、熱かったらしくすぐに口を放した。

「出来たら——なんですか？」

克行はこちらから立花をうながした。

「写真をね……」

写真、その言葉ではつきりと立花の特命者リストに桜川の名前があることを確信した。特命者リストには特命者の住所や勤務先は載っていても写真は出ていない。立花は桜川を殺すために写真を手に入れたがっているのだ。だが、立花もさすがにそのことを表に出す

つもりはないように言い難そうに見える。

「写真ですか？」

克行はあくまでとぼけることにした。そしてとぼけながらどうするべきかを考えた。

「どんな人が写真が欲しいんだ」

立花の目がギラギラと克行を見つめる。その目には克行を通して桜川に対する殺意が明らかに読み取れた。

「あいにくですが」

「ないのかい？」

「今手持ちのものはありませんね。ただ一ヶ月か二ヶ月待ってもらえれば手にいれることは出来ると思います」

克行は考えたあげくそう答えた。さすがに自分の知っている人間を矢面にさらすようなことはしたくなかった。克行の答えに立花の表情が曇った。その目からはまだ殺意は消えてはいないが、とりあえず一步踏み誤ったというような表情に見えた。

「そうか……」

立花はカップを持つといっきに飲み干した。もうぬるくなっているのかと克行も一口飲んでみたがまだそれほど冷めたわけではなかった。

「俺は行くよ」

立花は金をテーブルに置くと不機嫌そうに立ち上がった。克行の一言ですでに別の方法と考えはじめているのだろう。

「待ってください」

克行は慌てて呼び止めた。

「なんだい？」

「いったいなぜ私の会社がわかったんです？ 私は名前しかあなたに教えていません」

立花は克行の質問にやりと口をまげた。

「俺の職業教えたらう」

背筋が凍るような思いがした。この男ならば桜川の写真もすぐに

手にいれることだろう。立花はもう克行のことなど忘れてしまったかのように一人ですたすた早足で行ってしまった。

克行は立花が出て行くのを立ち上がりその場で見送り、立花が見えなくなるともう一度座り直した。おそらく、立花はこんなことで桜川を狙うのをやめたりはしないだろう。

なぜだか、立花とはもう一度どこかで会わなければいけないような気がした。

死のクリスマスイブ・7

七

十二月 十四日 (木)

涼子から会社にいる克行に電話があったのは木曜の夕方だった。涼子の口調から彼女がひどく興奮していることが読み取れた。

克行は夜、涼子に会おうと言ったが、涼子は外で会おうとした克行の意志に反してマンションに来ると言い張った。確かに事が事だけに外で話すよりもマンションのほうが良いかもしれないと、克行は涼子の言葉に従うことにした。

克行は駅からマンションまでの道順を教え、涼子の来る時間に合わせ早めに仕事を終わらせ帰宅した。帰宅したのは九時過ぎだったが、どうやって入ったのかすでに涼子は克行の部屋に上がりこんでいた。

「どうやって入ったんだ？」

「ごめんね、妹だって嘘ついて管理人さんに鍵を開けてもらったの」涼子は悪びれた様子もなく驚く克行に笑いかけた。お人好しとも言える管理人の杉本老人の顔が思い出された。麻美に比べればずっと大人びて見える涼子が克行の妹などと本当に信じたのだろうか。

すでに部屋はファンヒーターによって暖まっている。まるで何度も訪れているような雰囲気だ。涼子は部屋でくつろいでいた。その涼子の様子は克行は大学時代に同棲していた時のことを思い出した。

「ずいぶん早かったんだな、こんなに早く来るとは思ってたよ」

「べつに構わないわ。仕事、急がしいんでしょ」

「十二月にもなるとさすがにな。おまえもう何か食ったのか？ 何か用意しようか？」

「食事はもう済ませたからいいわ」

「それで、何かあったのか？」

克行はすぐに特権者優遇計画のことに話を移した。あまり個人的な話を涼子と続けたくはなかった。いまさら涼子とよりを戻すつもりもない。

「ええ」

涼子は仕方無いという素振りでバックのなかから書類をいれるような封筒を取り出した。その真剣な眼差しにいつしか克行の表情も堅くなっていった。

「悪い情報か？」

けれど涼子はその質問には答えようとはしなかった。

「これを見て」

涼子は青と赤に分けられた数枚の書類を克行に突き出した。

「これは？」

「青い用紙のほうは今回の特権者優遇計画で特権者に任命された人たちのマスター・リスト。そして、この赤いほうが特命者のマスター・リスト。今日、役所の端末を叩いてリストにしてきたの」

どちらの書類にもびっしりと名前や住所、年齢などいろいろな情報が並んでいる。

「それで？」

「そのなかには克行の名前はないわ」

克行は驚いて涼子を見つめた。

「ない？」

「そうよ、しかももう一人。頼まれていた五十嵐麻美さん、彼女の名前もないわ」

「特命者リストに？」

「特命者リストにももちろん特権者リストのほうにも。ただし、不思議なことに各特権者への特命者の割り当てを行った後のファイルには、はっきりとあなたの名前も彼女の名前も載せられている。しかも、もう一つ不思議なことがあるの。各都道府県毎の特権者、特

命者の人数は国が決定し、各市毎の数はその県が決めることになるわ。今回、うちの市に割り当てられた特権者の数は百八人、都道府県ごとに割り当てられた特命者は六千二百六十四人。問題なのはこの中身なの。このなかには克行も、そして彼女も含まれてないの」

「どういふことなんだ？ 俺には何がどうなってるのかわからない」

「そうね。ただのミスってことも考えられるわ」

「ミス？」

「特権者優遇計画を実施するそれまでの過程のほとんどがコンピュータ処理で行われるわ。マスターからそれぞれのファイルへの振り分け、そして特権者への通知。全てがコンピュータに簡単な指示を行うだけ。だけど、一箇所だけコンピュータ以上の処理を事務員がやらなければいけない部分があるわ。それぞれの特権者への特命者の指定。そこで事務員がコンピュータに対する指示を一特権者毎に行われることになっているの」

「そこでミスが？」

「役所では今九十パーセントほどの情報はコンピュータ処理されるの。当然、市の住人の情報もコード化されファイルにある。特権者優遇計画にもそのファイルは参照という形で使われるの。おそらくその時、オペレータが誤ったコードを指示した」

「指示を間違った？ オペレータのミス？ そんなことで彼女の名前が特命者リストに載らなければならなかったのか？」

克行は思わず大声を出した。

「まあ、待って」

「待て？ 命が危険にさらされたんだぞ。ミスなんて言ってるのか？ 明日にでも役所に行って彼女の名前を削除させる」

「無理よ」

涼子の声に克行はびくりとした。それほど涼子の声には緊迫した雰囲気があった。

「なぜだ？」

「そんなことが出来るようなところならそんな単純ミスをやらかしたりなんかするわけがないじゃない。ミスと言っても一度リストに載ってしまったものを取り消すことなんか出来るわけないわ」

「……」

まったくその通りだった。特権者とか特命者とか選定はされているが、結局のところそれは人工削減の手段というだけで国にとって特権者が特命者リストに載っていても特命者が特権者リストに載っていてもいっように構わないのだ。

「それに……」

やや間があってから涼子はさらに付け足した。「今度のことが本当にミスかどうか……それもまだ判断出来ない」

「なぜだ？ マスターファイルに載っていないなかったんだ。ミス以外何が考えられるっていうんだ」

克行はなかばやけになって吐き捨てた。

「実は毎年通常のファイル以外にシークレットファイルが設定されることになっているんだけど――」

「シークレットファイル？」

「ええ、文字通りそのファイルの中身は役所のなかでも限定された人間しか見ることが出来ないようになってるの」

「つまり実行委員会のメンバー？」

「もっと限定される。役所のなかでもおそらくあれを見ることが出来るのは市長をいれて三人くらいしかいないと思う」

「そんな秘密にしなければいけないものっていったい何が入ってるんだろう」

「さあ……けどひょっとしたらそのなかにあなたたち二人の名前が突然現れた原因が隠されてるかもしれない」

「見れないのか？」

涼子に危険を押しつけることになると知りながらも克行は聞かずにいられなかった。

「見ようと思えば……」

涼子はそう言ってそつと微笑んだ。その笑顔に克行は涼子が初めからそのつもりだということに気がついた。

「見るつもりなのか？」

「もちろん。克行の恋人の命がかかってるんだもの。そのくらいのこととしてやらなきゃ。それに私自身もかなり興味があるの」

ぎゅっと固く拳を握り涼子ははつきりと言った。その姿に一度はシークレットファイルのなかを知りたいと思った克行も、涼子がなにかひどく危険な道を歩き出そうとしているようで心配になった。

「危険じゃないのか？」

だがすでに涼子はもう心を決めてしまっているようだった。

「大丈夫よ、克行だってコンピュータには詳しいからわかるだろうけど実際にシステムを管理している人とシークレットファイルを見ることが出来る者とは違うの。だから、よほどしっかり管理してなきゃ私がシークレットファイルを覗き見たところでばれやしないわよ」

その涼子の言葉に克行もそれ以上言おうとは思わなかった。実際にどんなに危険だとしてもそのシークレットファイルを見ることが麻美の命を救えるかもしれないからだ。

「気をつけてくれ」

克行は一言だけ告げた。

「わかってる。私だってまだ死ぬつもりないわ。他に何か私に出来ることない？」

「もう一つ調べて欲しいことがあるんだ。以前、駅のホームで乱射事件を起こした特権者のことを憶えているか？」

「泉谷のこと？」

「そう、そんな名前の男だった。なぜ知っているんだ？」

「私だって去年は委員会のメンバーだったのよ。そのくらいのこと知っているわ」

「そうか……その男があの後どうなったか調べられないか？」

「死んだわ」涼子は即座に答えた。

「死んだ？」

「今日、計画のことを調べているうちに過去の記録が目についたんだけど、その男のことも記録に書かれていた。あの事件を起こしてから二ヶ月後に青酸カリで自殺してたわ」

「自殺……」

「でも、本当に自殺かどうかはわからないけどね」

「わからないって？」

「国にしてみればこの特権者優遇計画のことをあまり表沙汰にはしたくないのよ。だからこそマスコミにも圧力をかけている。そんな時にあんな事件でしょ。ひょっとしたら殺されたのかもしれない」

「……」

涼子の言葉に克行はぞっとした。

「ああ、そうだ」

涼子は思い出したようにつぶやいた。それは多少芝居がかったもので、実のところ涼子が今日克行を訪ねた一番大きな理由がそこにあったようだ。

「どうしたんだ？」

克行は涼子の言葉にどきりとして彼を見つめた。どんな形であれ、今役所に務める涼子の言葉は驚かされる。

そんな克行を満足気に眺めてから涼子は内ポケットから四つ折にされた一枚の用紙をぽいとテーブルの上に投げ出した。

「はい、お土産よ」

「土産？」

克行は涼子の表情に注意しながらその用紙を広げた。

用紙には5人の名前と住所、電話番号などの各自の情報が載っていた。おそらく市の住民ファイルからのコピーなのだろう。その5人のなかには克行自身の名前、さらに克行の仕事上の知り合いが二人、そしてあの立花の名前までもあった。

「これは……？」

おそるおそる克行は訪ねた。立花の名前があることでそれが非常

に重要な意味のあることは察しがついている。

「わからない？」

いたずらっぽい目で涼子は克行を見た。

「まさか……」

克行ははっとした。

「そう、そのまさか。あなたの大事な彼女の名前の入ったリストを持つ者の名前よ。そいつらが彼女の命を握ってるわ」

あなたの大事な、その部分に力を込めて涼子は言った。

「これが……」

克行は改めて用紙を見つめた。さっきにも増してそこに書かれた名前が大きく見えた。何よりも立花の名前のあることが克行の心に暗い影を落としていた。

（役所で声をかけられたあの時からそういう運命だったのかもしれない）

あの立花の狂ったようなにやついた笑いが脳裏に蘇ってくる。

「私のほうもいろいろと麻美さんを救う手段は考えてみる。だけど、最後の手段としてはあなたの持つ権利を使う以外ないかもしれないわね」

すでに涼子の顔からはあのいたずらっぽい笑みは消えている。

「ああ」

克行自身そのことはとてもよくわかっているつもりだった。もし涼子が調べてくれていなくてもそれでも何とかして麻美を狙う特権者を消し去るつもりでいたのだ。

「拳銃は？」

「え？ ああ、あるよ」

克行はベッド脇の引き出しの奥から包みに包んだままの拳銃を取り出した。その拳銃の保管場所に涼子は不満を覚えたような目と言った。

「あと二日で特権者優遇計画が始まるわ。明日からはつねに銃を持ち歩くようにして。へたすると特権者のほうが特命者に命を狙われ

る可能性だってあるのよ」

「特権者が？」

「過去に偶然自分が特命者として登録されていることを知って、その特権者を殺したという例が二、三件あったって話を聞いたことがある。無理もないわ。誰だって殺されるよりは殺すほうがまだいいと思ってるのよ。克行も気をつけたほうがいいわ」

「殺されるよりも殺すほう……か。確かにそうかもしれないな」

克行はうつむいてつぶやいた。

「え？」

「殺されるよりも殺すほうがいい。その通りだ。俺だってこんな立場じゃなければ、配られたのがこんな特命者リストじゃなく、まったく知らない奴らの集まりだったならきつとそう思えただろう。誰だってそうだ、誰だって死にたいなんて思ってる奴なんているはずがないんだからな」

心のなかでまだ形になっていない不形成な気持ちまでもが激流のように克行の口から漏れた。それはまったく嘘偽りのない今の克行の気持ちだった。

「そんなこと考えちゃだめよ。今はただどうやって乗り切るかだけを考えなきゃ」

「考えてる、考えてるさ。けど、おまえからこの彼女の命を握っている奴らのリストをよこされた瞬間から俺の頭のなかにはこいつらをどうやって、いつ殺すか、そんなことばかりが浮かんでくるんだ。俺もあいつらと同じだ。人を殺すことを楽しんでいるあいつらと変わりのないんだ！」

「……克行……」

涼子の手が克行の左手にそっと触れた。その感触に克行ははっとして顔をあげた。涼子の顔がすぐそこにあった。忘れていた学生時代の二人の姿がそこにあった。

——私、克行のことを忘れない。

別れ際に言った涼子の言葉がふっと脳裏をよぎった。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

心がああ頃へ引き戻される思いがした。

克行は必死にそれを否定しようとした。全ては終わったことだ、過去のことでと思いこもうとした。だが、出来なかった。

涼子の赤い唇が克行の唇に触れた瞬間、克行はほとんど本能的に涼子の体を抱きしめていた。やわらかなその感触はああ頃を彷彿させるのに十分だった。

死のクリスマススイブ・8

八

坂本伸一・三十九歳

K I N I C 株式会社 係長

旭台衆応2ー5ー7

0 5 2 1 4ー3 3 6 4ー1 5 4

ランク・C

富士川義幸・二十八歳

私立川越高校 教員

境八日町牛込6 5ー7ー3

0 6 5 2 8ー1 4 7 3ー5 8 1

ランク・B

波川稔・四十二歳

I M M 技術研究所 課長

石沢亜栗4 2ー8 8 3ー1

1 0 5 7 1ー2 0 1 0ー1 1 2

ランク・C

立花勇作・三十一歳

港橋警察署勤務

穂墨区高城8ー6 9ー4 4

2 1 0 2ー5 8 6 0ー3 2 3 6

ランク・A A

風間克行・二十六歳

KCS株式会社

八坂区背能85-5-67

0137-5671-4207

ランク・C

碓井正隆・十九歳

八野倉大学二年

石鷹区駆詰42-44-82

メゾンWATASE202号室

0150-8884-2956

ランク・C

乱れたベッドに寄りかかりビールを飲みながら、克行はベッド脇にある電気スタンドの小さな明かりで涼子の置いていったリスト（「殺人者リスト」、涼子と克行の二人はこの麻美の命を握る克行を含めた六名のリストをそう呼ぶことに決めた）に見入っていた。

気のせいかほのかに涼子のつけていた香水の香りが、まだベッドに残っているように感じられる。ほんの少し麻美にたいして後ろめたさを感じていた。

おまえは自分の恋人が危険にさらされようとしているのに何をやっているんだ？ それともこのまま麻美のことなど忘れてしまっただけ涼子とよりを戻すつもりか？

まだ涼子の白く豊かな乳房の感触が、そしてあの時の彼女の声もまたはつきりと記憶に残っている。

（早く忘れてしまえ！）

涼子とのことはどうせ、一夜のことに過ぎない。そもそも、このまま涼子とよりを戻す気持ちなどまったくくないのだ。

——愛してるわ……私が克行を守ってあげる。

帰り際に耳元で囁いた涼子の声が頭に響き、克行は頭を押さえた。忘れるんだ！ 今考えなきゃいけないのは殺人者リストのなかに

ある特権者からいかにして麻美を守るかということだけだ。

克行はいつきに飲みかけのビールを飲み干すと、再びキッチンの冷蔵庫のなかからもう二罐取り出してきた。アルコールの力で全てを忘れ去ってしまいたかった。すでに四罐、飲み干しており、かなり酔いがまわってきているのは自覚しているが、それでもまだ足りないように思えた。無意識のうちに指でカタカタとテーブルを小刻みに叩いていることに気づいた。煙草が吸いたかった。銘柄などはなんでも良い。とにかく煙草を口にしたい欲求にかられていた。三年前にやめて以来ずっと口にしていない。以前ならば買い置き煙草がいつもどこかにあったのだが、今では微かな煙草の匂いすらしていない。かといって今から買いに行くわけにはいかない。情けないことに、彼はアルコールにまるで強くなかった。これから煙草を買いに行こうとすればおそらく幾段も連なる階段を一階まで無事に下りることはとても危険な賭けになるだろう。もし無事に自動販売機まで行ったとしても帰ってこられる保証はない。克行はじつと我慢し、煙りの代わりにアルコールを体のなかに流しこんだ。ビールで足りなければとっておきのウイスキーを開ければいい。

（それにしても……）

何か強い意志によって自分の運命が決められているようなそんな不安を克行は覚えていた。

先日は自らの会社の上司や同僚、そして恋人の名前を特命者リストのなかに発見し、今日は協力会社の上役、顧客先の課長の名前を特権者リストに見つけることになった。KINIC株式会社の坂本IMMの波川がそれだった。二人とも一年くらい前から仕事を通じて知り合い、現在でもよく仕事で顔をあわせる。坂本にいたっては今日も電話で話をしたばかりだ。

（彼らが特権者だったなんて……）

自分の回りの人間関係がほんの二、三日の間にぼろぼろと崩れ去って行くような感じがした。

もう一度特権者リストを見つめてから克行はおもむろにビールの

罐を開け、半分ほどグビグビと飲んだ。アルコールが体のなかで暴れているのがわかる。このままのペース飲み続ければ、一時間後には確実に胃に納まっているものは全て外へと放出されるだろう。それがわかっていても、克行は飲み続けることを望んだ。

逃げ出してしまいたい……

このまま麻美のことも特権者優遇計画のことも全て忘れて逃げ出せたならどれほど楽になれるだろう。なによりも今回の特権者優遇計画は危険すぎる。それは涼子に言われるまでもなく、麻美の名前をリストに見た時から克行にも本能的に感じていた。なぜだか自分が特権者優遇計画の全ての中心に位置しているようにさえ思えた。

この特権者優遇計画には何者かの大きな意志が働いている。それが国家の意志なのか、それとももっと別の誰かの意志なのかそれはわからない。だが、それでも大きな意志が働いて克行に「死」という素敵なプレゼントを送ろうとしている。

イバラの鞭を持ったサンタクロースのプレゼント。この年齢になって再び現れた悪夢のサンタクロース。特権者というそりに引かれ、袋のなかには多くの「死」が入っている。爽やかな笑顔を振りまいてサンタクロースは言うだろう。『年に一度のクリスマス。サンタクロースからのプレゼントをさあどうぞ』それからおもむろに袋を開けて黒光りする拳銃を取り出す。そして、爽やかな笑顔はそのまに拳銃を乱射する。

それはあまりに馬鹿げていて、見ている人々はショーだと思って喜ぶだろう。ああ、何て素晴らしいクリスマス、何て愉快なクリスマス。それが現実だとわかってるのはサンタクロースとそりを引いている特権者たち、そして殺された人々。

今年は自分もそのショーに加わろうとしている。

(忘れてしまえ！)

それなら本当に忘れてしまうか？ 麻美のことなど過去のことと葬ってしまうか？ そして麻美が無事に生き延びたことを知ったならばまた戻ってくればいい。おまえなら出来るじゃないか。涼子に

やったことをやればいいんだ。

ちくしょう！

再びビールにしがみつき、一気に残りを飲み干した。そして、すぐに次のビールへ手を延ばす。いよいよもって世界は回り始め、体は克行に警告を促す。克行はその警告を快く無視した。

克行は自分を含めた殺人者リストを改めてまじまじと見つめた。文字がふにゃふにゃと踊って読める。

しかし、何よりもその殺人者リストのなかで目をひいたのはあの立花勇作の名前だった。しかも彼の特権者としてのランクはAA、つまり最も優れていると評価されている。涼子の話ではランクAの特権者でも数人いるだけでAAというのは涼子も初めて見たと言っていた。そんな男を克行は相手にしなければいけないのだ。

俺はあいつに勝てるのか？

克行はふと立花の姿を思い描いた。警察官として十分なまでにがっちりした体、そしてあのどこか神経質そうな身のこなし、まともにやりあって勝てるとはどうてい思えなかった。ただ一つ克行が有利な点といえば立花がこれほどの特権者優遇計画に対しての情報を得ていないだろうということだけだ。しかし、それでも克行にはあの男の死体の姿を想像することは出来なかった。

あいつが麻美を狙わないことを祈るだけだ……

全てのものを投げ捨ててでも麻美を守りたいと克行は思った。そのためならばどんなことをしてもいいと本気で思った。もし、立花が部長の命を狙うならばそれを手伝ってもいいと、いや、会社の人間全ての命をくれてやってもいいとさえ思った。

「麻美……」

克行はぼんやりと宙を見据え、麻美のことを思った。

麻美はどう思うだろう。俺が特権者となったことを、そして彼女が特命者として俺のリストに載ったことを……

告げたくはなかった。だが、そんなわけにはいかない。麻美のためにも、そしてこれからのためにも彼女に話さなければいけない。

アルコールがまわり朦朧とする意識のなかで彼女のことをなんとなくでも守ってみせると克行は誓った。

時計の針はすでに午前二時をまわろうとしている。

死のクリスマスイブ・9

九

十二月 十七日 (日)

冬にしては暖かい風がそよそよと頬に触れる。公園は冬だというのに、それでも日曜になるとカップルや親子連れが姿を現す。

克行はベンチに座り、じっとその平和そうに見える光景を眺めていた。その頭のなかは当然のことのように麻美のことを、そして今夜から始まる「特権者優遇計画」のことで占められている。

先日の夜以来涼子からは何の連絡もない。克行のほうからも彼女に連絡はしていない。連絡しづらいということもあったが、どちらかというと全面的に涼子を信頼していた。彼女が連絡してこないということは何の情報も得られないということだ。そのため克行は新たな道を模索しようと試みることにした。

公園の中心にある花時計がきっかり午後一時を示した時、一人の男が克行のいるベンチに向かって歩いてくるのが見えた。

男は克行を見定めると人なつこい笑顔を浮かべ軽く手をあげた。

「やあ」

克行もまた軽く左手をあげてみせた。右手はしっかりとコートのポケットへいれられ拳銃を握っている。

「久しぶりだね」

藤井和弘はそう言って克行の隣へどっかと腰をおろした。記者である藤井とは三年前の冬に会社の仲間に誘われるままに行ったスキー場で知り合った。克行よりも二つ年上だが見た感じはそれよりもずっと年上に見える。

「仕事はどう？ 忙しい？」

「ああ、例のごとくさ。俺たちは常に忙しく常に暇だからね。忙し

いのは能力がある証拠、暇なのは無能な証拠だ。世間にやささん悪口を言われてるがね」

『アウトサイド』という藤井が記事を書いている雑誌のほとんどはアイドルのゴシップ記事が中心で、彼も常に年端もいかないアイドルたちを追いかけている。

「あんたはよっぽど忙しいって言いたいのかい？」

「その通り。その証拠に俺は三日前にこの日本に帰ってきたってわけだ。それで？ その忙しいこの俺をこんな寒い公園に呼び出したわけを教えてもらおうか」

相変わらず人なつこい笑顔を見せながら藤井は言った。

「あんたのその笑顔を消してしまうかもしれない話だよ。へたすれば青ざめることにもなるかも」

「おいおい、冗談よせよ。俺のこの笑顔は生まれつきでね、俺が青ざめるとしたら俺の書いた記事がもとで雑誌の売れ行きがこっぴどく落ちこむってことだぜ」

「いいや、残念ながらそんな話じゃないよ。俺があんたと話をしたいのは「特権者優遇計画」のことなんだ。あんただって知ってるだろ」

克行はわざと明るいい口調で計画のことを口にした。藤井の顔から笑顔が消えたが、それはほんの一瞬のことだった。

「一応はね」

「どのくらいのことを知ってる？」

「さあねえ……どちらにしても俺の専門外の話だな。なぜだい？」

「なぜマスコミはあの政策について何も報じようとしなのかと思っ
つてね」

「不思議なことを聞くね。マスコミがそいつについて報じないことに何が問題があるっていうんだい？ それに「特権者優遇計画」、そいつは君にどんなふうに関わっているっていうんだ？」

藤井は何かを疑うようにちらりと克行の顔を見た。克行はその目に彼がすでにある考えに達していることを悟った。

「俺は今、最低でも六人あの世へ送り出すことの出来るものを持っているっていうことだよ」

ちらりと克行のポケットの膨らみを見て、さすがに藤井の顔からあの人なつこい笑顔は消え去った。だが、それほど驚いたような顔を見せなかった。

一瞬の沈黙の後、藤井はふうっと一息溜め息をついた。

「そういうことか……ちなみにそいつは最低六人じゃなく最高六人をの間違いじゃないのかい？」

「そうだね……」

いや、あくまでも最低六人なんだよ。と心のなかでつぶやきながらもあえてそのことには触れようとせずに素直に頷いた。克行が考えていることを全て伝える必要はない。

「それで俺に何をしろって言うんだ？ 俺に「特権者優遇計画」の問題性を記事にしろって言うのか？ このゴシップ専門の記者にそいつをしろって？」

「べつにあんたにやってくれとは言っていないよ。ただ、それをやってくれる人を紹介して欲しいって言ってるんだ」

「同じことだ」

「なぜだ？ なぜあんたたちはそれほどまでに避けようとするんだ？」

「君は考え違いをしているよ。マスコミはそれほど正義感が強いわけじゃない」

「それでもマスコミは常に政治のスキャンダルを報道しているじゃないか？ 以前、どこかの雑誌で「特権者優遇計画」のことを取り上げていたことがあった」

「俺も読んだ記憶があるよ。そういう物好き——いや、確かに正義感のある記者もいるだろうね。けど一人じゃ何も出来やしないよ。ちょっと手を出してみてもどこからか圧力がかかってそれで終わるさ」

「圧力が？ それが怖いのか？」

「怖いね、だが、記事にしないのはそれだけの理由じゃない。確かにうちの雑誌でも政治家のスキヤンダルは記事にするよ。たいして深い傷にならない程度のスキヤンダルにね。本当に政治家をつぶそうなんて考えて記事を書く奴なんかはいないよ。その証拠に決してそれらは彼らの命取りになることはないだろう。それにそんなスキヤンダルは民衆が望むことだ」

「それじゃ——」

「君が言っているものを民衆は望んじやいないよ。民衆が望んでいるのはあくまでもいい自らの楽しみを満足させてくれるスキヤンダルだ。政治家の汚職事件だってそうさ。政治家が裏で企業から金をもらっていることなんか、俺たちが報道する必要もなく誰でもがわかってのことだ。それでもバカな政治家がとんでもないミスをやらかす。それで俺たちがとりあえず報道し、民衆はとりあえず怒る。そして満足する。それだけのことなんだ」

藤井は軽く肩をすくめてみせた。

「そんな……そんなものでしかないっていうのか？」

「そうさ、うちの雑誌がよく売れるのはそういうわけさ。必ず毎週、どこかの可哀相な人々の記事が載る。過労で旦那を亡くした哀れな未亡人。血液感染によってエイズにかかって余命いくばくもない少年。そいつを読むやつらは一様に可哀相にと涙を流す。だが、心のなかじゃその哀れなやつらと自分とを比較しているのさ。私たちは大丈夫、私たちはずっと幸せだってね。人間なんて身勝手なものだ。それにマスコミには大前提があるんだ。読者を不安がらせないことだ。例えば二、三年前から突如降って湧いた障害者たち。国は原因不明と発表しているが事実が違う。しっかりと原因究明されているんだ。だがその原因が問題だ。なんとその原因を作りあげたのは我が国には今やどうしようもない輸入品なのさ。アメリカ産の農薬だらけの米やオレンジ。しかし、そいつを発表するわけにはいかない。農薬のついていない米やオレンジなど世界のどこを捜したってありはしないからだ。確かに日本にもまだほんのわずかながら農家は存

在している。けど、しょせん日本人全てを支えることなど出来るはずがないんだ。一九九六年に米の輸入開放が間違っていたとしてもそんなことを今更言えるはずがない。知ってる奴らだけが注意するだけなんだ。マスコミなんてそんなものさ。正義感ぶっているだけで本当はみんな金のために記事を作りあげてるんだ」

「あんたはそれで――」

恥ずかしいのか？ 思わずそう言いそうになり克行は口をつぐんだ。そして藤井も克行が何を言おうとしたかは察したようにほんの少し視線をさけてうつむいたが、それほど気にした様子はなかった。

「確かに特権者に選ばれた君にとってそいつは非常に大きな問題で、政策が間違っていると感じてしまっても仕方がないことだと思うよ」同情するように藤井は言い、それからもつと驚くことを彼は口にした。「だが、俺は「特権者優遇計画」がそれほど間違った政策だとは思っちゃいないんだ」

「なんだった？」

克行は思わず驚きの声をあげた。「間違っていない？ 何を言ってるんだ？」

「まあ聞けよ。確かに君が感じていることはよくわかる。たとえば人工削減計画とはいえ人殺しをやるのは間違いだと言うんだろ。しかし、現実はこの日本、いや世界中には人間がゴミ屑以上に存在しているんだぜ。そいつをどうやって解決しようって言うんだ？ 見なよ、あの光景を」

藤井はそう言って顎をしゃくりあげた。花時計の向こう側に二、三歳くらいの子供を背にした白髪の老人がのんびりと散歩しているのが見て取れた。

「あの小さな孫……いや、曾孫かもしれないな。いずれにしてもあの爺さんは子供を背にしょっている。君にはあの光景がどう見える？」

「実に平和的な光景だと思うね。まさか、子供が爺さんの頭に拳銃

を突きつけていなければだけど」

投げやりに克行は答えた。藤井が何を言おうとしているのかわからなかった。

「なるほど、拳銃を突きつけていなければか。それなら大丈夫さ。あの子はすっかり寝むっちゃまってる。平和的光景だろう。しかし、現実にはどうだろうな」

「現実には？ 何を言ってるんだ？」

「現在の老人と子供の比率を知っているかってことだ。今はまだそれほどじゃないが、あの子供が俺たちくらいになるころにはあの子供は一人で老人を十人くらい養うことになるんだぜ。つまり現実にはあの爺さんが子供の背におぶさってるってことさ」

やっと藤井が何を言おうとしているのかがわかった。

「だから「特権者優遇計画」は許されるって言うのか？」

「必要悪って言葉を知っているだろう。例えば――」

「あんたの例え話しはたくさんだ！」

「そう言うなよ。俺は君よりも計画についても世界の現状についても知ってる。アメリカじゃあ人殺しをゲームとして楽しむことが法律で許されるってことを知ってるか？ いかに歩き続けていられるかそれがゲームの内容だ。健全でないのは歩けなくなった時に頭を一発吹き飛ばされるってことだ。生き残れるのはただ一人、それ以外は皆殺される。まだ企画段階だがすでに何十人もの子供たちがそのゲームへの参加を望んでいる。そいつをどう思う？」

「そいつらは狂ってるんだ！ それとも罰ゲームの中身を嘘だと思っているかのどちらかなんだ」

「そうだろうね。日本人の多くが「特権者優遇計画」が実際に行われていることを信じないようにね。いずれにしても日本の政策なんてかわいいもんだ」

「つまりあんたは俺に『平気で人殺しをやったのけろ』と言ってるのか？」

「そうは言っていないよ。ただ俺たちマスコミが動かない理由を教

えてあげただけだ」

（同じことだろう）

克行は暗い気持ちで思った。このまま「特権者優遇計画」が始まればきつとそういうことになるだろうと予想していた。それは自分でも認めたくない予想だった。

「いずれにしてもあんたは動いてはくれないわけだ」

克行は藤井に麻美のことを話すのをやめた。藤井は麻美のことくらいで考えを変えるようなことはしない。あくまで客観的な見方が出来る男だ。

「悪いけどね」

そして藤井はゆっくりと立ち上がった。「力になれずに申し訳ないが、恨まないでくれよ。君とはいつまでも仲間でいたいんだ」

「大丈夫、断わられた腹癒せにあんたをターゲットにしたりはしないよ」

「その点は信頼しているよ。それにいくら君が俺を狙おうとしても、あいにく俺は今夜にはハワイ行きの飛行機に乗っている。そして帰ってくるのは正月あけだ」

「またガキ相手に遊んでくるのかい？」

「そうだ。俺だってあんなガキどもをカメラ持って追回するのは嫌だが、それでも奴らは金になるんでね」

「がんばってくれ」

克行は精一杯笑顔をつくってみせたが、それはあまりうまくはいかなかった。藤井は来たときと同じように軽く右手をあげて去って行った。

藤井が立ち去ったあと、視線は無意識のうちにさっきの老人の姿を捜していたが、すでに家路についたのか見つけることは出来なかった。

それでも俺は認めたくない。いや、認めるわけにはいかないと思った。克行はベンチに座り込んだまま、麻美に今夜どう伝えたらいいものかと頭を悩ませていた。

死のクリスマスイブ・10

十

緊張感で手の平が汗をかいている。

一秒、また一秒と時間が近づいている。

「どうしたの？ この前から克行変だよ」

心を探るような眼差しで麻美が不思議そうに克行を眺めている。

だが、その目は決して克行の心の全てを見抜いてはいない。ほんの少し克行の様子がいつもと違うことに気づいているにすぎない。それは克行にとって救いでもあり、苦痛でもあった。

克行はそんな麻美の言葉にまた時計を振り返った。

十一時三十二分。あと二十八分で特権者優遇計画が始まる。

話さなければいけない。

もともとそのつもりで今夜麻美の部屋を訪れたのだ。いずれは話さなければいけないと思いつつ一週間が過ぎてしまった。藤井を通じてマスコミを動かし、「特権者優遇計画」の問題点を世間に訴えかけることで麻美を救うことが出来るのではないかと考えたが、その考えは打ち破られた。

彼女に伝えなければならぬ。

——このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしもそれを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることになります。

ペナルティ？ 今更いったいどんなペナルティがあるっていうんだ？

「やっぱり今日の克行、どっか変よ。どこか上の空で……いったい何を考えてるの？」

克行も明日仕事があるんでしよう。いくら日曜だからって、いつも日曜の夜は早めに帰っちゃうじゃないの。それに先週だって、連

絡してもぜんぜんいないんだもの。どうしたの？」

麻美はベッドに腰かけ、黙って座っている克行をじっと見つめた。答えられるはずがなかった。麻美と言葉を交わすだけで涼子とのことがばれそうな気がして電話にすら出ようとしなかったのだ。ベッドわきのテーブルの上に読みかけの手紙が広げてある。

「手紙……誰から？」

つい話題をそらした。

「これ？ 父さんからよ。この前、届いたの。ちょっと思い出して読んでただけ」

麻美はそう言って即座に手紙を片付けた。そういえば麻美の父親は国家公務員という話を聞いたことがある。麻美も少しは特権者優遇計画について知っているのだろうか。

克行は再び言葉を搜すようにぐると部屋を見回した。

でっぷりと肥えた黒猫のルシファアは克行を見るなりいつものようにベッドの下へ潜り込み、それでもその青い目でじっと克行を観察している。まるでいち早く克行の心のなかを察しているようで克行はぞっとした。

「麻美……」

やっと克行は口を開いた。

「何？」

麻美が身を乗り出した。

「明日からのこと知ってるだろ」

「明日？」

一瞬、麻美の顔が硬張る。彼女も心のどこかに特権者優遇計画のことがひっかかっていたのだろうか。

「特権者優遇計画のこと」

「……あのこと……でも、それがどうかしたの？ 私たちにはいっさい関係のない話よ」

「そういうわけにいかなくなった。実は……今年、俺も特権者として選ばれたんだ」

克行の言葉にさすがに麻美の顔が白くすつと透き通っていく。目は何が起こったのか見定めるかのようにきょろきょろと動き、薄い紅い唇は微かに震え、その場を補う言葉を捜している。

その麻美の仕種から彼女がいかに驚いたか克行には想像出来た。そして、その彼女の驚きは克行の予想をはるかに上回るものでかえって克行はどうしていいかわからずただ、じっと麻美を見守った。しばらくの間、二人とも口を開こうとはしなかった。

通りを横切る車のエンジン音が手に取るように聞こえてくる。

十一時四十三分。あと十七分。

やっと麻美が口を開いた。

「なぜ……？　なんで克行が……？　どうしてなの？」

「わからない……」

「でも——！」

「いったい何がどうなってるのか俺にもわからないんだ。先週の日曜の朝、突然通知が届いたんだ」

「先週の日曜？　それじゃ、この前会った時に？」

「そう、あの朝だ」

「なんで言ってくれなかったの？」

責めるような目で麻美が言った。

「こんなこと誰にも言いたくなかった。当然だろう。特権者なんて言い方をしてるけど、実際には人殺しのことだ。黙っているつもりだった」

「克行も……人を殺すの？　特権者選ばれたって言っても、どうしても人を殺さなきゃいけないってことないはずよ。人を殺さなくても済むんでしょ」

哀願するような麻美の言葉に克行は胸が痛くなるような感じがした。やはりもう一つのこと話さなきゃいけない。そうすることが麻美のためだ。

「そりゃ、そうだけど。噂じゃ、権利を破棄すると来年は俺が特命者リストに載ることになるそうじゃないか」

「そんなの嘘よ！　お願い、計画のことなんか忘れて！」

「それだけじゃないんだ！」

「それだけじゃない？　どういうこと？　まだ何かあるの？」

麻美の手がぎゅっときつくシーツを握りしめる。

「……俺の持つ特命者リストのなかに……その……」

「何なの？」

「君の……麻美の名前があるんだ」

「……私の……名前？　克行のリストのなかに？」

さつきより麻美の驚きは大きくはないように克行には見えた。ただきつく下唇を噛み、鋭い視線で克行を見つめている。

「麻美……」

「それで……克行はどうするの？」

「え？」

「私を……殺すの？　特権者優遇計画が始まるまであと――十二分、そのために今夜私のところにやって来たの？　もう拳銃は持っているの？」

克行から視線をそらすことなく麻美は挑戦するような口ぶりで言った。

「――まさか！　俺がなんで麻美を殺さなきゃいけないんだ！」

思わず克行は立ち上がり怒鳴った。

「俺はおまえのことを愛してるんだ。俺がおまえのことを殺すわけないだろう！」

「克行……」

「俺はおまえのことを守りたいんだ。ほら、この通りほかのおまえを狙う奴らのリストだってある。こいつらを殺してでもおまえを守ってやる！」

克行はポケットのなかから殺人者リストを取り出した。

「リスト？」

「ああ、こいつだ。ここに載っている俺を含めた6人が麻美の名前に入ったリストを持っている」

リストを麻美に手渡すと彼女は驚いたようにリストと克行を見比べた。

「どうして？ どうして克行がこんなものを持っているの？」

「……市役所に勤めてる友人が調べてくれたんだ」

涼子の名前を口に出すのは避けた。先日の夜のことか思い出され、克行は心のなかで小さく麻美に詫びた。

「友達？……その人、計画に関わっているの？」

「去年、実行委員になったらしい。けど、今年は一切関わっていない。月曜に特権者全員を集めての説明会があったんだが、その帰りに偶然会って、事情を話すと調べてくれたんだ。そいつが言うには今回の特権者計画にミスがあったんだらうって。だから、麻美の名前がリストに載ったんだらう」

「ミス？」

「ああ、まったく馬鹿げてる。そんな市役所のミスなんかで人の命がむざむざ危険にさらされるんだからな！」

克行はうろうろと部屋を歩き回りいらだちを押さえようとした。

「克行……」

少しの間、麻美はリストをじっと見つめて何やら考えこんでいたが、やがて克行を見つめつぶやいた。

「え？」

「克行はどうするつもりなの？」

克行にはその麻美の姿が意外にも冷静に映っていた。

「だから……おまえを——」

「私を守るって言ったけど、いったいどうやって私を守ってくれるの？」

「……」

麻美の言葉に克行は言葉を詰まらせた。ポケットに忍ばせてある拳銃が一瞬鉄の固まりのように重たくなる。

「特権者優遇計画が終わるまで一日二十四時間ずっと私についててくれるの？」

克行は再び麻美の前に座り込んだ。

「いや……実際に計画による殺人が一番多いのはクリスマス・イブからクリスマスにかけての二日間らしい。だから、その二日間さえ外出しないようにしていればおそらくそれほど危険なことはないだろう」

「でも完全に安全じゃないわ」

その通りだと克行は思った。現に立花のように特権者優遇計画に生きがいを感じているような奴もいる。

「ああ……」

「克行……」

じっと麻美の目が克行の目を見つめる。どこか不安気でその不安が克行に何かを訴えている。麻美がその瞳の奥に何を考えているのか、それを想像するの怖かった。

十一時五十四分。

「心配するな、麻美のことは俺が守ってやる。誰にもおまえのことを殺させたりしない。誰にもだ……」

ぎゅっと麻美の体を引き寄せ力一杯抱きしめる。涼子とはどこか違うぬくもりが伝わってくる。

そうだ、俺が愛しているのは涼子じゃない。麻美なんだ。

克行は改めて麻美への愛を認識した。そして、彼女のことを命をかけても守ろうと決意していた。その克行の決意をはっきり受け止めたのか麻美は克行の腕の中で大きく頷いた。

時計の長針はついに短針に追いついた。

今、特権者優遇計画が始まる。

死のクリスマスイブ・11

十一

十二月 十八日 (月)

オフィスは今日も変わりなく動いている。

あの日以来、部長の桜川から特権者優遇計画について尋ねられることもない。おそらくこの社内にも克行の知らない特権者や特命者がいることだろう。だが、誰一人として決してそんなことを口にしようとしなない。皆、特権者優遇計画のことなど忘れてしまっているのだろうか、それとも密かに探りあっているのかもしれない。克行はそのことに不気味な怖さを感じていた。

けれど今、自分に直接的に関係しない者たちに関わっている暇はない。今の克行にはどこで誰が殺されようとまったく無視することの出来る自信があった。

克行はこれからやるべきこと、言うべきことを頭のなかで繰り返した。

(やるしかない！)

何度も自分自身に言い聞かせたことだ。

そのことは特命者リストに麻美の名を見たときからたえず頭のなかにあった。だが、いつもそれは現実離れしていることのように思えてしかたなかった。しかし、昨夜麻美と会ったことで克行の心も一つに決まった。

特権者を殺す。麻美の名の入った特命者リストを持つ特権者たちを殺す。それが麻美を守る最も有効な手段なのだ、という考えが強い決意として克行の心のなかにはっきりと表示されていた。

克行は電話を自分の机に寄せると、外線発信のボタンを押した。

慎重深く相手先の電話番号をダイヤルしてゆく。

——はい、I M Mでございます。

いつもの女子事務員の声が電話口から聞こえてくる。

「K C Sの者ですが、いつもお世話になっております。おそれいりますがシステム課長の波川さんいらっしゃいますでしょうか？」

——少々、お待ちください。

女子事務員の声が跡絶え、電子音が音楽を奏で始めた。克行はじっと汗ばむ手で受話器を握りしめながら電話口に波川が出てくるのを待った。やがて、ぷつりと電子音が跡絶えた。

——はい、お電話変わりました。

波川の声だ。

「もしもし、風間です」

——なんでしょう。

「今度のシステムのこととでちょっとお話したいことがあるんですが、今週時間ありますでしょうか？」

声がうわずるのを押さえるように克行は事務的に仕事の話を切り出した。

——今週ですか？ 何か問題でも起きたんでしょうか？

そう、大きな問題が起きている。しかし、それは仕事じゃない。それを解決するためには何としてもあんたに会わなきゃならないんだ。

「いえ、問題というほどのことでもないんですが、システムの概要がまとまりましたので、それをチェックしていただきたいと思っています……」

——そういうことでしたら、風間さんにお任せしますよ。私が見てもねえ。そうだ、うちの菅原君、彼ならあなたも知っているし、彼とではどうだろうか？

波川ののりくらりとした答えが帰ってくる。いつもそうなのだ。いつもシステム開発が始まる時にはそう言って他人任せにし、いざシステムが出来上がる頃にいくつも難題を持ちこむのだ。だが今度は逃がすわけにはいかない。今度のミーティングはこれまでのよう

に代理の人間では役に立たない。波川自身でなければならぬのだ。
「いえ、今回だけは波川さんでないと……K I N I Cの坂本係長も出席していただくようお願いしてますので」

もちろんまだ坂本には連絡はいれていない。だが、そう言うことによつて波川に逃げることの出来ないものだという気持ちを持たせることは出来る。それに、坂本にもこれから連絡して必ず出席させるつもりなのだ。

波川と坂本、彼ら二人を除いては今度の打合せは何の意味も持たない。そうだ、あくまで二人同時でなければならぬ。

——坂本さんか……それじゃ、行かないとねえ。

「いつがいいでしょうか？　なるべく早いほうがこちらとしては都合がいいんですが」

そうだ、殺るならば早いほうがいい。それだけ麻美の危険が少なくなる。

——そうですね。明後日、水曜の午後ならお会い出来ますけど。

二日後、その期間がもどかかった。

だが、涼子が持ってきてくれたこれまでの「特権者優遇計画」の統計によれば最も殺人が行なわれるのは最終日であるクリスマスイブ。平日に行なわれる可能性は極めて低かった。

「水曜ですか。わかりました。それでは水曜の午後そちらにお伺いいたします」

——よろしく。

「よろしくお願いいたします。それでは失礼いたします」

立て続けに言葉を発し、克行は電話を切った。会う日が決まった今、いつまでも長話をしている必要はなかった。

「どうかしたのか？」

その声にふと顔をあげると不思議そうに克行を見つめている西崎の目とあった。

「いや……なぜ？」

「だって、今回のシステムは始まったばかりで設計書だってまだ完

全にはまとまっていけないじゃないか。あんなものを見せるために波川さん呼び出したんじゃ、かえって文句言われるんじゃないのか？」

西崎はパソコンを叩く手を休め克行に尋ねた。

「設計書がまとまってからじゃかえって遅いだろう。概要はだいたいままとまってる。あれだけ出来てれば叩き台にはなる」

克行は心を読まれないように注意しながら反論した。

「そりゃ、そうだけど……おまえ、いつもだったらもう少しまとまってから打合せに入るだろう。それにあんまり上の人間じゃかえって開発の邪魔になるって坂本さんなんてむしろ避けようとしてたじゃないか。何で今度に限って――」

「少しやり方を変えてみただけだ。それよりおまえに頼んだ資料、大丈夫なんだろうな。明日までには終わらせてくれよ」

西崎に追求されるのを恐れ克行は冷たく突き放した。

「藪蛇だったな」

西崎はそんな克行の気持ちを知るはずもなく、明るく笑い飛ばすと再びパソコンのキーボードを叩き始めた。

（そうだ、藪蛇だ。おまえは黙って見てればいい。水曜を過ぎればおまえも現実を知ることが出来る）

現実。まだ西崎は自分の名前が特命者リストに入っていることを知らないのだろうと克行は想像した。知っていればそうやって笑っていられるはずがないのだ。

「殺人罪」

確か西崎の特命者になった理由にはそう書かれていた。

（いったいこいつが誰を殺したというんだろう？）

無言でパソコンに向かう西崎を克行はぼんやりと見つめた。

西崎とは入社した頃から同じ課でずっと働いてきた。仕事の能力はもとより、プライベートのこともかなり西崎については知っているつもりだった。だが、殺人を犯すような危険な一面だけはこれまで見たことがない。いつも温和でどちらかというとトラブルをまと

める部類の人間だと思っている。その西崎がこともあろうに殺人罪で特命者リストに名前を載せられている。

(これもミスだろうか?)

克行は自分自身に問いかけていた。出来ることなら西崎のことも救ってやりたかった。だが……

「西崎」

克行はふと西崎に声をかけた。

「なんだ？」

「おまえ、人を殺したことがあるか？」

馬鹿な質問だと思った。そんなことを聞いて何になるのかと自分で自分をあざ笑った。けれど、実際に聞いて見たかった。「殺してない」という答えを聞きたかった。

西崎はそんな克行をあっけにとられたようにぽかんとして見つめていたが、やがて、にわかに笑い出した。しかし、その笑いが西崎の顔から遠ざかった時、西崎の顔からは笑いは消え去り変わりにこれまでに見たこともなかった悲しみに包まれたような顔が残った。

「何でそんなこと聞くんのだ？ おまえ、何か知ってたのか？」

「え？」

その西崎の答えに克行はうろたえた。

「誰かに聞いたのか？ 噂なんて変な風に飛び回るからな」

西崎はそう言ってから回りを見渡した。幸い近くの席には誰もいない。時折離れたところにあるプリンターの音がフロアに響くのがやけに大きく聞こえる。社員の多くは客先に出払っているのだ。

「噂？」

自然、克行の声も小さくなる。

「噂を聞いたんだろ。俺と彼女のこと」

「彼女って？」

「おまえも知ってたろう、笹野加代子と俺がつき合ってたってこと」
「笹野加代子？ ああ、あの受付の子か」

以前、克行と西崎が一緒にしていた仕事先の受付嬢を克行は思い

出した。そういえばあの後、西崎と彼女がつき合っているというのを西崎本人から聞いたことを思い出した。

「そう、ちょうど去年の今頃かな？ あの時からつき合い始めたんだ」

「彼女がどうかしたのか？」

「死んだんだよ」

「死んだ？ いつ？」

「今年の八月」

「八月？ それじゃ――」

今年の八月。その頃克行は自社に来ることは少なく、ずっと客先で仕事をしており、西崎ともほとんど会社の誰とも会ってはいなかった。ただ、西崎が車で事故を起こしたということだけは噂で聞いたことがあった。

「そうだ、あの時の事故でだ」

「けど、おまえはたいしてケガもなかったって聞いたぞ」

「俺はな。だいたい事故の原因がスピードの出しすぎとか、酔っ払い運転とかそんなものじゃなかったんだ。信号待ちをしているところに前に止まってたトラックの後ろに積んであった鉄材が転がり落ちてきたんだ。しかも、運悪く彼女の座っている助手席めがけ突っ込んできたんだ。俺はガラスの破片をあびただけ。ところが彼女は即死だった」

「そうだったのか……」

「ただ、彼女の親がうるさくてな。知らなかったか？ 彼女、市会議員の娘だったんだ。しかも一人娘とくれば殺されたと思うのも無理はないけどな」

「議員の娘？」

「ああ、俺はあんまり政治家なんて知らないけど知ってるやつらに言わせりゃかなり有名らしいぜ。おそらくそのへんから俺が殺したって噂が出たんだろう」

西崎は暗い視線をすっと落とした。

「悪かった……」

克行もまた何と書いていいかわからずに言葉を切った。
克行の心のなかに新たな思いが広がりとつあった。

死のクリスマスイブ・12

十二

その夜、帰宅後克行は夜遅くまで特権者優遇計画のそれぞれのリストを食い入るように眺めていた。

特権者リスト、特命者リスト、そして克行に関わっている殺人者リスト。これらのリストがもたくなって次々と人が殺されてゆく。しかも……

（しかも、あんなことで……）

西崎の悲しげな眼差しが思い出される。

——彼女は即死だった。

おそらくリストにある「殺人罪」というのはその事故のことを言っていることに間違いないだろう。

特権者を選ばれるのは国にとって、というよりも政治家にとって都合のいい人材。そして、特命者を選ばれるのはそれに反する人たち。

そんなことが許されていいのか。

おそらく政治家である父親が娘の敵討ちのつもりで特命者として西崎を登録するように手を回したのだろう。西崎だけじゃない。特命者リストに載っている者たちな皆、罪を犯したわけでもない普通の人々だ。それなのに一部の者たちに不快に思われるだけで殺されなければならない。

克行はしだいにやり場のない怒りにかられていくのを感じた。

RRR……

十二時を過ぎた頃、突然電話が鳴り出した。その電子音の響きに克行はびくりと身をすくめた。それはどこことなく悪魔の呼び出し音

のように思えた。この電話をとった直後悪魔が俺の耳に囁きかけるんだ。「おまえの魂をよこしやがれ」って具合にだ。そして克行の感じた予感はあるがち間違ったものではなかった。

「はい、風間です」

——もしもし、特権者優遇計画委員会のものですが。

それは一日の終わりに特命者の死を伝える市役所からのものだった。今夜から一週間この電話に悩まされることになるだろうことを克行は知っていた。どこか神経質そうな尖った声。あの牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた職員の顔を克行は思い出した。

「……はい」

（こんな時間まで働いてるのかい？ 人の死を伝えるのはそんなに楽しいのか？）

心のなかで克行はあの男を皮肉った。奴の尻には黒い尻尾がはえているに違いない。そして頭には……

——本日、除名者が記録されました。あなたのリストからの削除をお願いします。

「削除者？ もう？」

滑稽な悪魔の格好をさせた職員の様子は消え、克行の脳裏に自分の見知った人たちの顔が浮かんだ。しかし、電話の声はそんな克行の動揺など構う様子もなかった。

——名前を呼びあげます。あなたのリストからの削除者は特命者ナンバー0024・笠木義治。以上です。

電話はそれだけでぷつりと切れた。

削除者、つまり殺されたのは一人だけ、しかも克行の知らない人物だった。克行はほんの少しほっとしながら自分の持つリストに印をつけた。彼らの死は滅多なことがない限り殺人事件としても一般のニュースとしても伝えられることがない。もしニュースとして伝えられることがあるとすれば、それは克行が以前出会ったような狂喜の事件だけだ。そのことを考えるとニュースとして出ないのはむしろ平和な証拠といえる。

そうだ、これが今の平和なんだ。

この人はなぜ殺されなければならなかったんだろう。六十一歳と書かれた男の欄を見つめながら克行はやりきれない思いにかられた。クリスマスを前に孫たちへのプレゼントを買いこみ、それを手渡すことを楽しみにしていたのかもしれない。それともクリスマスのことなど意識することなくただ毎日を過ごしていたのかもしれない。いずれにしても「特権者優遇計画」などというものが頭にあったはずがない。おそらく自分自身わけがわからないまま、ひよっとすると「特権者優遇計画」そのものを知ることもないままに殺されたのかもしれない。突然、拳銃を突きつけられ、死を予感する間もなく死に恐怖することもなく殺される。昨日まで何事もなく暮らしてた人も一晩が過ぎれば一枚の紙切れのために冷たい屍に変わっている。あまりに簡単すぎる死じゃないか。

（ごめんだな、俺はそんな死にかただけは嫌だ）

それならどんな死にかたが望みだ？ 麻美のためなら死ねるか？ 麻美を守ると決意していながらも、それでも彼女と接することが怖くなってしまっている。麻美の不安な視線がいつも疑い深く克行を見ているように思えて仕方無い。

疑心暗鬼。克行の心にも麻美の心のなかにも小さな鬼が生まれている。麻美に計画のことを伝えて以来そのことがひしひしと感じられていた。

（無事に生き残れたとして俺たちはこれまで通りやっていけるだろうか）

冷たいものが心を走る。まるであり地獄に落ちてしまったようだった。決して這い上がることも出来やしない。

克行は自分の持つリストと特命者マスターリストを比較した。そして、それぞれの特命理由を見ていった。だが、どれも漠然としたものばかりで具体的な理由は書いてはいなかった。ただ、約半分をしめているのは「高齢」という二文字で、これだけは克行にもどうということか想像出来た。今や世界一の高齢化社会となった日本。政

府は今、なんとかしてこの問題をクリアしようと躍起になっている。この特権者優遇計画もおそらくそれが大きな一因となっているのだろう。

部長の桜川には「反逆罪」となっていた。克行は先日の桜川を思い出した。桜川は何かに脅えているようだった。自分が特命者として登録されていることも想像していた、そんな素振りだった。

いったい部長は何をやらかしたんだ？ 部長にも聞いてみるべきだろうか？

それが危険な考えだということは自分でもわかっていた。

意味もなくそんなことを尋ねれば、おそらく克行が特権者として選ばれたことに桜川は気づくだろう。そして、逆に桜川の名前が特命者リストにあることを追求されるに決まっている。その結果起こるであろうことを十分予想出来る。しかし、今年の「特権者優遇計画」の流れを調べる意味でも桜川が特命者選ばれた理由を知っておくというのは非常に大切になってくる。

それならば明後日のことが過ぎてからでも遅くはない。

その後ならば克行が特権者選ばれたということは仕事を通じて克行を知る人間ならば皆に知れ渡ることだろう。そのなかには当然、桜川もいる。

明後日、克行は同じ特権者である坂本と波川の二人を殺害するつもりでいる。二人とも特権者として麻美を殺す位置にあるからだ。その二人を消すことにより麻美の危険も一部消すことが出来ると克行は信じていた。

俺は本当に人を殺せるんだろうか。

自分が置かれている立場が未だに信じ切れない気持ちがあった。

死のクリスマスイブ・13

十三

十二月 十九日 (火)

涼子から電話があったのは火曜の夜。克行がマンションに帰りついたのは十一時を少し回った頃だった。帰りつくと克行は何よりも早く、明日のための準備を始めていた。

——克行？

携帯電話を取ると克行の耳に、慌てている様子の涼子の声が飛びこんできた。

「ああ、涼子か？　どうかしたのか？」

——あのことについてだけど……

あのこと。すでに涼子からの電話というだけで特権者優遇計画のことだということは予想出来ていた。

「そのことについて、俺も話したいことがあるんだ。特命者のなかに会社の同僚がいるんだが、そいつが特命者リストに載せられた理由がわかったんだ。それは——」

——克行！

西崎のことを話そうとする克行を涼子が制した。それはまるで克行の言うことがすでにわかっているかのようだった。その声に克行はただならぬものを感じ取った。

「どうしたんだ？　何かあったのか？」

——もう忘れて欲しいの。

「なんだった？」

意外な涼子の言葉に克行は耳を疑った。

「忘れろってどういうことなんだ？」

——特権者優遇計画のことにはもう首を突っ込まないで！

強い口調で涼子は繰り返した。

「そ、そんな……首を突っ込むな？ 今更何言ってるんだ？ だいたい好きであんなことに首を突っ込んでるわけじゃない。それはおまえだってわかってるだろう。俺は特権者選ばれたんだぞ。日曜に突然通知をよこされ、市役所に呼ばれ拳銃を渡され——俺がそんなことを望んだと思ってるのか？ わかってるのか？ それに——」

（それに明日はそのせいで人を殺さなければいけないんだ）

その一言が漏れそうになり、克行は慌てて口を噤んだ。いくら涼子といえどもそのことはまだ言わないほうがいい。テーブルの上にのせてある拳銃にちらりと視線を向けた。

しかし、涼子の口調はやはり変わらなかった。

——克行の気持ちはわかるわ。でも特権者選ばれたことなんか忘れて欲しいの。特権者の権利を放棄しても構わない。とにかく自分を守ることでだけ考えればいい。それ以外は何も考えないで。

「おまえ、何を言ってるんだ。何かあったのか？」

思いもよらぬ涼子の言葉に克行は焦りを感じていた。

——何でもないわ。とにかく忘れて。それが克行にとって一番いいのよ。

「そんなことが出来るわけないだろう。俺が特権者選ばれてるだけならともかく、麻美が特命者選ばれてるんだぞ」

——麻美さんのことは私の任せて。

「任せる？ 馬鹿なことを言うな。理由もわからず今更手をひけるもんか！」

——……

「涼子！」

——たぶん、あの人は大丈夫だと思う……

言葉の一つ一つを確かめるように涼子は言った。まるで克行に知られたくないことがあるかのようだ。

「何だって？」

——あの人は大丈夫。あの人が特権者に殺されることはないわ。

「何でそんなことが言えるんだ？ おまえ、何かわかったのか？」

——い、いや……そうじゃないけど。

涼子の声がどこかたどたどしい様子に変わった。何かに脅えている？ いや、違う。いずれにしても何かを隠している。

「涼子！ いったいどうしたんだ？」

——何でもないわ！ いい？ あの人のことを本気で守りたいなら、なおさら計画のことを知ろうとしないこと。計画が終わるまで、そして終わってから今後いっさい計画には関わりあわないで。私ももう調べるのをやめるわ！

脅えをはね飛ばすような口調で涼子は怒鳴り、克行の耳を貫いた。だが、そんなこともいっこうに気にすることなく、克行はますます受話器を耳に押しつけた。

「何かわかったんだな？ いったい何がわかったんだ。麻美が殺されないってそれはどういうことなんだ？」

——何もかも忘れて！ 私が今日言ったことも、これまで調べたことも全て特権者優遇計画に関することは忘れて！ そのほうがあなたのためよ。私ももうあなたに連絡はしない。あなたもしばらくは私と会わないようにして！

最後の言葉にありったけの強さをこめて涼子は電話を切った。

克行は思いもかけぬ涼子の言葉に、しばらくの間受話器を置くことも忘れ茫然と考え続けていた。

いったいどういうことだ？ 特権者優遇計画のことを忘れろ？

麻美は殺されない？

いったい涼子は何を考えているんだ？ いったい何があったというんだ？

どう考えてもわからなかった。

涼子は今年の特権者優遇計画にミスがあったのだろうと言った。そのミスのために麻美の名前が特命者リストに記載されることになったのだらうとも言った。特権者優遇計画についてのシークレット

ファイルがあり、そのファイルを調べてやるとも言ってくれた。あれはつい先日のことだ。そして、今日涼子は手のひらを返したように計画のことを忘れるという。麻美が殺されることはないという。シークレットファイル？

先日、涼子が言っていたシークレットファイルの存在がふと頭をよぎった。もし、涼子がシークレットファイルを覗いたとしたら……。

克行の心のなかに真っ黒な雲が広がり始めた。

もし、克行の考えが正しければシークレットファイルのなかには驚くほどの重大な何かが隠されていたことになる。しかも、それは克行や麻美にも関わってくる可能性すらあるのだ。

いったい何が隠されていたんだ？

克行はツーツーと鳴り続けている受話器を見つめた。こちらから電話してみようとボタンを押した。発信可能の長い発信音が受話器から聞こえてくる。

だが、ダイヤルの途中で克行は思い止どまった。

おそらく今、電話したところで涼子は教えてはくれないだろう。

彼女の性格を克行はよく知っている。一度口に出したことをそう簡単に変えるはずがない。

克行は携帯電話を置くと、その手に拳銃を握んだ。

(明日のことはやめたほうがいいんだろうか……)

決心が鈍っていた。そもそも自分が人を殺すということ自体が現実離れしているようにも思えた。もしやっただとしてもそれが成功する可能性など極めて低い。

だが、すぐに克行はその考えを打ち捨てるように強く頭を振った。臆病にならないほうがいい、へたに臆病になるとそれこそ失敗する。

それは明日の計画を実行しようと決めたときからずっと思っていたことだ。戸惑いは戸惑いを生み、その戸惑いが最終的に失敗を伴う。それはどんなことでも同じことだ。しかも今回、失敗は許され

ない。

麻美を救えるのは俺しかない。

克行は自分自身に暗示をかけた。暗示をかけることによってぐらつく決心を食い止めたかった。それに「死」という大きな危険が自分たちを包んでいるのは事実だ。涼子の言葉に裏づけがされない限り、まるっきり信じることなど出来るはずがない。そしてそれはそのまま麻美の危険が消えていないことにつながる

克行は弾倉を外すとケースから弾丸を取り出し一発づつ丁寧に装填していった。全部で六発、ナンバーの掘り込みである弾丸は全て拳銃のなかに装填された。弾丸が装填されることによって拳銃がなおさら重くなっていくような感じを克行は覚えた。

立ち上がって窓に向かって構えてみる。

自分の姿がガラスに映って見える。思わず怖くなってベッドに拳銃を投げ捨てた。それは自分を襲う恐怖ではなく、まったく逆のものだ。自分自身の心のなかにある殺意に対しての恐怖だった。心のどこかで人を殺す欲望が芽生えそうな気がした。

（違う……そんなつもりじゃない）

克行は懸命に自分の心に反発した。

死のクリスマスイブ・14

十四

十二月 二十日 (水)

I M Mはもともとはテレビやビデオに使われる電子部品を製造してきた。しかし、五年ほど前からパソコンや大型コンピュータなどに使用される半導体にも手を出し、今や大手メーカーと肩を並べるほどの力になってきていた。その原動力になってきたのがI M M技術研究所であった。

I M M技術研究所は本社からの技術員を含め約五十名ほどで、本社の片隅にある小さな七階建てのビルのなかにあった。その一部にシステム課が存在している。

克行がそこを訪れたのは午後二時近くなってからだった。

あまり早く訪れては不自然になるのではと意識的に着くのを遅くしたのだ。何よりもK I N I Cの坂本が到着していなければ波川と二人で時間を待たなければならぬ。それだけは避けたかった。

波川のいるシステム課、課長室は四階にある。

克行は受付で入館証を受け取り、階段で四階まであがっていった。エレベーターは備わってはいたがそれは備品の運搬用に使われており社員のほとんどは階段を利用していた。普段は面倒くさいと思える階段が、今日は一段一段をあがっていくことによって心が引き締まって行くのを克行は感じた。

四階には波川のいる課長室と資料室、そして会議室がある。会議室は一部ガラス窓になっており廊下からもなかの様子を見ることが出来る。会議室はそれほど広くはなく、約十五名から二十名ほどが入れるように作られている。中央には楕円を描くように長机が並べられている。

克行が着いた時、波川は会議室の一番奥である窓のすぐ近くの席にいた。すでに坂本も着いており二人で話しこんでいた。どうやら二人の趣味であるゴルフの話題らしい。二人がそろっていることに克行はとりあえずほっとした。

二人は克行を見つけると立ち上がった。

克行は部屋に入るとゆっくりとドアを閉めた。

「どうもお忙しいなか申しわけありませんでした」

階段をあがりながら何度も何度も頭のなかで繰り返したセリフを口にした。どんな言葉であろうと相手に不信に思われてはいけない。そんなことがあれば全て駄目になってしまう。何よりも自分の決意が揺らいでしまうようで怖かった。

二人はそんな克行に別に不信を抱いた様子はなかった。

「いえ、とんでもない」

坂本はにこやかに笑いかけた。

株式会社K I N I Cのシステム開発部係長である坂本とは二年前、克行が坂本のもとで行われているシステム開発を手伝ったことで気に入られそれ以来いくつかの開発を二人で行ってきた。

坂本も今年四十歳になるが、今でも人事管理や営業管理に留まることなく開発にも携わっている。

「今日はどういう用件でしょう。確か設計の概要についてということでしたが……。それにしても我々三人だけで？」

波川がほんの少し怪訝そうな顔をした。いつもは研究所の作業着を着ていることが多いが今日は坂本が来ているせいか紺のスーツで身を固めている。太った体がやけに窮屈そうに見える。

「ええ、あくまでも概要についてですから……」

克行は波川に向かうような形で椅子につくとすぐに書類を鞆から出した。

「しかし、私が見てもわかるかねえ。他に誰か呼んだほうがいいんじゃないかね」

「いえ、今回は波川さんだけで結構です。この三人で話したほうが

かえって正直に話せるでしょう」

（逃がすものか。ここまでできてしまったんだ。もうやめることは出来ない）

いつもは笑い飛ばしてしまえる波川の言葉に、今日は怒りがこみ上げるのを克行は感じた。

克行の心のなかに殺意が広がっていく。そんな殺意を押し包むように克行は仕事を押し進めた。雑談をするほどの余裕はなかった。

自社でコピー済みの書類の束を波川、坂本の二人に手渡す。書類のほとんどがそれほど重要でない、これまで話し合われてきたものが書かれているだけのものだった。おそらく書類を読み終われば、そのことに二人も気づくことだろう。だが、書類を全て読ませるつもりなどなかった。

二人が書類に目を通しはじめる。あとはいつ計画を実行するか、それだけだ。装填済みの拳銃がポケットのなかで克行の殺意の実行を待っている。

（殺せるのか？ 本当に？）

頭の隅で正直な恐怖感がふと克行の心にささやく。

（殺れるさ、俺にだって人を殺すことくらい出来る。麻美のためだ、彼女の命を守るためだ。ためらうことなんかない。この二人も特権者として平気で人を殺すんだ。いや、もうすでに殺しているかもしれない。ここでこの二人を殺すことが多くの人の命を救うことになるんだ）

二人は書類に見入っている。

克行はそっと右手をポケットへ向けて動かした。ポケットの外から拳銃に触れる。

それはしっかりとそこに存在していた。

わかつてはいるものの実際に触れるとびくりと指がびくつく。克行は二人に気づかれないようにポケットのなかに手を滑り込ませ、拳銃を握った。

（気づくな、最後まで気づくな）

祈るような気持ちで二人を見定める。波川、坂本の二人が特権者としてお互いを知っている可能性だってある。そうすれば当然、二人の意識のなかに特権者優遇計画があるはずだ。そして、それにとまあ危険性というものも二人とも心得ているだろう。

克行は最後まで二人が気づかないように祈った。

人を殺す。麻美を守るためとはいえあまりにも生々しい殺人は行いたくなかった。

克行は思いきって立ち上がろうとした。だが、その瞬間ドアをノックする音が克行の行動を止めた。

波川も坂本もその音に顔をあげる。

「失礼します」

事務員の吉村智子がコーヒーを運んできた。何度も来ているため、克行の好みも坂本の好みも彼女にはわかっていた。彼女はゆっくりとした足取りで入ってくると軽くおじぎをしてからコーヒーを配りはじめた。おそらく波川が彼女にこの時間になったら持つてくるように指示していたのだろう。

（早く行ってくれ！ 今だ、今しかないんだ。今を逃したら俺の気持ちも揺らいでしまう。頼む！ 早く行ってくれ！）

克行は無表情を装いながら懸命に彼女の緩慢な動作を呪った。しかし、吉村は克行の気持ちなど知るわけもなく相変わらずゆっくりとした動作で坂本、克行、波川の順にコーヒーカップをテーブルにのせてゆくとやっと背を向けた。

だが、次の瞬間彼女は振り返り不思議そうな視線を克行に向けた。「どうかしましたか？」

「え？」

背筋がぞつとするのを克行は感じた。

「顔色が悪いわ」

「そ、そうですか……」

克行は両手で顔を軽く擦った。

「具合でも悪いんですか？」

坂本も顔をあげ克行を見ている。その坂本の声に波川も顔をあげる。

「……風邪かな、昨夜から少し熱っぽいんですよ。でも、たいしたことないから大丈夫です」

克行は無理に笑って見せた。

「そうですか……、もし具合が悪いようなら言ってください。葉ならありますから」

吉村は優しい笑顔でそう言うと、やっとドアへ向かって歩き出した。それに合わせるように波川、坂本の視線も再び書類に戻ってゆく。

彼女は再び一礼してドアを閉めた。

克行の鼓動が再び高く鳴り始める。

波川、坂本の二人も彼女の言葉を忘れ再び書類へと目を戻している。

テーブルの上にのせてある左手が微妙に震えている。

（何を怖がっているんだ。落ち着け、落ち着くんだ！）

もう邪魔にはいるものはない。もしあったとしてもそれでも行動してしまえばいい。しよせん、ここで起こることを隠し通すことは出来ないのだ。

克行は右手をポケットのなかの拳銃を握るとゆっくりと立ち上がった。

影が坂本にかかり、坂本がゆっくりと顔を上げる。その坂本の顔面に狙いをつけ、克行は拳銃を向けた。まるで拳銃を握ったその手が自分のものではないように感じられた。なぜ、俺はこんなものを握っている？ 自分自身に問いかけたくなった。もっと不思議そうな顔をしているのが坂本だった。実際に何が起こったのか把握していない。波川はまだ書類に目を落としている。

坂本の顔が現実を掴み、急激に歪む。

（殺せるのか？）

（殺す！）

（殺らなきゃ——）

（望みは……）

（「死」）

（でも——）

（殺せ！）

（「メリークリスマス」）

サンタの声が聞こえた。

それは引き金を引くというよりもギュッと右手を強く握りしめたというほうが近かっただろう。

しかし、それでも拳銃はしっかりと克行のなかで小さく跳ね上がり火を吹いた。

克行の頭のなかが一瞬空白になった。音という音が跡絶え、銃声さえもまるつきり聞こえなかった。ただ、握っていた拳銃がやけに熱く感じ、その瞬間に椅子から坂本の体が頭から転げ落ちてゆくだけのしつかりと見えていた。

（俺はついに殺したんだ）

転げ落ちた坂本の足が長机を蹴り上げ、跳ね上げられたコーヒークップが宙を舞って床に落ちて割れるまで、克行はまるで夢を見ているような気分浸っていた。市役所の職員が拳銃の説明をした時の人形の首が吹き飛ぶ場面が頭に思い出された。

「か、風間……さん！」

波川は椅子から立ち上がることも出来ず、目を丸くして克行を見つめた。声がうわずり、口が意味もなくぱくぱくと動いている。

我に返ると克行は、すぐに震える右手を波川へと向けた。そして、そうしながらもちらりと横目で倒れた坂本の状態をうかがった。今にも坂本が立ち上がり、襲いかかってくるようなそんな錯覚を覚えた。

坂本の……いや、坂本であった肉体は椅子から投げ出され、力をなくしている。顔はさっき撃たれる瞬間に克行を見つめたままで、違うところといえばその額の中心に赤い穴が空き、後頭部から流れ

た血がカーペットを濡らしているということぐらいだろう。

（間違いない。死んでる）

克行は改めて人を殺したことを実感した。

「ど、どうということなんだ？」

波川は相変わらず、克行の行動が理解出来ないらしく震え続けている。

「あんただってわかってるはずだ」

急がなければいけない。そう思いながらも克行は波川に答えた。

まるで酔っているかのように視界がぐるぐると回って感じる。

微かに吐き気がしていた。

「何を言ってるんだ？」

「あんただって本当はわかっているんだろう。今がどういう時期かを！」

そうすることによって吐き気を押さえようとするかのように克行は声をあげた。その言葉に波川の表情が変わる。だが、それは恐怖へではなく安心へのものに見えた。

「そ、そうか……風間さんも特権者に選ばれたんだね。だが、私を殺すのは間違ってる。実は私もあんたと同じ特権者なんだ」

「……」

「さあ、拳銃をしまってくれ。そんなもの日常から持ち歩くものじゃないだろう。そうか……坂本さんは特命者だったのか」

波川は恐怖から救われた喜びからか、微笑みながら立ち上がった。そして楽しい表情で坂本の死体を覗き込んだ。

「だがねえ、いくら特命者だといってもこんな殺し方はまずいんじゃないかね。お互い顔を知っているし、仕事の付き合いもあるわけでしょう」

その微笑みが克行には許せなかった。怒りが吐き気とともに沸き上がってくる。

「何か勘違いしているんじゃないですか？ 坂本さんは特命者じゃありませんでした」

「特命者じゃなかった？ それじゃどうして？ そりゃ特命者でなくとも殺すことは出来るけど――」

「逆だよ。坂本さんは特権者だったんだ」

「なんだって？」

「特権者だからこそ殺したんだ」

「……」

「あんたも同じだ」

波川の顔に再び恐怖の表情が戻る。

「馬鹿な、特権者が特権者を殺すなんて……殺されるのは特命者なはずだ」

「特権者を殺していけないなんていう規則だってないだろう」

右手が震える。克行は拳銃にそっと左手をそえた。震えていることを波川に知られたくなかった。

「君はいつたい何を考えているんだ！ 特命者は殺されても当然の奴らなんだ。わかってているのか？ 我々とは違うんだ！」

「誰が決めた？ 役所が勝手に決めつけたただけだ。特権者だろうと特命者だろうと同じ人間だ。俺に言わせれば、きさまみたいな奴こそがクズだ。きさまのような奴こそ死ねばいいんだ」

「それじゃ君はどうだ！」

波川が言い返す。「君だって特権者なんだろう！ 坂本さんだって殺したじゃないか！ 偉そうなことを言って、君も人殺しだ！」
「そうさ、俺も人殺しだ。けど、他の人ならともかくきさまたちなら殺せる。人殺しを喜ぶようなきさまたちならな！」

心臓に狙いをつける。

「や……やめろ！ 頼む！ いったい何が要求なんだ？ 金か？」
逃げ出すことも出来ず波川はその場に崩れ落ちた。坂本の死体のすぐ側で祈るように手を合わせ、ちらちらとドアのほうを盗み見ている。

「頼む！ 金が欲しいならいくらでもやる。だから助けてくれ。私はまだ死にたくないんだ」

組んだ手で心臓が見えなくなり、克行は狙いを額へと移した。

「金なんかはいらん。欲しいのはきさまの命だ」

「ひいひい！ やめろ！ やめろ！ やめろおおおおお！」

克行の気が変わらないのを悟り、波川は這いながら逃げ出した。その背後から克行は波川の頭のあたりへ狙いをつけ、引き金を絞った。

再び克行の手のなかで拳銃が跳ねた。弾丸は後頭部から脳を突き抜け、波川の体はうつ伏せに床に落ちていった。今度もまた克行には拳銃の爆発音は聞こえなかった。その代わりに弾丸が頭蓋骨を貫く音と、ぐちゃりと脳を通過する音が聞こえてきたような気がした。
(や……やった……)

克行は拳銃を下ろすと波川へ近づいた。

(よし、死んでる)

波川の死を確かめると克行は火薬の匂いのする拳銃をポケットのなかへ押しこんだ。

今は四階に他に人もいないらしく、拳銃の音も誰にも聞こえずに済んだ。そのことに克行はほっとした。もちろんこの後二人の死体が発見されれば誰が犯人かすぐにわかることだろう。坂本にしても会社に今日の打合せのことは伝えてあるだろうし、何より事務員の吉村に克行がここに来たことを見られている。だが、それでも克行は全てが済むまでは他人に介入されたくはなかった。

波川の死とともに不思議なことに吐き気はすっかり納まり、今ではむしろ完全に落ち着いていることが自分でも感じられた。

克行は坂本の死体まで戻ると坂本のポケットを探った。けれど目的の拳銃も弾丸も見つけることは出来なかった。ここで拳銃を奪っておけば、今後なおさら有利になると思ったのだ。すでに弾丸は二発使い、残りは四発になっている。予想以上に順調に二発の弾丸だけで二人を消すことが出来たものの、それでも弾丸は多いほどいいに決まっている。何よりまだあの立花をはじめ三人が残っている。ふと、坂本の体に触れ、克行はびくりと手を引っ込めた。まだ生暖

かい。

克行は諦めるとテーブルにのっている自分の書類を片付け始めた。少しでも早く部屋を出て行きたかったが、自分がいたという跡を残したくはなかった。

ふいにドアが開けられ、克行は驚いて顔を上げた。

吉村智子だった。逃げることも出来ずに恐怖に顔を歪ませながら床に倒れている二つの死体を凝視している。

コップが落ちて粉々になった。薬の瓶が転がり白い錠剤がばらまかれている。その吉村の姿が再び克行の落ち着きを取り去った。

（落ち着け、落ち着くんた）

克行は書類を鞆にしまうと、ゆっくりとドアに向かって歩き始めた。

「あ……あの……くす…薬を」

吉村が身をすくめるようにしてたどたどしく弁解するのを、克行は冷たい目で見つめながら近づいて行った。

自分が何をしようとしているのか自分でもわからなかった。

（殺すのか？ この人のことも……）

（なぜ？）

（殺しておいたほうが……）

錯乱状態になっていることが自分でもわかった。

「……あの……あたし……」

まるで蛇に睨まれた蛙のように動くことも出来ずにいる。その体は小刻みに、そして激しく震えている。

克行は吉村の前に立つと再びポケットのなかから拳銃を出し、彼女の顔の前に持っていた。

「た……助けて……」

視線が拳銃を見つめ、細いかすれた声で吉村は訴えた。目が涙で潤んでいる。その顔がやけに美しく感じられた。

「僕は特権者です。わかりますね。特権者優遇計画を知っていますね。今はその特権者優遇計画が実行されているんです。だから、こ

れは犯罪なんかじゃありません」

「は……はい」

「あなたを殺そうとは思いません。別に黙っているとも言いません。僕が出て行ったあと、騒ごうと警察に連絡しようとそれはあなたの勝手です。ただ、出来るなら僕が出て行くまでは騒がないで下さい。僕自身、今、自分が押さえられずにいます。あまり騒ぎ立てられると……わかりますね」

「……はい」

吉村はコクリとうなずいた。

克行は拳銃をポケットにしまうとゆっくりと部屋を出た。

満足感が心の奥に潜んでいることに自分自信気づいていなかった。

死のクリスマスイブ・15

十五

電話が部屋に鳴り響く。

だが克行はただじっと電話を見つめ、動こうとはしなかった。誰なのか、どんな電話なのかそれはわかっていた。

五回、びたり五回コールされた後、留守番電話が答える。

——はい、風間です。ただ今出かけています。用のある方は発信音の後メッセージを入れて下さい。

しかし、メッセージは入れられずに電話は切れた。そして、次に携帯電話が鳴り出した。これがもう十回以上繰り返されている。

それでも克行は取ろうとはしなかった。それが会社からの電話だということ、克行は見抜いていた。

いい加減にしてくれ。それだけコールすれば十分だろう。いなのか、それとも出るのを拒否している、そのどちらかと考えるのが普通だろう。

部屋が夕陽で真っ赤に染まっている。

ふと克行は今日の出来事を思い出した。床に崩れ落ちた二人の姿。あの二人の体から溢れ出る真っ赤な血。

あの後、克行は会社に戻ることも出来ず、自宅に戻ると拳銃をテーブルに投げ捨てぼんやりと考えこんでいた。拳銃は夕陽をあびて満足そうにますます光り輝いて見えた。

今、克行が待っているのは会社からの電話などではない。

再び五回のコールのあと留守番電話が答えると、ついに相手も諦めたように喋り始めた。やはりそれは克行の想像していたように会社からだった。

——克行。俺だ、西崎だ。本当にいないのか？　もし、いるのなら電話をとってくれ。

声はそう言うとき一度言葉を切り、間をおいてまた喋り始めた。

——いないのか……まあ、いい。もしこのメッセージを受け取ることがあったらすぐに電話をくれ。桜川部長も田辺課長も、もちろん俺も会社で待ってる。……何のことはわかってるだろう。それじゃ……電話を待ってる。

ぷつりと電話が切れた。無論、会社に電話をいれるつもりなどはなかった。言い訳するつもりもない、説教されたくもない。奴らに何がわかるというんだ。会社で何が起きているのか、それは容易に想像することが出来た。

それでもふと悲しくなった。

法的には犯罪人にはならない。けれど、人の目は違う。ただの人殺しとしか見られないことを克行は知っていた。相手が特権者だということとは誰一人として知らないはずだ。彼らが知っているのは克行が特権者で、その権利を利用して坂本、波川の二人を殺したということだけだ。

（俺は人殺しになった）

あの時の感触が手に蘇る。

（違う……）

克行はぞっとした。人を殺すのはもっともつと恐ろしいもののはずだった。

（それなのに……）

あまりに簡単に彼らは死んでいった。実行する前には拳銃に詰まった弾丸全てを撃ちつくしてもやりとげられないような気がしていたのに。それが実際には一人に一発。たった二発の弾丸で成し遂げられてしまった。

なんて優秀なんだ！ そいつを特命者に向けてみる。特権者ランクAがもらえる。

しかもあの時克行が感じたものは恐怖などではない。それは……思いを断ち切るように克行は立ち上がった。克行の待つ電話はまだ来るはずがない。あの市役所の職員からかかってくる嫌な電話は

毎晩十二時過ぎと決まっている。

今日はやけにその電話を聞いたかった。

彼らがどんなふうに克行に対して特権者の死を伝えるのかそれが聞きたかった。狼狽えているだろうか、克行に対して警告をするだろうか。特権者優遇計画に対する反逆だと思っだろうか。彼らが悔しがる姿を心のどこかで望んでいた。

だが今、権利を取り上げられることが克行には一番恐ろしかった。権利無しでは法に背くことなく麻美を守ることが出来ない。

（まさか、権利をすぐさま取り上げようとは思わないだろう）

一瞬、自分のそんな思いが権利に対する未練のようにも感じられ克行は身震いした。

俺は人殺しを楽しみかけている。

それに気づかないように克行は頭を思いっきりシャッフルした。

克行は拳銃をテーブルからとり上着のポケットにいれると、その上からコートを着こんで部屋を出た。

麻美に会いたかった。

会って抱きしめたかった。危険が減ったことを伝えてやりたかった。

だが、麻美がそれを喜ぶだろうか。

そう思って克行は思わず足を止めた。

それを麻美が喜ぶはずはなかった。いかに自分の命が助かるとしても彼女は人殺しを望みはしない。

——どうやって私を守ってくれるの？

じゃああの言葉は？

違う、あの言葉は俺に殺人を強要したわけじゃない。

全てが悪い方向へ向かって考えてしまうことに克行は自分自身の弱さを呪った。

（そうだ、彼女はそんな女じゃない。ただの俺の思い過ごしだ）

麻美に会おう。もちろん今の時間ではまだ仕事から帰ってきてはいないだろうが。

再び足を動かす。

「やあ、出かけるのかい？」

マンションを出る克行を見て、管理人の杉本は病院の受付さながらガラス窓の向こうからにっこり笑って声をかけた。

マンションの出入り口は一つで、出入りする人は皆管理人室の前を通ることになる。

管理人である杉本はすでに八十歳を越えている。若い頃、事故で家族を無くし身寄りが無いという話を聞いたことがある。老人自身も右足を痛めており、常に黒い杖をついている。

「高齢」、特命者リストにはそう書かれていた。あのリストを見て以来、いつもこの場所を通るたびに胸が痛む。そして逆に毎日杉本の姿が見えることでほっとしていた。

出来ることならこの哀れな老人の「死」に立ち合いたくはなかった。

（本当に？　ほんの少し前におまえは人を二人も殺したんだぞ。それを忘れたか？）

押し隠そうとする感情をかいくぐってもう一つの心が姿を現そうとする。

えい、黙れ！

「具合はどうだい？」

杉浦の問いに、克行は自分が気分が悪かったため早退してきたと嘘をついたことを思い出した。

「もう大丈夫ですよ」

「そうかい、最近やけに寒くなってきたからねえ。体には気をつけなさいよ」

「――はい」

あんたも体に気をつけなさい。あんたの命は俺よりも危ないところにあるんだ――そう告げた時、老人はどんな顔をするだろう。だが、もちろん克行はそんなことを杉本に伝える気はなかった。西崎、桜川、そしてこの杉本たちの命を守るほどの力は克行にはありはしない。今はただ麻美を守ることだけで精一杯だ。鬱陶しい、不安気

な顔など見たくもなかった。

克行は笑顔を返すとマンションを出た。

風がやけに冷たい。

今にも雪が降りだしそうな気配すらしている。きっとクリスマス・イブに雪が降るという気象庁の予報はきつと当たることだろう。そして、その雪のなかにいくつもの死体が転がることだろう。

（ざまあ見やがれ！ きさまの頭のなかは死体だらけだ！）

克行はコートのポケットに手を突っ込むと、街に流れるジングルベルの音楽のなかを歩き出した。

死のクリスマスイブ・16

十六

麻美のマンションまで約三十分、夕陽は落ち街灯の明かりや店先に飾られたクリスマスのイルミネーションがやけに眩しく見えている。

まだ五時をまわったばかりで、さすがに麻美もまだ会社から帰ってはいないだろう。克行は時間を少しでも潰そうとするように、街に輝くイルミネーションを眺めながらゆっくりと歩いて行った。

なぜだか、ぼんやりと田舎の家族を思い出していた。実家には兄夫婦が両親とともに暮らしている。もう三年も帰ってはいない。今頃はもう真つ白な雪が降り積もっていることだろう。あそこには何も無い。何も無いからこそ若者たちは高校を卒業するとすぐに田舎をあとにする。だが、あの小さな町にも「特権者優遇計画」は存在しているのだろうか。町の人間全てが顔なじみであるにもかかわらず、特権者と特命者にとわかれて殺しあうことになるのだろうか。（やめろ。そんなことを考えるな！）

克行はすぐにその思いを振り切った。そんなことを考えたところでどうなるものでもない。それぞれ自分なりに解決するほかないことなのだ。全ての人達を救えるほどの力を自分をもっていないし、そんなことが可能なほど特権者優遇計画という政策は小さな存在ではない。

楽しげな笑い声を響かせながら女子高生の一団が通りすぎる。こうして何も知らずに街を行き交う人々のほうが利口なのかもしれない。

ふいに道行く人々のなかに克行は一つの大きな恐怖をかいま見たような錯覚を覚えた。道路を挟んで一人の黒づくめの男の姿がちらりと見えたからだ。

立花？

一瞬だった。一瞬、そこにあの立花の姿があったような気がした。振り向き、目を凝らすようにして人込みを見ていたが、すでに立花の姿は見つけられなかった。

気のせいかな？ いや、違う。なぜこんなところにあの男が？

ふと足を止め麻美の住むマンションを見上げた。そこからはいくつもの部屋の明かりが見ることが出来た。

いるはずのない麻美の部屋に明かりが灯っている。

一瞬、嫌な予感が頭をかすめ、克行は足を早めた。

（まさか……まさか……）

「殺人者リスト」のなかの立花の名前が脳裏をよぎる。

今日見たあの景色が再び頭に広がる。

床にしだいに流れ出すどす黒い血。イメージが麻美に重なり克行は頭を振った。

そんな馬鹿なことがあるはずがない。昨夜電話した時には何もなかった。

そう自分の心に言い聞かせた。それなのに不安はますます大きくなっていく。

立花？

頭のなかに作られるイメージはますます広がりついにはあの立花の姿を登場させた。あの気味の悪いにやにや笑いをさせながら立花が拳銃をまっすぐに麻美に向けている。

（やめろ！ やめろ！）

空想のなかの立花に怒鳴りながら、麻美の部屋のある三階まで克行はいっきに階段を駆け上がった。

そんなことがあるはずがない。そうともそんなに簡単に殺されるものか！ 人を殺すのはそんなに簡単なことじゃない。

（簡単に？ おまえは簡単に二人も殺してきたじゃないか？ それとも他人は殺されても自分の恋人は殺されないとでも？ まったく自己中心的じゃないか）

頭のなかでさまざまな考えが浮かび消えていった。

神に祈る気持ちだった。いや、神であろうと悪魔であろうとなんだったてよかった。麻美を守ってくれるものならどんなものでも信じられる。そうだ、あの立花にしたって麻美のことさえ狙わなければどんなことをしたって許せる。今度、克行のもとへ協力を求めてきたならば進んで協力してやろう。

息を切らせ麻美の部屋の前に立ち、チャイムを押した。その指が震えていた。

（麻美……）

目を閉じて、中の様子に耳を澄ます。

微かにドアの向こうで物音が聞こえ、やがてインターホンから聞き慣れた麻美の声が聞こえてきた。

「はい、どちらさまでしょう」

その声に克行はほっと大きく息を吐いた。馬鹿げた考えが一気に消え去る。

「俺だよ」

「克行？」

すぐにチェーンを外す音が聞こえ、ドアが開かれた。

「どうしたの？」

驚いた顔で麻美は克行を見つめた。トレーナーとジーンズという軽装はとても会社帰りには見えない。

「おまえこそどうして家にいるんだ？ 仕事は？」

冷たい空気を遮断するように玄関まで入りドアを閉めると克行は彼女に尋ねた。いくぶん疲れたような顔をしていることが気になった。

「うん……ちょっと……」

「気にしてるのか？ あのこと」

馬鹿な質問だと我ながら思った。自分の命がかかっているというのに気にしていないはずがない。伝えないほうがよかったのだろうか。

「うん……まだ有休残ってるし……」

「まさか今週ずっと？」

「ううん、今日だけ。今日はちょっと気分が悪かったから」

「気分って――」

「ううん、たいしたことないの。もう良くなったわ。明日からはちゃんと仕事に行く。いくら派遣社員っていつまでも休んでたらクビになっちゃう。あ、入って」

玄関に立っている克行に気づいて、麻美はなかへ誘った。

「いや、もう帰るよ。麻美が無事ならそれでいいんだ」

本当はこのままずっと麻美のそばにいてあげたかった。けれど、今日自分の犯したことを、そして二人が置かれた立場を思うとあまりにもつらかった。それに週末までは危険も少ないだろう。

「心配してくれたんだね。ありがとう」

ふっと笑顔が漏れる。

「本当に良かった。こんな時間にいると思わなかったからかえって驚いたよ」

「……うん、ちょっと怖かったの」

「……」

「本当はずっと休んでいたい。部屋に閉じ籠もって鍵かけて……。でも、そんなこと出来ないしね」

「なぜ？ 出来ることなら俺もそうやってもらいたいよ」

「だめよ、今仕事だって忙しいもの」

「命には替えられないだろう」

「他人に言いたくないのよ。そりゃあ、特命者だから克行みたいに怖がられることはないかもしれないけど……でも、そんな人間がそばにいるとわかったら嫌がられるでしょう。言えないわ」

その気持ちは克行にもよくわかった。特権者、特命者に関わらず「特権者優遇計画」に少しでも関わっていると知れば警戒するに決まっている。

麻美は克行の顔を見て言った。

「でも本当に克行どうしてこんな時間に？　いつもだったら克行まだ仕事してる頃でしょう。克行も休んだの？　まさかね」

「まさか……」

笑った直後に突然悲しみに襲われた。

俺は今日いつもの通りちゃんと会社に行った。その後、仕事のついでに人まで殺したんだぜ。

それなのに今、こうして麻美と会って平然と笑っている。そのことがやけに怖かった。自分が感情のない殺人鬼に思えた。

「どうしたの？　何かあったの？」

「……」

（話すべきだろうか……）

克行は迷った。自分のために人が死ぬことを彼女が喜ぶはずはなかった。それでも今、二人の置かれた立場のことを考えると一切の秘密を作りたくはなかった。ほんの小さな秘密がこれまでの二人の関係を壊してしまうような気がした。

「克行」

「……君の危険が減ったよ」

やっとの思いで言葉を絞り出した。やはり麻美にだけは嘘をつきたくなかった。

「え？」

「ほんの少しかもしれないけど君の危険が少し減ったんだ」

（さあ、どんな顔をする？　まずは困ったような顔をしてそれがどんな意味を持つのかわからないように聞き返すんだろう）

克行は麻美の反応を予想した。

「……どうということなの？」

麻美は決して馬鹿ではなかった。克行の言葉からその意味を悟ったようだった。それでもやはり克行の予想通り彼女は聞き返した。その震えた声に克行は密かに安心した。

——どうやって私を守ってくれるの？

やはり麻美は殺人を強要していたわけじゃない。克行は心底彼女

を信頼した。

「君の名前の入った特命者リストを持つ人間が今日、二人死んだ」

「……克行……それは――」

「頼む……何も言わないでくれ。俺が言いたかったのはあいつらがどうなったかなんてことじゃない。おまえの危険が減ったってことなんだ」

麻美は何も言わずただうつむきながら克行の手をぎゅっときつく握りしめた。彼女の目に涙がうかび、頬をこぼれ落ちた。その涙の本当の意味を克行は知らなかった。

死のクリスマスイブ・17

十七

すでに日は落ち、すっかり暗くなった街中を帰路に急ぐ人々が忙しなく歩いて行く。そのなかに混じって克行の姿があった。

比較的ゆっくりとした足取りで、克行はマンションに向かって歩いていった。買い物帰りの主婦やサラリーマンたちがすたすたと克行を追い抜いて行く。その姿があまりに忙しく見え、いつもならこのなかに自分の姿があるのだろうと考えると可笑しくなり、克行はふと苦笑をもらした。他人のことには一切興味を持とうとしない自己中心的なその姿は今の克行にとって怒りを通り越して喜劇にすら思えていた。

「死」が「殺意」が人々を包んでいることに誰も気づいてはいない。皆、自分の生活のことだけを考えている。

死んでしまえばいい。皆、殺意の存在にすら気づかぬうちに死んでしまえばいい。

麻美の手のぬくもりが、彼女の優しさがまだ残っている。さっきまでの暗い気持ちが麻美に会ったことで少しやわらいでいた。いや、逆に自分のやったことに自信が持てたといってもいい。

自分のやったことは間違っていない。麻美がわかってくれる。誰もわかってくれなくても麻美だけはわかってくれる。それだけで十分だった。

今やまるで神を崇拝するかのように克行は麻美を思っていた。いや、そうでもしないとやりきれない思いがあった。どんなことをしても殺しを隠すことなど出来やしない。それならいっそ自分自身を騙しきるしかない。麻美のためにだけに行動すればいい。

麻美のためなら誰のことを敵にまわしたっていい。それに坂本にしても、波川にしてもあいつらは特権者だったのだ。人を殺す特権

者だったんだ。彼らを殺すことは間違っただけでいいなかつたはずだ。

（やってやろうじゃないか）

自分に暗示をかけるように克行は何度もそのことを心のなかで繰り返した。そうすることで自分のなかにある罪の意識を振り払おうとしていた。

駅から十分、克行の住む薄いブルーのマンションが月の光を浴びてうっすらと白く見えている。すでにいくつもの部屋に明かりが灯り、克行の部屋の両側も明かりがついている。

克行はマンションに向かって歩いて行った。早く帰って眠ってしまいたかった。全てを過去のことと変えてしまいたかった。もちろんそんなことが出来るはずのないことを克行は知っていた。何よりも今夜、またあの男の声を聞かねばならない。特命者の死を伝えるあの声を。

昨夜までに克行のリストから削除された特命者の合計は八名となっていた。その中にはありがたいことにまだ克行の知る人間は入っていない。今夜、あの男の口から克行の知る人間の名前が出るかどうかそれはわからない。だが、今日克行がやったことについて何等かの忠告があるのではないかと克行は考えていた。あの二人は他市の指定ではあるが、それでも元をたどれば皆特権者は国の指定といえる。克行はその特権者を二人も殺している。忠告がないはずがなかった。

克行がマンションに近づくと、ふいに入口からジーンズに黒いジヤンバー姿の若者が飛び出してくるのが見えた。何かに脅えているように何度も後ろを振り返り、どこかおどおどしている。克行は怪訝に思いながらも、それでもたいして気にも止めずにそのままマンションへ歩いて行った。若者はどうしていいかわからないように入口で少しの間うろうろしていたが、突然、回りを確かめることもなく走り出し、あやうく克行にぶつかりそうになった。

その瞬間、克行はその若者の顔に見覚えがあることに気づいた。若者のほうも驚いたように克行のことを一瞬ちらりと見たが、何の

反応もしめそうとはしなかった。ただ、真つ青な若者の顔だけがやけに印象的に克行の頭にこびりついた。以前にどこかで見た記憶があった。

（誰だ？）

走り去る若者の背を眺めながら克行は思い出そうとした。思い出さなければいけないという意識が働いていた。

マンションの住人？ いや、違う。彼を見たのはもっと別の場所だ。……どこで？

もっと何か大事な……

（そうだ！）

克行の心のなかに火花が散った。

あの若者の別の姿が克行の頭のなかにはつきりと蘇ってくる。

——みなさんは選ばれたのです！

市長の声が聞こえてくる。

あの部屋……。

そうだ、あの煙草の煙の充満したような部屋のなかだ！

あの若者を見たのがあの殺人者の群れのなかでだということが、今はつきりと思い出された。

若者の背中が人込みに消えて行く。

（いったいなぜあいつが？）

疑問の答えはすぐに克行自身で見つけることが出来た。今日見た二つの死体が頭のなかにくつきりと蘇っていた。そしてさらにもう一つの死体が予想出来た。

克行は走り出した。

「おじさん！」

克行はマンションに走り込むとすぐさま管理人室のドアを激しくノックした。予想した通り窓口には管理人の杉本の顔は見えない。部屋も暗く、中の様子を伺うことは出来ない。

「おじさん！」

窓口からもう一度呼んでみたが返事はなかった。だが、間違いな

く誰かがいる、いや、いたような気配がしていた。

「おじさん？」

克行はドアノブをそっと回した。鍵は閉まっておらず、克行はドアを開くとゆっくりとなかへと入っていった。暗い部屋のなかに嫌な匂いがしていた。

――本日、除名者が記録されました。

早くもあの声が頭に響いている。

そつとざらつく壁に手を這わせ、電気のスイッチを捜した。そして、明かりが部屋に満ちた時、克行は思わず息を飲んだ。

部屋はぐちゃぐちゃに荒らされ、誰かが揉み合った形跡があった。窓ガラスは割れ、冷たい風が吹きこんでいる。とてつもない何かがそこで起こったことを克行は知った。そして、何よりも部屋の片隅に転がっている老人の姿がそれを物語っていた。

「お……おじさん！」

走りよって抱き起こした。

老人の顔からはいつもの微笑みは消え去り、恐怖の表情で固まっていた。皺だらけの顔からは生氣は消え失せ、光のせいか青白く染まって見える。

――あなたのリストからの削除をお願いします。

うるさい！　ちくしょう！

老人を抱える手にべっとりとした感触が伝わってくる。胸と背中ほどす黒い血で染まっている。すでに息はなく、その体から急激に温もりが失われていくのが感じられた。

（こんな……）

急激に恐怖が襲ってきた。

今日、二人を殺した時にはこんな感じは受けなかった。それなのに、今自分が殺したわけでもないのに、なぜだか自分がこの哀れな老人を死に追いやったような気がしてならなかった。老人の体はやけに軽く、その軽さはまるで老人の命のようにさえ思えた。おそらくこの老人が死んだからといって悲しむ者などどこにもいないだろう。

う。年齢から考えても死んでもおかしくはない。だからといってこんな死に方が許されるのか？

血に染まった老人の杖がむなしく転がっている。

部屋のなかは恐怖に包まれている。昼間とは違う襲われる側の恐怖。

克行はそつと老人の臉をおろすと床に下ろした。自分の姿が老人の瞳に映っているような気がして嫌だった。

「……ちきしょう」

小さな呻き声が克行の口から漏れた。

今、克行の心にあるのは床に倒れている老人に対する哀れみなどではなかった。それ以上にさっき見た若者の姿が頭にちらついていて離れなかった。なぜだかあの若者が自分にとって大きな意味を持っているように感じていた。

死のクリスマスイブ・18

十八

携帯電話はいつものように十二時を少し回った時間に鳴り出した。克行は電話が鳴り出すと同時に電話に出た。

「――はい」

誰からかはわかっていた。むしろその電話を心から待っていた。

――特権者優遇計画委員会の者です。あなたのリストからの削除をお願いします。本日の削除者は三名です。特命者ナンバー0032・杉本真一郎、0105・山下美由紀、0622・藤川和也、以上です。

声はいつものように機械的に特命者の死を伝えた。今日初めて知っている人間の名が出てきたことに克行は知っていたながらも心が痛んだ。今日、何人の特権者に杉本の死が伝わるのだろう。だが、今はそんなことよりもっと大事なことが待ち構えている。

克行はじつと電話に耳を傾けた。しかし、電話の声はそれ以上のことを告げる事なくそのまま切れそうになった。

「待ってくれ！」

克行は切れそうになる電話にすがった。

――なんででしょうか？

「今日、特権者である二人が死んだはずですが……」

緊張感が体中にみなぎる。

――……はい、確かに特権者二名が本日死亡されました。それが何か？

（それが何か？ 何かだって？）

「その二人を殺したのが誰なのかわかっているんですか？」

挑戦するように克行は言った。

克行の問いに一瞬間があいた。だが、すぐにまたきっぱりとした

口調に変わった。

——はい。誰が殺したのかはすでに連絡が届いています。

職員はあくまで第三者的な言い方を崩そうとはしなかった。その口調は感情を持たないコンピュータの電子音のようだった。

「なら、なぜそのことについて何も言わないんですか？」

——その二人の死についてあなたに言うことなど何ありません。
「どういことですか？」

——また、彼らは特権者で特命者リストに載っているわけではありません。よって特権者の皆さんに彼らの死を伝える必要もありません。もし、あなたが彼ら二人を殺したことによって罪を犯したことになるのではないかと危惧しているのであれば安心してください。別段、規則違反になるわけではありません。特権者が特権者を殺してはいけないという規則もあります。あなたが「特権者優遇計画」の間に誰を殺そうと自由です。法的にもあなたは無実です。では失礼します。

その声はどこか克行の心を見通してあざ笑っているように聞こえた。電話はそのままぷつりと切れた。

死というものがやけに軽ろんじられているようで悔しかった。

（俺は何を望んでいた？）

ゆっくりと受話器をおろし自分が何を考えていたかを思い直した。もつと慌てふためき克行の殺人を問いつめる、そんな様子を描いていた。そうすることによって特権者優遇計画に対してほんの少しでも抵抗をしたかった。

それが克行の気持ちだった。だが、あまりにも現実には克行の思いとは違っていた。

（当たり前のことじゃないか……）

克行は改めて特権者優遇計画を恐ろしく感じた。

特権者であろうと特命者だろうとただ死人が出ればいい。政治家たちが考え出した人口削減計画なのだ。それが特権者優遇計画だった。わかっているつもりだった。どんなことが起きても計画を揺る

がすことなど出来るはずがないのだ。

——あなたが誰を殺そうと自由です。

それなら……それならきさまがいったい何者なのかはつきりと教えてくれ！　そうしたらきさまの鼻先に拳銃を突きつけてやる！　それでもまだ自由だと、無実だと言っていられるか試してやろうじゃないか！

あの職員の顔が脳裏をちらついた。

特権者優遇計画に対する怒りと、恐怖と、苛立ちと、寂しさとむなしさが心に渦を巻いていた。

決死の覚悟の抵抗までも、全て計画のなかに組みこまれているようにさえ感じられた。

たった二発の弾丸で二つの命を消し去ったのだ。なんと優秀なことだろう。これこそ市役所の望む最高の特権者じゃないか。おまえは国の役に立つ立派な特権者になっちまったんだ。さあ、国民栄誉賞だ。

奴らの嘲りの笑い声と拍手が聞こえる。

今まで必死に押さえてきた感情が狂喜へ向かって走って行く。

麻美の声が聞きたかった。自分自身の感情を押さえるためにも麻美の声が聞きたかった。夕方会った時の麻美の姿が頭に浮かんた。克行の言葉に微かな驚きを見せ、悲しそうに克行の腕のなかで涙を流した麻美の姿を思い出した。

携帯電話のボタンを押す指が震えていた。

数回のコールの後、ほんの少し眠たげな麻美の声が聞こえてきた。

——もしもし、克己？

「……麻美」

こみあげる気持ちを押さえながら克行はつぶやいた。

——どうしたの？

「いや……別に。眠ってたのか？」

——ううん、まだ。

気まずい雰囲気漂う。二人の間には以前のような単なる愛情だ

けが存在しているわけではない。二人の間には「死」が常に漂っている。

「さっき、また電話があった」

——電話？

「……市役所からの」

——……。

「今日のこと……俺がやったこと、あいつらちゃんと知っていやがった」

——何か言われたの？

「いいや、何も。まったく何も言おうとしなかった。だから、かえってこっちから聞いたんだ。どうなっているのかって」

——うん。

「法律的にも規則的にも違反にはならないらしい。俺はあくまで犯罪者にはならないらしい。馬鹿ばかしいだろ。二人も殺しておいて犯罪者じゃないなんて、ありえないだろ」

いくぶん声がうわずっているのが自分でもわかった。

——克行、自分を責めないで。

「責めてるわけじゃない。悔しいんだ。ただ、俺は悔しいんだ。わけもなく、むしろに腹がたってあいつらに腹がたって……」

——克行、あなたは悪くないわ。全て時の流れが、そうよ、運が悪かっただけなのよ。

「運か……」

自分自身、時の流れに逆らっているような気がしていた。もし自分が特権者などに選ばれなければ、もし麻美が特命者を選ばれなければ……どちらにしても今更しようがないことだ。

——だから苦しまないで。

「ありがとう……」

そのまま電話を切った。

麻美の優しさだけを胸に抱いていたかった。それだけが救いだっ
た。

その夜、克行は一つの悪夢に襲われた。それはベッドに入った時から予想していたことだった。

克行が拳銃を握り、あの場所に立っていた。そして、そこにはやはり坂本、波川の二人の姿があった。二人とも立ったままじっと克行を見つめている。

こいつは夢だ。克行はすぐにそれに気づき、夢から逃れようと試みた。だが、それとは裏腹に恐怖はしっかりと克行に襲いかかっていた。足はがくがくと震え、手は今にも拳銃を取り落としそうになっている。汗が全身を濡らしている。

そう簡単にはこの夢から逃れられそうにもない。

クソッ！ それならもう一度その頭を吹き飛ばしてやる。一度も二度も同じことだ。

思いきって拳銃を二人に向けて撃った。弾丸は狙い通りにしっかりと二人を捕らえ、波川の頭の半分と、坂本の胸元を吹き飛ばした。だが、それでも二人は動じなかった。それどころか克行の顔を見て削り取られた頭と穴の空いた胸を気にする事もなくにんまりと笑みを浮かべ、ゆっくりと克行に向かい歩き出した。

「来るな！」

克行は無我夢中で拳銃を握りしめた。弾丸は尽きる事なく次々と発射され、全て近寄る二人の体に吸いこまれていった。それでも二人の歩みを止めることは出来なかった。耐え難いまでの恐怖が克行の体のなかで膨れ上がり、ついに拳銃を撃つことも出来なくなった。そして、気づいた時には手の中から拳銃そのものが姿を消していた。克行は逃げ出そうとした。恐怖のために夢だということも意識の外に消えていた。しかし、足を動かすことも出来なかった。見ると頭から血を流して倒れている杉本老人の手がしっかりと克行の足を握りしめている。『逃がすものか！』その目はそう語っている。

やがて、坂本と波川は克行の目の前に立ち、その血で濡れた手でぎゅっと彼の肩を握りしめた。

「さあ、今度はあんたの番だ」

突然、二人の背後に麻美の姿があった。彼女の手には拳銃が握られている。彼女は悲しげな眼差しで克行を見つめ、それから拳銃を克行に向け、そいつをきつく握りしめた。

死のクリスマスイブ・19

十九

十二月 二十一日 (木)

一夜明けた朝もやけに気が重かった。
たとえそれが法に背いてはいなかったとしても、それでも殺人には変わりないのだ。

すでに十時を回っている。

エレベーターのなか、克行の頭のなかに会社の人々の顔が浮かんできた。彼らが自分のことをどんな目で見るのかそれが想像出来た。そして、それが決して暖かいものでないことを克行は知っていた。

「おはようございます」

オフィスに入って行った克行を待っていたのは、想像した通りに同僚たちの戸惑い表情だった。

(そうびくついた顔をするな、何もこんなところで拳銃をぶっぱなしたりするもんか)

驚いた顔で見つめる同僚たちを無視して克行は自分の席へ歩いて行った。

「風間！」

西崎が真剣な眼差しで克行に声をかけた。その声は緊張のせいはいくぶん震えているように思えた。

「おはよう」

「おまえ、どういふことなんだ？」

「どういふことって？」

出来るかぎり心のなかを隠し、平然を装った。それが周りの人々にどんなふうに見られるかは予想出来た。

「わかつているんだろう！ 昨日、おまえがやったことだ！」

「ああ、あのことが……」

わざと惚けたように答える。

「なぜなんだ？　なぜあんなことを——」

「べつにおまえに非難されることじゃないだろう」

「なんだって？」

「おまえだって特権者優遇計画のことくらい知っているはずだろ。

俺は特権者になった。そういうことだ」

西崎は茫然と克行を見つめた。その瞳に失意の色があった。やがて、がくりと膝を落とすと椅子に倒れ込むように座り、それからぼつりとつぶやいた。

「部長が呼んでる……おまえが来たら会議室に来るように言われた」

「そうか」

克行はすぐに席を立った。西崎の辛そうな表情を見ていたくなかった。西崎の様子に克行は友人の信頼を失ったことを感じ取っていた。

会議室の前、ずっと深呼吸してからドアをノックするとすぐに返事がかえってきた。

「どうぞ」

課長の田辺のものだ。声はすでに怒りに満ちていた。

克行はすっと深呼吸してからドアを開いた。だが、そのなかの様子は克行の想像したものとは少し違っていた。多くの上司たちが待ち受けているものと考えていたのだが、実際にそこにいるのは部長の桜川と田辺の二人だけだった。田辺はかなり険しい表情で克行を睨んでいるが、桜川のほうはそれほどではないように見受けられた。

「座りなさい」

克行はテーブルのそばにいき、席を三つばかりあけて椅子についた。

「いったいどういうことかね」

田辺は怒りを押さえるように努めているような声で尋ねた。

「……はあ」

「はあ、じゃないだろう。昨日、I M Mから連絡があった。君はなぜあんなことをやったんだね！」

まだ課長としては若い田辺は感情をうまくコントロール出来ないらしく、その声から克行に対する腹立たしさがひしひしと伝わってくる。

「なぜと言われても……」

「理由がなく二人を殺したというのか？ I M MもK I N I Cもお客様だということがわかっているのか？」

この男は理由もなく俺が人を殺したと思っているのだろうか。常日頃から人を見下したような態度をとる田辺の言葉に克行はしだいに腹をたてはじめていた。

「そんなことは関係ないと思います」

「関係ないだど？」

「今は特権者優遇計画の実施期間です。特権者優遇計画は国家行事です。私のやったことは犯罪じゃありません」

その克行の言葉に田辺は一瞬ぎくりと言葉を切った。その田辺の様子に克行は田辺もまた、自分のことを恐れているということを知った。もちろん、それは当然のことといえる。殺人の権利を与えられたものが自分の目の前にいるのだ。相手の気分次第では自分もまたターゲットになる可能性すらあるのだ。

田辺は再び感情を押さえるように声のトーンを落とした。

「……た、確かに君が特権者だということは警察からも連絡がはいって知っている。君がやったことは犯罪なんかじゃない。だ、だが、彼ら二人を……殺す……ということがこれから我が社にとってどういう意味があるのかは君にもわかるだろう」

答える気にはなれなかった。そんな一般的な考えで乗り越えることが出来るなら、克行もそうしただろう。だが、それが出来なかったからこそ殺人という最後の手段をとることになったのだ。それが田辺にはわかっていない。また、麻美のことを説明する気にもなら

なかった。田辺を納得させるためにはもっと別な方法を取らなければならぬだろう。例えば拳銃を突きつけるとか。いや、それともそのまま撃ち殺してしまうか？ おそらくこの男ならば何のためらいもなく殺すことが出来るだろう。

「風間君！」

「待ちなさい。彼にも彼なりの理由があったのだろう」

さっきまで黙って聞いていた桜川が怒鳴ろうとする田辺を制してやっと口を開いた。

「は、はあ……」

「風間君と少し話をしたい。悪いが少しの間席を外してくれないかね」

「は？ しかし――」

ちらりと田辺が犯罪者を見るような目で克行を盗み見た。克行と二人では危険だと言いたいのだろう。克行もそれに気づき、わざと視線をそらすことなく田辺を睨み返した。

「構わない。さあ」

桜川も田辺の言いたいことに気づいたようだったが、それでも気にならないようで田辺を追い払った。

「やはり、特権者に選ばれたのか……」

田辺がいなくなると自分の考えを記すように桜川はぼつりとつぶやいた。

「やはり？ どういうことですか？」

「先週の月曜だったかな、あの時なんだろう？ 特権者の指定を受けたのは」

「なぜ部長はそんなことを知っているんですか？」

「この歳になるといろいろなところからいろいろな情報が入ってくる。なかにはただの噂だったりするものも多いからそれほど役にたつものばかりじゃないがね。ただ、特権者の指定が近々特権者に発表されたという話はニュースでも聞いていたし、少し考えればわかることだよ。それに今年は私の名前が特命者のリストに入ってい

るという噂も友人から聞かされていたんで気になってたんだよ」

「……」

「噂を聞いたとき初めはそれこそ動転してしまっただけ。よく考えてみたらもう八十に手が届くんだ。君たち若い人から見れば十分に生きたと言える年齢だ」

「なぜそれほどまで怖がるんですか？ その噂がどこから出たのかわかりませんが、特命者に指定される覚えでもあるんですか？」

「反逆罪」、特命者リストの桜川の欄にはそう書かれていた。

「覚えか……、確かにないこともない。なぜ私がこの歳になってまだ働いていると思う？ 十年前ならもうとっくに退職している身だ。それなのに今だに働いてる。好きで働いてるわけじゃない。働かなきゃならないから働いているんだ。もう体も十分には動かなくなってもきている。それなのに政府はまだ年金の支給年齢をあげようとする。それに納得出来なくてね、いつも休みになると抗議グループに参加してデモをやったりしているんだ。国から嫌われても仕方無い」

「そうですか」

「それにしても特権者優遇計画か。まったく嫌なことを始めたものだ。仕事上これまでもまったく関係なかったわけではないが、自分の部下がお客さんを殺すとはな……。彼らも特命者だったのかね？」

何と答えていいかわからなかった。ただ、今まで知らなかった桜川の人柄や特権者優遇計画の背景がさらに見えたようん気がしていた。そして、その背景を桜川にさらしているものかどうか、それすら判断することも出来なかった。

桜川はさらに続けた。

「まあ、彼らが特命者であろうとなかろうとそれはもうしょうがない。君、これからどうするつもりだね？」

「これからですか？」

「そうだ。特権者優遇計画が終わるまであと四日ある。それまで君は特権者として人を殺す権利を持っているんだ。正直言って社の人

間は皆多少君に対して恐怖感を抱いている。田辺君も、そして、正直に言えばこの私もだ」

「どうしろと？」

「今週は休みを取ったらどうかね。坂本さんや波川さんがああいうことになってしまつては、しばらくは仕事にならんだろう。正直いえば君が会社にいることのほうがトラブルになる」

「はい……けれど会社のほうは……」

「今さら社内のことについて言ってみても仕方無いだろう。君がやったことは犯罪じゃない。会社としても別段君を裁くつもりはない」
桜川の言葉が優しさなのか、それとも克行に対する恐怖から出たものなのかそれは克行にもわからなかった。ただ、もし優しさだとしたら――

克行の心のなかに迷いが生まれた。桜川の名前が特命者リストのなかにあることを、そして立花という警察官が桜川を狙っていることを言うべきかどうか克行は混乱した。

「あの――」

言葉が溢れそうになり、克行は慌ててそれを押さえた。

「なんだね？」

「いいえ、何でもありません」

（今はもう何も考えるのはよそう。麻美のことだけ考えればいい）
克行は桜川に伝えないことに決めた。桜川は自らの立場を既にわかっている。今さら警告したところで意味はない。

「それじゃ、今日はもう帰っていいよ」

桜川は相変わらず穏やかだった。

そして、それは克行が桜川を見る最後となった。

死のクリスマスイブ・20

二十

築二十年といったところだろうか。

二階建てのアパートの手摺りは真っ赤に錆び、あちらこちらに蜘蛛の巣が見受けられる。隣には真新しい白いおしゃれなマンションが建ち、なおさらみすばらしく見える。

（ここだな）

克行はそのアパートの一室の前を用心深く伺った。

表札は出ていないが、通路に郵便受けからこぼれ落ちたハガキによってその部屋の住人の名前が読み取れた。

<磯井正隆>

その名前を見ながら克行は自分の勘が正しかったことを改めて感じた。

昨夜、マンションの管理人杉本の死を発見したあと、克行はすぐに警察に連絡をいれた。それが特権者による殺人であることは克行にも当然わかっていた。だが、克行はそれでもあえて一般の殺人を目撃したかのように警察に連絡をいれた。杉本を殺した若者の姿がやけに頭にちらついて離れなかったからだ。あの若者が自分にとって大きな意味を持っているようなそんな気がした。

連絡するとすぐに警察は現れ、克行も事情聴取を受けた。だが、その場で弾丸が発見され、すぐに現場検証は打ち切りとなった。弾丸には特権者優遇計画のコードが彫られており、その弾丸で殺された場合それは殺人ではなくなるからだ。克行もまたそういった展開を予想していた。予想というよりもそうなることを期待していたのだ。克行が知っていたかったのはその弾丸のコードだった。弾丸のコードは一発づつ違っており、そのコードによって誰が使用したものかわかるようになっていた。そして、克行が涼子からもらった特権者

のマスターリストにはその特権者の使用する弾丸のコードもまた記されていた。

克行は警察官から何くわぬ顔で弾丸のコードを聞き出した。

TR13-TX-6254とTR13-TX-6255。

それが弾丸に彫られていたコードだった。それは麻美の名前の入ったリストを持つ磯井正隆のものであった。

そして今、克行は会社の帰りに磯井の住むアパートを訪れている。特権者優遇計画が終わるまで会社へ行く必要はなくなった。つまりそれだけ麻美を守るために動けるということだ。

克行はそつと中の様子を伺うようにドアを左手でノックした。右手はポケットのなかの拳銃を握っている。

返事がない。

（いないのだろうか……）

まだ十一時を回ったばかりで、真面目な学生ならば大学へ行っているはずだ。

克行はもう一度ノックしてみた。

やはり返事はなかった。

克行は軽くドアノブを回してみた。鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。鍵がかかっていたとしても簡単に開くのではないかと思うほど傷んだドアだった。

たった四畳半の部屋に物が散乱しているのが目についた。布団は敷いたままになっており、雑誌や服が辺りを足の踏み場もないほどに埋めていた。

そこに磯井はもちろん誰の姿も見えなかった。

（大学へ行っただろうか？）

克行はそう考えながら一步部屋のなかへ足を踏み入れた。

確かに磯井は学生なのだから大学へ行ったと考えるのが一番正しいように思える。しかし、昨夜見た磯井の姿、そして杉本の死がその考えを否定しているように思えた。杉本の部屋はあまりにも荒らされすぎていた。一人暮らしだったため詳しくはわからないが、お

そらく相当の金品が磯井の手によって奪われたことだろう。

磯井は特権者優遇計画で得た権利を金を盗むために利用しているはずだ。今日もまたそのために出かけているのかもしれない。そして、それが麻美のところでないとは限らない。克行はそうでないことを祈った。

克行は後ろ手にドアを閉めると土足のまま部屋のなかへ入りこんで行った。部屋で磯井の帰りを待つつもりだった。

（帰ってきたところを……）

磯井をこのまま放っておくわけにはいかない。昨日の二人に続き磯井にも消えてもらうつもりだった。

部屋の中心に立ち、どこから狙うかそれを考えようとぐるりと部屋を見渡した。だが、その時、克行はぎくりと身を固くした。

カチリという小さな音が克行の背後から聞こえた。それはまぎれもない拳銃の撃鉄を起こす音だった。

（しまった！）

克行は自分の軽率な行動を呪った。

「あんた、誰さ？　こんなボロアパートに泥棒かい？」

すつと押し入れの戸が開く音が聞こえ、若者の声が聞こえた。それこそ克行の狙いである磯井の声だった。

「……」

「誰だよ……答えろよ」

多少、声が震えている気がする。その声から磯井がすぐには克行を殺すつもりのないことを感じとった。

克行は相手を刺激しないように少しづつ体を回し、顔を後ろへ向けた。両手でしっかりと拳銃を握った青ざめた若者の姿が押し入れのなかから覗いている。拳銃に弾丸が装着されているのか、また、装着されているのが何発なのか、それは拳銃の性質上外から見ただけではわからない。だが、昨夜二発は使用しているため最高でも四発のはずだ。

「答えろ！」

磯井は拳銃を克行の顔面に向けるようにして、答えを強制した。

「……磯井……君だね」

「ああ……おまえは？」

「風間克行」

「風間？」

「君とは以前会ったことがある」

「知らねえな、あんまりいい加減な言うなよ」

ゆっくりと身を押し入れのなかから少し出して磯井は怪訝そうな顔をした。

「嘘じゃない。先週の月曜……市役所で会ってる」

言葉を選びながら克行はゆっくりと答えた。ともかく相手の自分に対する殺意を消し去らなければいけない。

「先週の月曜？ それじゃ特権者優遇計画の説明会で？」

「そうだ」

「で、あんた、何なんだ？」

「君と同じ人間だ。俺も特権者なんだ」

その言葉に磯井の目が疑わしそうに克行を観察している。

「あんたが特権者？」

その言葉のなかには自分と同じ種類の人間に対する安心感と、その言葉が嘘であった時の不安感の二つが入り交じっていた。その様子は克行にとって想像した通りのものだった。昨日の波川もそうだったが、相手が自分と同じ特権者だと知ることでかなりの安心感を得るらしい。特権者が特権者を殺すという図式が彼ら特権者のなかにはないのだ。

「本当だ。特権者ナンバー10042、風間克行。思い出してくれ、君は窓側の席に座っていたはずだ」

「ふうん、どうやら嘘じゃないらしいな。だが、いったい何の用だ？ 同じ特権者だからって他人の家に勝手にあがりこんでいいはずはないだろう」

磯井はある程度克行に対して警戒を解いたようだった。だが、相

変わらず拳銃は克行に向けられている。

「……」

克行は答えに詰まった。何と言えど磯井が自分に対してまるっきし警戒を解くかそれを考えていた。

「何の用だって聞いてるんだ！」

再び磯井は脅すように拳銃を突き出して見せた。

「よせよ、危ないじゃないか。同じ特権者なんだ」

「うるせえ。そんなの関係ねえよ。勝手に人の家にこのこ土足であがりこんで来やがって。どうもあんたは信用できねえ。言えよ、何の用だ？」

「……君の特命者リストを見せてもらいたいんだ」

「何だって？」

「君の特命者リストを見せて欲しい。誰の名前があるかそれを知りたい」

苦し紛れに出た言葉だった。けれど磯井は克行が想像以上に興味を示した。

「特命者リストを見せろ？ 俺のか？」

「ああ」

「何するんだ？」

「噂を聞いたんだ。友人の名前が特命者リストに入っているって……」

「それで？」

「出来たら友人を助けない」

「助ける？ どうやってだ？」

「もし、君のリストに入っていたら――」

「入っていたら？」

「君が友人を狙わなければそれだけ友人の危険が減ることになる」

「で、俺がそいつを狙わないことで、俺にはどんな得があるんだ？」
すでに磯井の興味は取り引きに向いている。そして、当然、磯井の欲しいものは金だろう。

「少しばかり礼はする」

「いくら？」

「いくら欲しいんだ？」

克行の言葉に磯井は思わずにやにやと笑い始めた。その拳銃を持つ手がだらりと下がった。

「そうだな、ま、そんなに高くは言うつもりはないが……百万かな？」

「無茶言わないでくれ。君を含めて友人を狙うことが出来る特権者は五人いるんだ。五人全員に百万づつ払ってたら五百万にもなるだろう。出来たらもう少し値を下げてくれないか？」

磯井の拳銃が狙いを外した今、いつ克行が磯井を狙っても構わなかった。しかし、あえて克行はもう少し待つことにした。もう少し、完全に磯井が克行に警戒を解き、油断しきって拳銃を放すまで。

「ん——」

磯井は難しげな顔をして見せた。その顔は本気で悩んでいるようだった。けれど、その顔には自分が得た立場の利益への喜びも混じっていた。

「なあ」

「だめだ！　いくらかかろうと俺はそいつの命を握っているんだ。少しくらい高くついても生きていたければ払える金額だろう。それにあんただって特権者なんだ。その友達のために金を作るくらい出来るじゃないか」

「……確かにそうだが」

「百万だ、それ以下なら俺は誰だろうと狙うぜ」

「……わかった。だが、まずは君のリストにそいつの名前があるかどうかだ」

克行は諦めたふりをしてみせた。払うつもりなどあるはずがない。「そうだな。それにしてもあんたどうやってここを見つけたんだ？　まさかあのあとすぐに俺のあとをつけたわけじゃないだろ」

磯井は克行の言葉にすっかり安心し、押し入れから出ると拳銃を

散らばった床に無造作に置き、再び押し入れのなかに頭を突っ込んで特命者リストを捜し始めた。

「この前偶然その通りで君を見たんだ」

克行はその磯井の姿を見ながら用心深く回り込むと磯井の置いた彼の拳銃を取り上げた。そして、磯井が振り向くのを待った。

やがて、磯井は特命者リストを取り出して振り向いた。

「あつたぜ。で、あんたの友人の名前は何て言うんだ？」

一瞬のうちに磯井の顔が曇った。

今、磯井の顔面には克行の握る拳銃が構えられている。

「おい、何のつもりだよ！　じよ、冗談よせよ！」

「冗談？　俺は本気だ」

「待てよ。そ、そんなのってありかよ」

「おまえがいなくなればおまえは誰を殺すことも出来ない。おまえに金を払う必要もなくなる。違うか？」

「わ、わかった。金はいい。金なんかいらぬ。あんたの友達を殺さないよ」

「信用出来ないな。おまえは金のためなら誰だろうと殺すつもりなんだろう。特命者を殺し、金を奪う。今夜もまたそうするつもりだったんだろう。おまえなど死んだほうが世の中のためだ」

「何言ってるんだ？」

「昨夜、一人の年寄りを殺したろうと言っているんだ」

「昨夜？　おまえ、何なんだ？　なんでそんなことまで知ってるんだ？」

「憶えてないらしいな。おまえはずいぶんと慌てていたからな」

克行は拳銃を磯井の顔面につきつけた。話をしながらも磯井の顔は血の気を失い、青く変わっていく。やけに情けないその姿が克行には心地好かった。

「……あんた見てたのか？」

「おまえがマンションから飛び出して行くのを見かけたんだ。運が良かったよ」

「じゃあ、あんたは昨日の爺さんの親戚なのか？　爺さんの復讐に来たのか？　さっきの話も嘘なんだな！」

「友達の話か……あれは本当の話だ。おまえを昨夜見かけたとき、なぜだか気になってな。わざわざ警察を呼んでおまえがどの誰なのか調べたんだ。嬉しかったよ、おまえが俺の捜している奴だとかった時は」

自分の心のなかで残虐な殺意が目覚めようとしていることに克行は気づいていた。だが、気づいていながらも押さえることが出来なかった。克行はなおも相手の命をもてあそぶように、拳銃を磯井の目の前にちらつかせてみせた。

「よせ……頼むから止めてくれ」

目が赤く涙が潤んでいる。足ががくがくと震えているのがはつきりとわかる。

「何人殺した？」

「え？」

「この拳銃で何人殺した？」

磯井は黙って首を振った。すでに死の恐怖に理性を失いかけている。そして、理性を失いかけているのは克行も同じだった。他人の命を握る。その狂喜に理性が消えかかっていた。

「何人殺した？」

なおも克行は強く問いかけた。

「……殺してない。昨夜の爺さんだけしか俺はまだ……頼む……やめてくれよ……なあ、いくらだって払うよ。頼む……」

消え入るような弱々しい声。その声で克行の理性が再び蘇った。死に脅えるそのあまりの人間の弱さに克行はそこまで彼を追いかんだ自分自身が怖くなった。

一瞬、自分のやっていることが間違いではないかという考えが頭をよぎった。その瞬間、磯井もその克行の心を読み取ったのか突如、隙について飛びかかってきた。

「ちきしょう！」

拳銃を握る右手を磯井が両手で掴み、拳銃を奪い返そうと力任せにねじあげようとする。克行もまた懸命にその磯井の体を突き放そうと力を込めた。

ぐあーーん

どこか、くもったような爆音が克行と磯井の争う間から響いた。磯井の体が重心を失い、弾かれるように仰むけに倒れた。

(火薬の匂い……)

克行の握る拳銃から一筋の煙がうつすらとのぼっていく。

「……ひ……ひい……」

磯井の白いシャツの腹の部分が紅く染まっていく。全身が麻痺したように磯井は体をひくつかせた。まだ痛みは感じてはいないようだが、体はすでに自由を失いかけ起き上がることも出来ずにいる。

「……お……おい……体が動かねえよ……俺、死ぬのか？」

克行は黙ってじっと見つめた。何も言うことが出来なかった。

「な……なあ、助けてくれよ。お願いだ、びよ、病院連れて……連れてってくれよお……そうだ、救急車……救急車呼んでくれよ……なあ」

哀願する磯井を見つめながら、それを振り切るような思いで克行は拳銃をまっすぐに磯井へ向けた。

「や……やめてくれよお……」

微かに左手を克行へ伸ばし、それを盾にでもするかのように磯井は後ろへとさがり逃げ始めた。

克行はそんな磯井へ狙いを定め、今度はしっかりと自分の意志で引き金を引いた。

弾丸は克行に伸ばされた手のひらをつらぬき、心臓を撃ちぬいた。手のひらから赤い筋が走り、次の瞬間磯井の頭はがくりと落ちた。目だけがやたら悲しげにじっと克行を見つめているように感じられた。

なぜだか途端に怖くなってきた。

どんなホラー映画よりもその部屋のなかは恐怖に満ちているように感じられた。

「違う！ 俺が……俺がおまえを殺したわけじゃない！ こ、こんな……こんなことになったのは俺のせいじゃないんだ！」

それが何に対する恐怖なのか、それは克行にもはつきりとつかみとることは出来なかった。いや、感じ取りたいと思わなかった。それを感じ取ってしまったとき、自分の心がどこか途方もない方向へ向かって進んでいきそうな気がしていた。

「俺は……俺は……」

克行はそのままその場にしゃがみこんだ。頭が痛かった。

多くの人々が克行をなじる声が聞こえていた。

――人殺し！

――おまえこそ人殺しだ！

――いったい何人殺したんだ？ そんなに人を殺すことが楽しいのか？

――わしを殺したのはあんただ！ 誰でもない。あんたが殺したんだ！

――おまえの正義感なんてそんなのは嘘っぱちさ。おまえは楽しんでるんだ！ それを認めたくないだけだ！

坂本が、波川が、磯井が、そして杉本老人までもが叫んでいる。

（そうだ、俺が殺した。俺の心のなかのもう一人の俺が楽しんでいる心のどこかでそんなふうに思いはじめていることに克行は恐怖していた。それを認め、受け入れてしまうことが怖かった。

「違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違うんだ！」

克行は叫び続けた。

パトカーのサイレンの音が微かに聞こえていた。

死のクリスマスイブ・21

二十一

アパートへ帰ると克行はすぐにポケットから「殺人リスト」を取り出した。そして、そのリストの「磯井正隆」の部分を黒いマジックで塗り潰した。何度も何度も完全に読み取れなくなるほどに塗り潰した。坂本、波川の名前も昨日のうちに同じように塗り潰されている。

しかし、どれほど塗り潰してみても克行にはそのマジックのあとを透して消されたはずの名前を読み取ることが出来た。すでに彼ら三人の名前は克行の心のなかにしっかりと刻まれてしまっている。

警察の取り調べは驚くほどあっという間に、昨夜の杉本のもの以上早く終わった。克行が特権者とわかった時の警察官たちの顔が思い出された。横柄な態度で克行に一度手錠をかけた警察官は真っ青になりわずかに震え、そして克行の顔をうかがいながら手錠を外した。銃声を聞き近所の主婦が警察に連絡したらしいが、その主婦も克行が特権者であったことを知り（彼女は「特権者優遇計画」についてよく知らず、警察官に説明されてやっと理解した）犯罪として警察に訴えたことを何度もひたすら謝り続けた。克行は初めて特権者という権利がいかに強いものかということを知った。しかし、その逆に彼らの脅えた瞳の奥に克行をさげすむ光があったことも感じていた。

リストをテーブルの上に投げ出すと、克行は次に拳銃を取り出した。磯井の持っていた拳銃はその場においてきたが装填され残っていた弾丸だけは気づかれぬように抜き取り持ってきた。磯井を殺すことも含めすでに五発は使ってしまったため残っていたのは一発だけだったが、それでも克行にとっては貴重な一発だった。

克行はその貴重な弾丸を自分の拳銃に装填した。

（あと二人……）

極度のストレスのためか微かに頭痛がしていた。

麻美の名前の載るリストを持つ特権者があと二人いる。

高校の教員である富士川、そして警察官であるあの立花。この二人を狙うのは今までの三人以上に難しいように思えた。

あの殺人を何よりの楽しみとし、市役所もまたもっとも高いランクであると認めている立花を殺すことが出来るだろうか。また、富士川にしてもランク・Bであり、どんな人間なのかもまったくわからない。

そんな二人を相手にすることになる。

克行は今日感じた自分自身のなかの狂気さも含め、これから不安を感じた。もしも無事に終わったとしても、これまでとは生き方も考え方もまるで変わってしまったっているかもしれない。立花のようになっていることだって考えられる。

けれど、やらなければならぬ。

そうだ、麻美のためにはどんなことでもやらなければいけないんだ。自分の頭がおかしくなろうと、殺人が楽しいと感じるようなおかしい人間になろうと麻美を守らなきゃいけない。進むべき道がそれしかないことを克行は知っていた。

（くそ！　これが運命なら受け入れてやろうじゃないか！）

克行はおもむろに電話帳を手にとると調べ始めた。

「川越高校」

克行の住む街から電車で一時間近くかかる距離にある私立高校である。そして、富士川の住む境八日町もそのすぐ近くにある。

克行は富士川を次の標的に決めた。

電話番号を調べると克行は電話へ手をのばした。

RRR・RRR……

呼び出し音が鳴っている。六時前、まだ教師たちは残っているは

ずだ。だが、なかなか出ようとしな。ズキズキと頭が痛み出していた。

何やってるんだ！

克行はいらつきを押さえるように指でテーブルをこつこつと叩いた。

――はい、川越高校です。

コール十回目でやっと女性の声が電話に出た。

「すいませんが富士川先生いらっしゃいますでしょうか？」

――富士川先生ですか？ えーとですね。

辺りを見渡しているのか、考えこんでいるのか一瞬間があいた。

――少々お待ちください。

愛想のない声で受話器がガタリと机のうえに置かれるような音がした。頭痛はしだいに酷くなっている。克行は受話器を握りしめながら頭痛薬があったかどうかを思い出そうとした。

やがて、どこからかパタパタと走るような音が聞こえてきた。

――もしもし、電話変わりました。富士川です。

まだ、若そうな声だ。

――もしもし？

「あ……富士川先生ですか？」

――はい。

「私、矢代受験センターの者ですが――」

つい知っている受験センターの名前が口に出た。

――はあ、なんでしょう。

「大学入試を控え、そちらの学校の受験調査で電話したんですが……」

……

――受験調査ですか？

「もしよろしければ明日お伺いしてお話を聞かせていただけないでしょうか？」

――明日？ ずいぶん急ですね。

「明日はいらっしゃらないんですか？」

——いや、そういうわけじゃないんですが。ちょっと……昼間お客さんが来ることになってるんですよ。私でなく田口先生ではいけませんか？ 彼も三年の担任ですし。

「構いませんよ。田口先生は今、いらっしゃるんですか？」

——いえ、今日はもう帰られたんですよ。けど、大丈夫ですよ。私のほうから連絡しておきますから。

「そうですか、それではよろしくお願いします」

克行は静かに受話器を置いた。

自分でも比較的うまく嘘をつけたと感心していた。克行は富士川を校内で片付けることに決めた。

これで明日富士川が校内にいることは間違いない。ただ、客が来るというその言葉が妙にひっかかった。高校の教師という立場上いろいろな客が訪ねるのはべつにおかしなことでない。しかし、なぜだか克行にはそれが今回の特権者優遇計画と関わりがあるように思えてしかたなかった。

（ノイローゼぎみだな……何でも計画に結びつけて考えてしまう癖がついてる）

しかし、それもあと二人。二人を殺すことで自分の役目は終わる。そう考えることで何とか今の状況から逃れたかった。

克行は立ち上がると頭痛薬を捜すために動き出した。我慢出来ないほど頭痛は酷くなっていた。だが、あいにく頭痛薬は一錠すら見つけることは出来なかった。考えてみれば頭痛薬などもう一年以上使ったことがなかった。あの拳銃乱射事件を目の当りにした時に使ったきりだ。あの時、全て使い切ってしまったのだろう。克行はさらに捜した結果、やっと睡眠薬を捜し出した。

克行は二錠取り出すとからからに乾いた口に押しこむとキッチンで冷蔵庫からビールを取り出して一罐を一気に飲み干した。からっぱの胃袋にビールが流れこむ。おそらくすぐに酔いがまわってくるだろう。

克行はスーツを脱ぎパジャマへと着替え始めた。今夜はもうこれ

で眠ってしまうつもりだった。市役所からの電話など聞きたくもなかった。

（麻美は？）

大丈夫さ。きっと大丈夫だ。

——彼女は大丈夫。

涼子の言葉が思い出された。涼子がなぜそんなことを口にしたのかそれはわからなかった。けれど、こうやって毎日を過ごしているうちに克行もそんなふうになるようになっていた。

そうだ、彼女は大丈夫だ。

克行はベッドへ潜り込み目を閉じた。早くも睡魔が訪れていた。深い眠りはおそらく悪夢も取り去ってくれることだろう。

死のクリスマスイブ・22

二十二

十二月 二十二日 (金)

<私立 川越高校>

校門に彫られたその文字を見つめながら克行は一つ大きく深呼吸をした。

坂本や波川を殺った時、磯井を葬った時、そのどれよりも危険なことをやろうとしている。

相手は見知らぬ人間で、しかもその相手の領域で戦おうとしているのだ。コートของポケットにある拳銃を右手で探る。市役所から渡された時には嫌悪感を覚えたこの拳銃も今はやけに頼もしく思える。富士川という男がいったいどのような男なのか、克行は頭のなかで想像していた。立花のような殺しを趣味としているような男なのだろうか、それとも磯井のように偶然に権利を手に入れただけの男なのだろうか。

克行は敵地へ赴く兵隊のような心境で学校の門を入って行った。ちように試験休みの時期なのかあまり学生の姿は見ることは出来なかった。グラウンドや体育館にクラブ活動で来ている学生の姿がわずかに見えるだけだった。人が少ないことは克行にとって好都合だった。

教員室が二階にあることは玄関口の案内図によってわかった。

(「やることはわかってるな」)

克行は自分自身に言い聞かせた。

歩きながら克行はあたりをうかがった。

高校には卒業して以来行ったことがない。一度も訪れたことのない学校とはいえ、それでもなぜだか懐かしい感じがあった。

階段をあがるとすぐに教員室のドアが見え、克行は心臓が高鳴るのを感じた。今更ながらにここを戦いの場を選んだことが失敗だったように思えた。

なぜ、俺はここを戦場を選んだのだろう。富士川の家を襲うほうがよほど安全だったのじゃないだろうか。だが、今更そんなことを思っても遅すぎる。

（慎重に……そうだ、慎重にことは運ばなければだめだ）

すでに三人殺しているとはいえ、それでもやはりかなりの緊張があった。おそらく何人殺したところでこの緊張感が失われることはないだろう。そうあの立花にしても。

（だからこそ、あいつは殺しを……いや、この緊張感を楽しんでいるんだ）

それなら俺はどうだ？

わざわざ危険を犯してここまでやってきたのはどういうわけだ？
思わず克行は目を閉じ、頭を振った。今、立花のことは考えないほうがいい。

克行は心を決めてドアを横へ開いた。

「失礼します」

試験休みだということを表すように教員室はやけにのんびりとした雰囲気包まれていた。おそらくすでに試験の採点は済み、終業式を待っただけなのだろう。

「すみませんが……富士川先生はいらっしゃいますでしょうか？」

誰にともなく声をかけると本を読んでいた白いワイシャツを着て真っ赤なネクタイをしめた太った教師の一人が立ち上がって歩み寄ってきた。

「昨日電話をした人ですね」

「はい、受験センターのもので……田宮と申します」

克行は以前仕事の付き合いでもらった一枚の名刺を相手に渡した。「ふうん、受験調査ってことだったけど今の時期じゃ遅いんじゃないの？　もうみんな進路なんか決まっちゃってるよ」

やけに口をくちやくちやとさせながら教師は言った。どうやらこの男が昨日富士川の言っていた田口という教師らしい。

「ですからこちらの知りたいのはどちらの大学へどれだけの人数が受験を予定しているかということでした……」

克行はなるべく相手に嘘を悟られないように漠然とした言い方を心がけた。

「ふうん、そりゃまあ教えるのはこちらとしても構いませんけどねえ……」

「ありがとうございます。あの……ところで富士川先生は？」

克行はなるべく話題が集中するのを避けるためにも早めに富士川のほうへ話を移そうとした。

「富士川先生？ なんでもさっきからお客さんが来てるらしくて……」

何か食べている最中ではないかと思えるほど口をくちやくちやさせながら田口はぶつぶつと言った。そしてそばを通りかかった女性教師へ声をかけた。

「ねえ、富士川先生はどこだっけ？」

「富士川先生ですか？」

「うん、さっきお客さんが来たとかでどっかに行ったら」

女性教師はその言葉にすっと目を細めるようにして考えこんだあと、すぐに思い出して言った。

「あの黒づくめの人ね」

その言葉はすぐに克行の脳裏に立花を連想させた。

「黒づくめ？」

思わず克行は聞き返した。

「ええ」

「何て名前でした？」

「そうね……そうだわ、立花って言ったかしら」

克行の背筋に冷たいものが走った。

（あの立花が来ている）

克行は昨日感じた不安が真実となったことを知った。

「あなた、知ってるんですか？」

克行の様子を見て田口は不思議そうな顔で尋ねた。

「え？ ええ……」

「それじゃ、その人もあなたと同じような受験センターの？」

「ええ……まあ、そうです。今、二人はどこに？」

「進路相談室にいますよ」

女性教師はそう言ってすっと自分の席へと戻って行った。

「どうします？ 会われますか？」

頭をぼりぼりとかきながら田口は相変わらず口をくちやくちやとさせている。思わず克行はこの男の顔面に拳銃を突きつけてやりたくなる衝動を抑えた。

（どうする？）

内心の声が叫んだ。

（立花もここで葬ってしまうか？）

もちろんそれが考える以上に難しいということは克行にもわかっていて。特権者二人を相手にする。しかも、二人ともランクCの素人などではない。そして、一人は殺人狂の立花だ。

（しかし、もしもここで殺ることが出来れば……）

そうなれば今日を含め残り三日間、苦しむことはない。それに立花も同じ特権者ということで克行に油断するかもしれない。

「――田宮さん」

一瞬、田口が誰に声をかけているのかわからなかった。

「あ……はい」

「お会いしますか？ もしよろしければ案内しますよ」

「……そうですね。お願いします」

賭に出ることに克行は決めた。

田口は克行を連れ、教員室を出ると三階へとあがって行った。さつきまで懐かしさを覚えていた校舎も今では新たなる緊張のため、その静けさがやけに不気味に感じた。田口はさして克行にも受験セ

ンターにも興味を示そうとはせず、ただ黙って克行を案内して歩いて行った。田口にしてみれば受験の動向よりも仕事が一つ増えたことのほうが気に入らないらしい。

やがて、田口は一つのドアの前で立ち止まった。ドアに＜進路相談室＞とあった。

「ここですよ」

田口は克行に説明しながら軽くドアをノックした。しかし、返事はなかった。

克行はその瞬間、自分の予想もしないことが起こっているような気がした。ドアの向こうから血の気配が漂ってくる。

「あれ？ 変だな……。ここじゃないのかな？」

田口は返事がないことに頭を傾げながらドアを開け放した。そして、部屋のなかを見た田口の顔からすっと血の気がひいていく。

「ひいひいひい！」

叫び声をあげながら田口はその場にしゃがみこんだ。

克行も一瞬それが何なのかわからなかった。一つの物体が窓枠に十字を描くように張りつけられている。

（富士川だ！）

克行はすぐにそう感じとった。

富士川はすでに死んでいるらしく、その虚ろに開いた目からは生命を感じ取れない。両手をロープによって割れた窓枠にがちりと縛りつけられている。喉を鋭利な刃物で切られたらしく、ざっくりと裂けた喉元からどくどくと不気味にどす黒い血が体をつたわり床にしたり落ちている。

立花の姿は部屋のなかには見えない。

「あれは富士川先生ですね？」

確認のために克行は腰をぬかしてしゃがみこんでいる田口に尋ねた。

「は……は、はい、富士川先生です……。い……。いったい何で……」
声は震え、まだ何が起こったのか正確には把握出来ないよう

に見えた。

克行はなかに入ると富士川に近づき、その姿をじっと見つめた。ここ二、三日の間に死体に慣れてしまったのか、それとも目の前のものがまったく赤の他人のためか死体に対する恐怖など微塵も感じられなかった。

それよりも立花のことが気になっていた。

克行は田口のいるところまで戻ると、腰を抜かして動けずにいる田口に声をかけた。

「立花が来たのはいつですか？」

「……立花？」

「黒づくめの男が富士川先生を訪ねて来たと言ったでしょう」

「黒づくめ？ 奴が？ 奴が富士川先生を殺したのか？ 何で？」

彼も君と同じ受験センターの人なんだろう」

頭が混乱しているらしく、克行の質問にまともに答えられる状況には見えない。

（くそ！）

克行は田口から聞き出すことに諦め、田口をその場に残したまま教員室へと急いだ。さっきの女性教師に立花のことを聞かなければいけない。

「すみません！」

教員室に入ると克行は女性教師のデスクまで近づいた。

「なんででしょう？」

克行の慌てた様子を不思議そうに眺めながら女性教師は仕事をする手を止めた。

「さっき立花という男が富士川先生を訪ねてきたと言いましたね！」

「え、ええ」

彼女は克行の剣幕に驚いて口ごもった。

「どのくらい前です？」

「そうね……三十分くらい前だと思いますけど……進路相談室にはいらっしやらなかったんですか？」

克行は女性教師の言葉を最後まで聞かないうちに走り出した。まだ立花はこの校舎のなかにいるかもしれない。その思いが克行を駆り立てていた。

不思議なことにその時、克行の頭にあることは立花に対する恐怖などではなかった。自分の獲物を横取りされたような、そんな恐ろしい気持ちが克行の心のなかにあった。そして、それこそが克行を動かしていた。

（あいつを殺すんだ！）

立花を殺す。そのためにもなんとしても今、逃がすわけにはいかなかった。

克行はただ、むやみに校舎のなかを走りまわり立花を捜した。だが、立花の姿はどこにも見つけることは出来なかった。

「おい、あそこだ！」

どこからか声がして克行は振り向いた。

教師たちが数人克行に向かって走ってくる。その様子を見て克行は気づいた。きっとさっきの女性教師が不審に思い進路相談室まで様子を見に行き、腰をぬかしている田口と富士川の死体を見つけたのだ。

教師たちの様子に、その殺人犯、もしくはその秘密を握る人物と克行のことは見ていることがわかった。捕まるわけにはいかない。特権者だということがはつきりすれば、すぐに彼らもおとなしくなるだろう。だが、そんな時間すら今は惜しかった。克行は立花を追うことを諦めて逃げることにした。

ちくしょう！　なんでこの俺がこんなふうに追い回されなきゃいけないんだ？

逃げているうちにしだいに怒りが湧いてきた。克行はポケットから拳銃を取り出し走ってくる教師たちに向かって構えた。それを見て、いっせいに教師たちは方向を変え、逃げ出した。

その様子を見届けてから克行は再び走り出した。おそらく立花はもう学校を後にしていることだろう。

逃げながら克行はやけに悔しい思いをしている自分に気づいていた。

死のクリスマスイブ・23

二十三

富士川との対決は克行にとって意外な形で終わることとなった。

克行はそのまま逃げるように学校を後にしマンションへ戻った。やけに腹立たしく感じていた。正義面した教師たちの顔が思い出された。こんなことならばあの教師たちの群れに弾丸を一発、二発撃ち込んでくるのだったとさえ思ったほどだ。

マンションに帰って来た頃には陽がすでに落ちていた。やけに肌寒く、風が体温全てを取り去っていくようだった。帰ってみると西崎が部屋の前で待っていた。思わず時計を見るとまだ五時をまわったばかりだ。

なぜこいつはここにいる？ 仕事は？

一瞬、そんな疑問が頭を霞めたが、そんなことはどうでもいいことだった。

西崎は克行の顔を見るなり嫌な物でも見るように視線をそらした。それは克行にしても同じ気持ちだった。

「どうかしたのか？」

だが、克行の問いに西崎は黙ったまま何も答えようとはしなかった。それでも克行はそんな西崎を黙って部屋へ入れた。

「いったい何の用だ？」

部屋に通してから克行は訪ねてきた西崎に尋ねた。今、知り合いの顔を見るのはつらかった。どんなに忘れようとしてもあの富士川の血に染まった姿が頭にちらついて離れない。いや、忘れようとしていなかった。ひっきりなしにあの姿を思い出そうとしている。

そして、富士川を殺したであろう立花。

（立花はいったいなぜ富士川を殺したんだろう？）
そのことがずっと気になっている。

だが西崎は克行以上に暗い表情をし、すぐには口を開こうとはしなかった。つい先日まで友人と思っていた克行が特権者として人を殺しているのだから、その様子も当然かもしれない。わかってはいたがそれでもそんな西崎の姿はどこかどかしく腹立たしかった。

ポケットには拳銃がはいっている。

「おい……何か用があったんだろう。用があるならさっさとしてくれ」

克行はわざと冷たく言った。改めて事情を説明して理解してもらおうとは思わなかった。今更話すことなどもなかった。立花による富士川の死、それがまだ克行の頭にこびりついていた。

（なぜ立花は拳銃を使わなかった？）

些細なことかもしれないが、そのことも気になっていた。

「どこへ行っていたんだ？」

ふいに西崎が口を開いた。「いったいどこへ行っていたんだ？」

また誰かを殺してきたのか？」

克行の目を見ないようにしながら西崎は言った。そんな西崎に克行は悔しさよりも怒りを憶えた。

こいつはいったい何を言いたいんだ？ 俺を怒らすためにわざわざやってきたのか？

それとも……

「どういう意味だ？ そんな嫌味を言うために来たのか？」

強い口調で克行は言い返した。言い返しながら再び富士川の姿が脳裏に浮かんできていた。

「桜川部長が死んだ」

克行に視線を向けるのを裂けるかのようにしながら西崎はつぶやいた。その声が富士川の姿を裂いて脳裏に飛びこんできた。

「なんだって？」

「聞こえなかったのか？ 桜川部長が殺されたと言ったんだ」

いくぶん口調を強めもう一度西崎は繰り返した。もちろん聞こえていた。ただ聞き返さずにはいられなかった。

「いつだ？」

「昨日の夜。会社から帰るところを襲われたんだ」

「いったい誰に――」

言いかけて口をつぐんだ。西崎の目が厳しく克行を睨んでいる。

「決まっているだろう。俺はてっきりお前が殺したのかと思ったよ。違うのか？」

本心なのか、嫌味なのか西崎の言葉に克行は胸を痛めた。

「……」

「いったい……なぜおまえ特権者になんかなってるんだ？ おまえがそんな人殺しを楽しむような奴だとは思わなかった」

西崎は吐き捨てるようにつぶやいた。

「楽しんでるわけじゃない！」

思わず克行は叫んだ。わかってもらえとは思っていないかったが、それでも誤解されたままではなかつた。むしろ誤解している西崎に腹が立ったと言ってもいい。撃ち殺してやりたい。誤解通りにひと思いに殺してやりたい。克行はその気持ちを懸命に押さえた。今、怒りにかられて西崎を殺したところで自分自身が苦しむだけだ。

「なら――」

「別に好きで特権者になんかなったわけじゃない。おまえだって少しくらいはこいつについて知ってるんだろう。勝手に国が特権者と特命者選んで殺しを命じているんだ！ 好き好んでこんなことするはずないだろう！」

「俺だってそれくらいは知ってる。ついでに言わせてもらえれば特権者の権利があくまで権利だってこともな。使う必要のない権利なんだろ。それをおまえは使っているんだ。楽しんでいないというならいったい何だと言うんだ！ 俺の名前も特命者のなかに入っているのか？ どうなんだよ！」

やけになったように西崎は叫んだ。

「それが知りたくてやって来たのか？」

「……いや」

怒鳴って気が済んだのか西崎はいくぶん落ち着きを取り戻した。
そしてふっと溜め息をついた。

「西崎……俺だって本当に楽しんで人を殺しているわけじゃない」
言い訳をするように克行は言った。それは西崎にではなく自分自身に言い聞かせようとしているようだった。

好き好んでやってるわけじゃない？ 本当にそうか？ おまえは何かあるといつでも拳銃を握ろうとしているんじゃないか。それでもそんなことが言えるのか？ 今だっておまえはこいつを殺したいと思ったじゃないか。

心のなかでもう一人の自分がしきりに反発していた。

「わかってる……いや、わかってるつもりなんだ。おまえだっていろいろな事情があつてあの二人を殺したんだろうな。俺だってそれはわかってるんだ。ただ、それでもどうしても……」

（二人じゃない……もう俺は三人殺してる）

「確かに俺は人殺しだ。それは否定するつもりはないよ。けど、俺だって間違つたことをしているつもりはない。俺が殺した奴らだって特権者だったんだ」

（そうだ、そう思うしかない）

「……本当か？」

驚いたように西崎はうつむきがちの顔をあげた。

「驚いたか？ 坂本さんにしても波川さんにしても二人とも特権者っていう立場だったんだ。だからこそ殺したんだ」

残り二人、磯井と富士川の顔が思い出された。だが、別段彼らのことまで西崎に伝える必要はない。

「それじゃ、おまえは特命者を守るために殺してるってことか？」

「そう言えるのかもしれないな」

「そうか……」

ほっとしたような顔で西崎は克行の顔を見た。その顔に安心感が滲み出ている。友人の安心したような顔に克行はなぜか満足出来なかった。

（なぜ俺がこんなことを言ってやらなきゃいけないんだ？）

西崎の目の前に拳銃を突きつけ「安心するのは早いぞ！」と叫びたくなる。

（えい、くそっ！ さっさと帰ってくれ）

「桜川部長が誰に殺されたのかは知らないが俺が殺したわけじゃない」

「そうか……こんなこと言ったら怒るかもしれないが、俺は怖かったんだ。あんな……あんな酷い殺されかたをするなんて……頭を撃たれ、そのうえ……二台の車に体を縛りつけられ……しかも、俺はそいつを見ちまったんだ……車の持ち主が気づかずに車を動かして……部長の体が……二つに……まっぶたつに……」

西崎は混乱する意識を押えつけるように頭を抱えた。桜川を襲ったのも立花の仕業だろうか。あの男は人を殺すことを一つの芸術のように楽しんでる——だが拳銃は？

昨夜、市役所からの電話を受け取っていればきっと桜川の名前を聞くことになっただろう。最後に見た桜川の姿が思い出された。あの人もずっと恐怖に捕らわれていたことだろう。

「……」

「俺は死にたくない……」

その時になって初めて克行は西崎の顔がやけに疲れていることに気づいた。まるで何日も寝ていないかのように目がくぼんでいる。おそらく死に対する恐怖に襲われつづけていたのだろう。

「大丈夫。おまえは特命者になんか選ばれていない。少なくとも俺のリストにはおまえの名前はないよ。安心しろよ」

無論、それは真実ではない。西崎の名前はしっかりと特命者リストに、克行のリストのなかさえも載っている。

しかし、あえて克行はそのことを隠すことにした。克行自身、西崎を殺すつもりはなかったし、また、もしそれを伝えたとしても西崎を不安がらせるだけに過ぎない。今の克行に西崎のことを守ってやるほどの力もありはしない。

「……本当か？」

「ああ、おまえは殺されやしないよ。ただ特命者でなくても殺されることはあるんだ。なるべく気をつけろ」

克行は精一杯優しく声をかけた。しかし、西崎の表情は変わらなかった。何か言おうとためらっているのが克行にもわかった。

何だ？ 何を言おうとしてる？

それが克行にとって嫌な言葉となるであろうことを彼は予感した。やめろ！ やめるんだ！ 口を開くな！

だが、西崎はそれでも口を開いた。

「それなら……それならなぜ俺のあとを付け回すんだ？」

西崎の目は何かにとりつかれたようにギラギラと光って見えた。

「なんだって？」

「おまえは嘘をついているだろう。おまえは俺を殺すつもりなんだ。おまえは殺しを楽しんでいるんだ」

きつく食いしばった歯の隙間から漏れてくるようなその声は克行の怒りをますます高めていった。

それでも克行は最後の理性を振り絞ってその怒りを押さえた。

「俺はおまえを殺すつもりなどない！ さあ、もう帰ってくれ」

「それなら拳銃を渡せ！ 俺を殺さないと誓うならばその証拠に拳銃をよこせ！」

馬鹿野郎！

ぷつりと心のなかで糸が切れた音が聞こえてきたような気がした。俺は友人としてはっきりと約束した。それなのにこいつはその俺を信じようとししないのか？ こうなったら――

ポケットのなかの拳銃へ手がのびた。そして、それとほぼ同時に西崎の体がテーブルを乗り越え克行へ飛んだ。その右手にキラリと光る物が見えた。

突然のことに克行はそのまま床に押しつぶされたが、しっかりと西崎の右腕だけはなんとか左手一本でささえた。もしその手を放したら西崎の持つナイフは間違いなく克行の喉をかき切るだろう。

こいつははじめから俺を殺すつもりでここへやって来た。友人としてではなく、殺人者として。

歯を食いしばりながら、西崎はそのナイフを懸命に克行の喉へ押しつけようとしていた。その瞳に克行は去年の夜の殺人劇を思い出していた。そうだ、この目はあの男の目だ。こいつは俺の友人なんかじゃない。ただの人殺しだ。

一瞬、その瞳の輝きが自分にもあるのだろうかという考えが頭をよぎったが彼はすぐにその考えを遠くへ追いやった。今考えなければいけないのは自分が生きることだった。

どこだ？ 俺の右手は？

西崎は今両手でナイフをしっかりと握っていた。それに対しているのは克行の一本の左手だけ。かろうじてバランスを保つかのように押さええているが、そのナイフはじりじりと確実に降りてきている。冷たいナイフの刃が喉に触れる。克行はバランスを崩さないように、ポケットでゆっくりと休んでいる右手を引き抜いた。右手には彼の最後の切札である黒く頼もしい拳銃があった。

——ほんの簡単な操作で……

人を殺すのに十分の破壊力を持つ拳銃。

西崎はその動きに気づいていなかった。

さあ、どうする？ いきなりこいつの目の前に拳銃を突きつけるか？ それとも気づかないままにそのいまましい頭にコードつきの弾丸を撃ち込むか？ それとも……

克行はその拳銃を握り直すと、力一杯拳銃の柄で西崎の頭を殴った。克行の左手を押し切ろうとがんばっていた二本の腕から急激に力が失われるのがわかった。克行は続けざまに顎に拳銃を打ちつけた。

「ぐあ！」

体がぐらりと揺れ、西崎の体が克行から離れた。その手からナイフが転がり落ちた。克行はそのナイフを拾いあげると拳銃を西崎へ向け立ち上がった。情勢は一変した。今、目の前にいるのはただ「

死」に脅えている男にすぎなかった。

（どうする？ おまえは自分の友人を殺すつもりか？）

一瞬、理性が戻りかけた。だが、彼はそれを再び遠くへ追いやった。

こいつは友人なんかじゃない。俺を殺しにきただけの男だ。

そして、その男は殴られた痛みを耐えつつもゆっくりと顔をあげた。その目にあったのは「死」にたいする恐怖と克行に対する憎しみだった。それが彼を刺激した。

「くそ！」

克行は左手に握ったナイフを一瞬のうちに男の肩に突き刺した。

男は恐怖に満ちた表情で大きく口を開けた。だが、男の叫び声は克行には聞こえなかった。一切の音は聞こえなかった。ナイフを引き抜くと鮮血もまたそれと同時に飛び散った。傷は右腕の神経を麻痺させていたが、まだ他の肉体は十分に使うことが出来た。しかしすでに男は恐怖に捕らわれていた。抵抗すらしようとしない。ただ逃げることしか頭になかった。男は克行へ背を向け逃げようとした。

逃がすものか！

これほどまでに自分を挑発し怒らせた男をこのまま帰すつもりなどなかった。ついに克行は拳銃を使った。音は相変わらず聞こえなかったが、引き金を引いた時の感覚と飛び散る鮮やかな血の色が目的を達したことを物語っていた。

男が倒れた時、音が再び克行のもとへ戻ってきた。そして、それと同時に理性もまた彼のもとへ戻った。後に残ったのは友人だった西崎の死体だった。

まだ時計は六時を示していない。

死のクリスマスイブ・24

二十四

いったいこんなものをどうしろっていうんだ？ おまえは俺の計画のなかには入っていなかったんだぞ！

克行はかつて友人であった男の死体を見つめ頭を悩ませていた。死体から出た血はカーペットへしみこみ、ダークグレーのカーペットは薄気味悪い赤黒い色に染まっている。西崎が息を引き取ってから三十分が過ぎている。しだいに体は冷たく変わり、いずれはガチガチに固くなることだろう。すでに顔の色は血の気を失って、白く変色してきている。

いつまでもここに置いておくわけにはいかない。何よりもこのままここに置いておけば今はなんとか押さえてこんでいる吐き気が、必ず胃のなかにあるものを押し出してしまうだろう。かといってこの世の中簡単に死体を処理する場所なんかあるはずがない。

なんて片手間な計画なんだ。どうせなら自由に死体を持ちこみ、処分することの出来る場所くらい用意しておいてくれたっていいじゃないか。

さあ、どうすればいい？

これまではただその体にコードの刻みこまれた弾丸をぶち込めばいいだけだった。そうすれば誰かが警察に連絡し、その死体は処理されることになる。だが、ここにある限り警察は処理してくれそうはない。ほんの一本電話すれば片付くのかもしれない。だが、警察に連絡する気持ちにはなれなかった。昼間、学校を追われるように逃げ出したのも同じ理由だ。

警察を……いや、警察官が怖いからだ。警察官という権威が怖いわけじゃない。今の克行ならばむしろ警察官のほうが怖がることは立証済みだ。問題はあの立花が同じ警察官という職業についている

ということだ。

立花には克行のやっていることが知れるのは避けたかった。いや、もう手遅れかもしれない。何よりも弾丸に刻みこまれたコードによって特権者たちを殺しているのが克行であることは知られている。その情報はすでに立花のもとへ届いているかもしれないのだ。それは立花との戦いが不利になることを意味する。

立花はこの俺を敵と見なすだろうか。そして……

倒れている西崎の姿がそのまま自分の姿へとつながって見えた。

いったいなんで俺の目の前に現れやがったんだ？　まるで「火気厳禁」と書かれた立て札を捜して、そいつの前でタバコを吸おうとするようなもんじゃないか。いや、こいつはもっと悪い。なぜなら、こいつは俺を殺そうとしやがった。克行は思わず喉元に手をやった。西崎のナイフによってかき切られそうになった喉元。痛みはまるでなかったが、手にほんの少し血がついているのが見えた。おそらくさっきナイフが当てられた時に皮一枚切られたのだろう。

転がっている西崎の死体に唾を吐いてやりたいような衝動にかられた。血の匂いが部屋に充満している。おそらくこの匂いは部屋をそっくり洗い流さないかぎり消えることはないだろう。克行は立ち上がると死体を見下ろし思いつ切り蹴りつけた。人間として扱いたくなかった。人間として考えなければどうにでも処分出来る。

さあ、こいつをどうする？

バスルームでバラバラに解体し、ゴミ袋へ入れて宅配便で夢の島へでも送ってしまうか？　それとも　いっそ、今すぐにそこの窓から放り投げてしまうか？

この時間ならばまだ家路を急ぐ多くの会社員やロマンスを語る恋人たち、子供連れの母親だっているはずだ。

空から降ってくる死体。そうそう、真っ赤な服に白い髭でもつけて空へ放り投げてやろう。サンタクロースの死体。ピツタリじゃないか。サンタは死んだ。今年はサンタはやって来ない。今どきの子供たちに大人たちはどうやって説明する？

だが、そんな空想もちっとも面白くなかった。それがユニークに
思えるとしたら、あくまでも空想のなかの話であって、今日の前に
あるのは現実として克行を襲っていた。

さあ、考えるんだ。時間はまだたっぷりあるんだ。今夜、麻美の
部屋を訪ねるまでに始末すればそれでいい。

さあ、考えろ。

西崎の死体を見つめながら克行はじっと思案にくれていた。

死のクリスマスイブ・25

二十五

麻美のもとへ訪れたのは夜の10時を回った頃だった。

すでに麻美の名前のはいったリストを持つ5人の特権者のうち3人が死んでいる。残るは克行と立花勇作の二人となった。

そして今年の「特権者優遇計画」が終わるまであと二日と二時間。この期間麻美を守りぬけばすべてがうまくいく。

立花の住所は知っている。正面から立花に勝負を挑むことも考えた。だが、立花が残る二日大人しく自宅にいても考えられなかった。むしろ麻美のマンションで彼女を護るほうが得策に思えた。

それにしても……なぜ立花が富士川を殺したのか、その理由がまったくわからなかった。初めは偶然、立花の標的が富士川になっただけのようにも思えたが、しかし立花が通常狙うのは特命者だけのはずだ。特権者から外されるかもしれないという危険を犯してまでなぜ同じ特権者である富士川を殺さなければいけなかったのだろう。立花が富士川のことを知っていて個人的な感情で殺したのだとすればわからないこともない。しかし、それでもわからないのは立花が拳銃を使用しなかったことだ。あの時、克行は比較的冷静に富士川の死体を観察した。しかし、外傷といえはいくつか殴られたような痣が顔にあったようだが、直接的な死因はナイフで喉を切り裂かれたものしかない。拳銃で撃たれた形跡はどこにも見当たらなかった。（なぜだ？）

克行は首をひねった。

拳銃の弾丸がすでになくなったのだろうか。もし幸運にもそうだとすれば立花はそれほど大きな敵ではなくなる。コードの刻みこまれた弾丸がなければ特権者としての殺人ではなく、個人的な殺人として法的にも罪として殺人者となるのだ。そう、立花が富士川を殺

したのは立派な殺人という罪だ。しかし、克行にはどうしてもそんな樂觀的な見方は出来なかった。むしろ、克行の知らない何かが克行の知らないところで動いている恐怖を感じていた。

克行は麻美のマンションを訪れ、彼女をきつく抱き締めた。

「克行……」

麻美のぬくもりが嫌なことすべてを忘れさせてくれる気がした。
(すべてを失っても麻美だけは助ける)

そう決意していた。

ここに来る前に始末した西崎の死体のことが思い出された。西崎の死体は血で汚れたカーペットに包まれ、さらに二ヶ月前に買ったばかりの冷蔵庫が入っていたダンボールに詰めこまれ、ゴミ捨て場に置かれている。

——もしもし、警察ですか？ 今、ゴミ捨て場に一人の男の死体がある。ダンボール箱に入って捨てられています。彼は特権者優遇計画によって削除されたのです。ええ、もちろん特命者です。彼の体の中には特権者コードの刻まれた弾丸が残っています。

いずれ警察がやってきて西崎の死体は処分されることだろう。克行は西崎のことを忘れることにした。

ベッドに眠る麻美の存在が心のささえになっていた。

ソファに座り、拳銃を握ったまま克行は立花の影に備えていた。

不思議に眠くならなかった。

窓から見える月を見つめ、克行はただ静かに夜を送った。

十二月 二十三日 (土)

明日のクリスマスイブを控え、街は活気にあふれている。

そのクリスマスソングを聞きながら、克行は麻美の部屋で過ごしていた。麻美の手料理を食べ、静かに過ごす。まるでその光景は去年とかわらぬ幸せな日々のように見えた。だが、去年とは違い克行は特権者となり麻美が特命者となってしまうている。

何事もないように時間が過ぎていく。

克行は麻美のPCを借り、インターネットニュースに目を走らせていた。その時、一つの記事が克行の目に飛び込んできた。

体が堅くなる。

(これは……)

「どうしたの？」

麻美が怪訝そうな顔でPCを覗き込む。

「――が……死んだ……」

「え？」

それは昨夜起きた駅での事故を報じるものだった。一人の男性が駅の階段から落ち死亡した。そして、そこに載っていたのは――

「立花だ」

立花の写真がはっきりとそこに写っている。「立花が死んだ」

「克行……？」

「立花が死んだ！」

なにかの間違いではないかと何度もその記事と写真を見比べた。

だが、間違いないそこに写っているのは間違いなくあの立花だ。

麻美はそんな克行を驚きの目で見つめている。克行はそんな麻美にたいして叫んだ。

「終わったんだ！」

「え？」

「もう怯えることなんてないんだ。俺たちの特権者優遇計画は終わったんだ。もう麻美の名前のはいったリストを持っているやつはいなくなったんだ！」

喜びが心からあふれてくる。

他人の死をこれほどまでに喜べる自分が恐かった。だが、それでも立花の死は喜びを押さえずにいられない。

体から力が抜けていく。

こんなあっけなくあの立花が死ぬなど予想もしていなかった。全てが終わった感じがしていた。

異変は夜になってからだった。

深夜、二時を回ったとき克行の携帯電話が鳴りだした。

涼子からだった。

「……はい」

一瞬、嫌な予感がしたがそれでも取らないわけにはいかなかった。

——克行……

涼子の声だ。

「どうしたんだ？」

先日、突然全てを忘れて手を引けと言って以来何度電話してみても連絡が取れなかったのだ。

——いったいどういうことなの？

咎めるような声が電話の向こうから響いてくる。

「どういことって何が？」

隣で眠る麻美を起こさないよう声を低く克行は話した。

——手を引けと言ったはずよ。それなのにあなたは……。

「何を言ってるんだ？」

——今更隠すつもり？ 特権者たちを殺してるのはあなたなんですよ。私が渡したリストによって麻美さんの名前の入ったリストを持つ特権者たちを殺しているんでしょう

すでに連絡は市にも入ってきているのよ。私が知らないとしても思っただの？

「……ああ」

そうか、涼子も密かに特権者優遇計画を、そして克行を見張っていたのか。見放されたのではない、不思議と安心感があった。

——なぜそんなことをするの？

「なぜ？ わかっているだろう。彼女を……麻美を守るためだ。おまえも以前そうするしかないと言っていたらう」

——あの人は大丈夫よ！ そう前にも言ったでしょう！ 克行が殺人を犯す必要なんかないのよ！

涼子のいらだつ声が響いてくる。

「なぜそんなことが言えるんだ！ おまえはいったい何を知っているんだ！ それがわからない限り、たとえおまえの言うことだって信じることは出来ない。俺は俺なりに彼女のことを守る。そう決めたんだ」

思わず声が強くなった。

涼子は克行の言葉に痛いところをつかれたように声のトーンを低くした。

——克行……知らないほうがいいことだってあるのよ。

「いいさ。おまえが何も教えないならばそれはそれで構わない。だが、おまえが何も教えない限りは俺のやり方で彼女を守るだけだ」

——……克行！

まだ何か言いたげな涼子の声を無視して克行は電話を切った。

（おまえなど何の役にもたつものか！ ただ俺を不安がらせるだけじゃないか）

忘れてしまえ、忘れてしまえばいい。涼子のことはこれまでのように過去に閉じ込めてしまえばいい。先週の夜のことも、それ以前のことも全て過去という箱に閉じ込めて蓋をしてしまえばいいのだ。何も聞かないほうがいい。

（そうだ、もう全ての特権者は死んだんだ……もう終わったんだ）

今は涼子の言葉は聞かないほうがいい。聞けば自分のやってきたことを間違いと思うことにもなりかねない。涼子の口調にはそれほどの恐怖が潜んでいるように思えた。

そう思ったかった。しかし、實際心のなかでは涼子の知る全てのことを聞き出したかった。全てを知らなければ麻美を完全を守ることも出来ない。いや、それはただのたてまえだ。本当は特権者優遇計画の裏に流れているものの正体を見極めたいという自分勝手な欲望だ。そして、その欲望はおそらく満たされることになるだろう。そして、克行の想像した通り一分もたたないうちに再び携帯は鳴り出した。

克行は黙ったまま携帯を開いた。

――後悔しない？

電話を切られることを避けるようにすぐに涼子は言った。

「しない」

克行もまたすぐに返事をした。後悔など今更出来るはずもない。

そうさ、一生後悔などするものか。

――それがどんなことであつても計画が終わった後忘れることが出来る？

出来ないでしょう――そう言っているようだった。

その涼子の声はさつきとはどこことなく違っていた。むしろ活き活きと聞こえる。まるで実は隠し事を今にも話したかったかのようにさえ聞こえる。

王様の耳はロバの耳――おまえはいったい何を喋りたかったんだ？

「おまえは何を知ってるんだ？」

――何も知ってなんかいないわ。私のはただの想像。でも、あなただってこれを見たらそう想像するはずよ。

「これ――って？」

――今から持っていくわ。

その言葉に克行はふいに怖くなった。しかし、引き返すわけにもいかない。

「今から？」

――電話で話せるようなものじゃないの。二時間後にそっちに行くわ。

二時間あれば自分のマンションまで帰ることが出来る。今、麻美のマンションにいることを気付かれなくなかった。

「それじゃ、待ってる」

克行はそれだけ言うとともに電話を切った。いくぶん声が震えていることに自分自身気づいていた。

シークレットファイル。

おそらく涼子の知っているのはその中身だろう。いったいそこに

何が入っているのだろう。

――彼女は大丈夫。

先日の涼子の言葉がやけに気にかかる。なぜ、涼子はそんなことを言ったのか。なぜ……？

「どうしたの……？」

いつのまに起きたのか心配そうな顔をしながら麻美が克行を見つめている。

「……ちよつと帰ってくるよ」

「どうして？」

「……涼子から電話があった」

涼子の名前を出すのははばかれたが、今はそんなことを言っている場合じゃない。それに名前を出したところで涼子とのことば麻美にばれるわけじゃない。二人を会わせるつもりなどありはしないのだから。

「涼子さん……？」

麻美の声にいくぶん驚きがあった。

「以前話したろう、役所に務めている大学時代の友人だ。役所で新たに情報を握ったらしいんだ。まだ詳しくはわからないが、おそらく俺とおまえのことだと思う」

「ど、どういうことなの？ あの人、克行に何か言った？」

「俺にもよくはわからないんだ……以前、あいつが君は何があっても無事だと言っていたんだ。とにかく今夜、そのことで涼子が来ることになってね。だから、今からちよつと帰ってくるよ」

「涼子さん、今から克行の部屋に？」

「二時間後に会うことになってるんだ」

「……そう」

寂しげな声。

いかに特権者の4人が死んだとはいえ、克行も麻美を一人にしておくことは心配ではあった。だが、今は涼子の言葉が気にかかる。

「大丈夫。なるべく早く戻ってくるよ。それまで用心していてくれ」

「わかった」

そう言った麻美の声がどことなく力をなくしているように思えた。

死のクリスマスイブ・26

二十六

十二月 二十四日 (日)

やけに体が痛かった。

窓から太陽の日ざしが直接顔にあたっている。ほとんど寝ていないせいだろう、やけに光が眩しい。

いつの間に眠ってしまったのだろう。

克行は上体を起こした。

昨夜、結局涼子は訪れなかった。克行は麻美のもとへ戻ることもできずに待ちくたびれて、うとうとしたままそのままソファで眠りこんでしまったのだ。

とうに昼を過ぎてしまっている。

(あいつ、いったいどうしたんだろう?)

涼子のが気になった。

学生時代からこれまで約束をすっぱかすようなことは一度もなかった。むしろ神経質なほど約束を守ろうとするタイプで、克行などもつき合っていた頃さんざん文句を言われたものだ。

克行は携帯電話を手にした。メールもはいってはいない。涼子へ電話をかけてみた。しかし、何度コールしても誰も出ようとはしなかった。留守番電話にすらなっていない。

克行は諦めて電話を置いた。

涼子のことにも気にはなったが、それでも今の克行にとって何よりも大事なのは麻美のほうだ。昨日の今日でまさか危険が及んでいるとは思えなかったが、それでも少しでも早く麻美の元気な姿が見たかった。

克行は涼子のことを一時忘れ、麻美のことだけを考えることにし

た。

眠気を覚ますためにシャワーを浴びるとすぐに支度をして、麻美のところへ出かけることにした。

今日ですべてが終わる。

ふいに玄関のベルが鳴った。

(涼子?)

克行は相手を確かめようともせず、急ぎドアを開けた。しかし、そこに立っているのは涼子ではなかった。

見知らぬ二十歳前後の女性が一人うつむきがちで立っていた。顔は細く、長い髪を後ろで束ねている。どこかで見たような気がしたがすぐには思い出せなかった。

「なんですか？」

「……あの……」

女性は顔をあげると何か言いたげに克行の顔をじっと見つめた。しかし、声は言葉にならなかった。赤く染まった瞳から涙がこぼれ落ちた。

「どうしました？」

克行は戸惑った。今日までに殺した三人の男たちの顔が脳裏を横切る。彼らの家族かもしれない。そんな不安が心を横切った。

「……ご……ごめんなさい」

女性は懸命に涙をおさえた。

「……失礼ですがどちらさまでしょう」

「す……すいません。私、康子です。三浦涼子の妹です」

康子は涙を拭うとはっきりと言った。そういえば以前、妹がいると言っていたことがあることを克行は思い出した。確かにそう言われてみれば涼子によく似ている。

一瞬ほっとした反面、康子が現れたことで克行はいっそう不安な気持ちが強めた。なぜ涼子ではなくその妹の康子がここへ現れたのだろう。涼子に何があった？

「妹さん？ 何かあったんですか？」

「……はい」

「どうぞ入ってください」

克行は慌てて康子を部屋のなかへと導いた。簡単に済むような話とはとうてい思えなかった。

康子は部屋へ入るとしばらくどう話していいかを考えるように黙っていたが、やがてゆっくりと話しだした。

「昨夜、ちょっと姉のところに行ってみたんです」

「昨夜？」

「はい、行ってみるとちょうど姉は風間さんのところに出かけると言っておかけるところでした。ひどく慌てていて、それにあんなに真剣な姉の姿を初めて見ました」

「昨日彼女から電話があって、ここに来ることになってました。おそらくあなたが行った直前でしょう。けど、結局お姉さんは来ませんでした。何か出かけられないことが出来たんですか？」

「いいえ、出かけました」

「出かけた？」

「けれど、ここまで来ることが出来なかったんです」

「……ど、どういふことなんです？」

「姉は昨夜、ここに来る途中で殺されたんです」

涙をぐっと堪えるように唇を噛み締め康子は言った。

驚きに克行は言葉を失った。それが特権者優遇計画に絡んでいることだということはすぐにわかった。

「……殺され……」

息が詰まった。以前、愛した女の死が克行の心臓をきつく握りしめている。

「姉は私が訪ねて三十分もたたずに風間さんに会うために出かけました。姉はすぐに戻ってくると言っていたので、私はそのまま姉の部屋に留まり待っていました。それなのに、姉は出かけてすぐに死体となって戻って来たんです」

「いったい誰に!？」

やっとの思いで克行は声を絞り出した。

「……わかりません」

「特権者に殺られたんですか？」

克行の言葉に康子は様子を探るように克行の顔を見つめ、それから静かに頷いた。

「弾丸に刻まれているコードから誰に殺されたのかわかるはずなんです。警察は教えてはくれませんでした」

悔しさを無理に抑えながら康子は克行に語った。それでも言葉は途中、涙のために声にならなかった。

スタンガンを見せて笑った涼子の姿が思い出された。

「そう……ですか」

どう言っているかわからなかった。もっといろいろなことを聞きたい気持ちはあったがそれでも姉を亡くした彼女の気持ちを踏みにじるように遠慮した。涼子は康子に自分が特権者優遇計画に関わっていたことを伝えていたのだろうか。

「なぜ姉は殺されたんですか？」

康子の言葉にはっとさせられた。

「……それは……」

涼子が特権者優遇計画に関わっていたことを言うべきか克行は迷った。特権者優遇計画に関わっているということが他人にとってどう見られるかこの二週間で克行もよく知っていた。

「姉は今年も特権者優遇計画に直接関係していたのですか？」

「なぜ……それを？」

「去年、姉が計画に関わっていたことは聞いていました。それに姉が出かける前にそんなことを言っていました。風間さん、特権者に選定されたんでしょう。それに、姉が風間さんに見せると言っておいた書類が姉の殺された後なくなっていました」

「書類が？ それはどんな書類ですか？ いったいどんなことが書かれていました？」

（シークレットファイル！）

すぐにそれが何の書類なのかわかった。

「さあ、それは私にもわかりません。けれどそれが風間さんに関わることは確かだと思います。だから、風間さんなら何か知っているんじゃないかと思って……」

康子の言葉が妙に心苦しかった。克行が涼子を死に追いやったような気がしていた。康子も心のどこかでそう思っているのではないだろうか。

「ごめん……俺には何も……」

「……そうですか……」

康子はつらそうにうつむいた。

「なぜ、そんなことを聞くんです？」

「なぜって……」

「復讐するつもりですか？ 誰が殺したのかを自分自身で捜し犯人に復讐するつもりなのですか？」

「いけませんか？」

康子は涙を拭うと、きつい視線を克行に向けた。

「だが……これは――」

「国の政策であって罪にはならないって言うんつもりですか。殺人ともみなされない。それが特権者優遇計画であることは私だって知っています。でも、だからって姉さんの死をこのままにしておきたくはありません。どんなことをしても復讐してやりたい」

おそらくそれは克行が特権者だということを意識せずに言った言葉だったろう。しかし、克行には康子の言葉がそのまま自分に向けられているように聞こえていた。まるで康子が克行のやっていることを知っているようにすら思えた。波川、坂本、磯井、彼らの家族も康子と同じような気持ちで克行に恨みを抱いているのだろうか。

なぜだ？ なぜそんなことをこの俺に言うんだ？ 特権者であるこの俺に。俺が殺したとでも？ それとも俺に怒りをぶつけることで怒りを忘れようとしているのか？

だが、すぐに克行はその考えを打ち消した。今日の前にいる康子

にそんな気持ちはない。ただ姉の死を前にして理性を失っているだけにすぎない。「死」が人の心にどれだけの力を持つものか、それは克行もここ数日嫌というほど思い知らされている。

「……君の気持ちはわかるけど……それはあまりに危険すぎる……」

「私、そんなこと怖くありません。風間さんは何とも思わないんですか？」

康子の言葉にずきりと心が傷んだ。克行と涼子が以前つき合っていたことを康子は知っているようだった。

「……」

「姉と風間さんのことは姉から聞いてしっています。……そりゃあ昔のことかもしれませんが……」

昔のこと……あれは昔のことなんかじゃない。あの夜からまだ一週間たらずしかたっていない。そのことを康子が知ったらどう思うだろう。

康子はきつい視線で克行を見つめながら、それでもすぐに過ちに気づいたように言葉を濁した。

克行には何も言い返すことなど出来なかった。康子の言葉以上に克行は涼子の死が自分の責任だと感じていた。そして、かつての涼子との関係がそれを強くしていた。

康子の決意が克行にはつらかった。自分の犯した三つの殺人を初めて悔いる気持ちは湧いていた。

死のクリスマスイブ・27

二十七

空は暗く、街は店頭に輝く装飾品でキラキラと輝いている。街行く恋人たちは腕を組み、悲しみの一つもないように明るく寄り添っている。おそらく彼らにとってはお互いの存在だけが全てで、それ以外の誰のことも頭のないのだろう。

先日までは克行もそういう人たちのなかの一人だった。克行にとって麻美との愛情だけが全てだった。回りの人々がどのような生活をしているか、もちろん政治のことなど興味がなかった。けれど、今は特権者優遇計画の影響か、周囲の人々の行動全てが気になっている。どこかで起こっている事件が皆自分に関係しているような気がしていた。

克行は彼らの姿をぼんやりと見つめながら駅前ベンチへ腰かけていた。ここから麻美のマンションまで十分もかかりはしない。だが、克行はなかなか動こうとはしなかった。目の前の噴水に青や赤の光が灯り、クリスマス・イブを盛り上げている。

やけに空気が冷たい。今にも雪が降りそうな天気になってきた。おそらく今夜雪が降るという気象庁の予想は当たることだろう。ホワイトクリスマス、白一色のイメージの街のなか、赤く血塗られた道を一人歩いて行かなければならない。

何かが心の片隅に引っかかっている。

康子が帰ったあとも克行はすぐに麻美のもとへ急ごうとはせずに、涼子の死についてずっと考え続けていた。

(……俺のために……)

おそらく涼子はシークレットファイルに近づいたために殺されたのだろう。それも特権者優遇計画に関わる者によって……。康子もそのことはすでにわかっている。

だが、康子にしてもこんなことは一日も早く忘れたほうがいい。いや、忘れることでしか救われる道はないだろう。忘れなければ彼女自身も危険なことになりかねない。

（俺のせいだ。俺があいつを巻きこんだ。俺がシークレットファイルの中身を知りたがったためにあいつは殺されたんだ。俺の……俺のせいだ）

自責の念が心を揺さぶっていた。

――愛してる。

頭に響く涼子の声。

（俺はなんてことをしてしまったんだ。俺はあいつの愛を利用したんだ）

涼子と過ごした日々のこと、そしてあの夜のことが目まぐるしく頭のなかを駆け巡っていく。

自分のやったことが全て間違いだったようにさえ思えてくる。涼子に出会ったこと、自らの立場を涼子に喋ったこと。特権者たちを次々に殺したこと。すべてが間違いだったのかもしれない。気持ちが後もどろしそうになり、克行はぞっとした。

（だめだ！ まだだ！ まだそんなことを考える時じゃない！ 今、弱気になるな！）

克行は思いを打ち消した。

まだ特権者優遇計画が全て終わったわけじゃない。あと一日、今夜一二時を過ぎるまで特権者優遇計画は終わらない。感情に浸るのはその後からでなければならぬ。麻美を守り切ったその後だ。

サンタクロースの姿をしたケーキ屋の店員たちが店先で鐘を鳴らしている。ケーキ屋にとっても、そして「特権者優遇計画」にとっても今夜こそが最も盛大になる。

「どうかしたかい？」

一人の男が隣に座り込み、克行の顔を覗いた。「せっかくのクリスマスにうかない顔してるじゃないか」

日曜だというのにスーツを着込んでいる。なにかの営業だろうか

……

「……」

「まるで死神にとりつかれてるみたいだ」

男の言葉に克行はギクリとした。

「凶星って顔してるねえ。ひょっとしたらあんた——」

そこで男は声を潜めさらに続けた。「——特権者なんじゃないかい？」

「何で——！」

「おっと、そう大きな声を出すもんじゃないよ。そうかい、やっぱあんたも特権者なのかあ」

「それじゃ——」

克行はまじまじと男を観察した。三十半ばのどこにでもいそうな、とりわけ特徴のない男だ。この男が特権者として日夜殺人を犯しているのだろうか。嫌悪感はあったが怖くはなかった。

「そう、私も特権者さ。『類は友を呼ぶ』っていうけど本当だねえ」
そう言って男はポケットに突っ込んでいる右手をほんの少し出してみせた。黒い固まりがしっかりと握られている。

「なぜわかったんですか？」

「さあ、なぜだろうねえ……あんたのその疲れたような顔、去年の私にそっくりだ」

「去年？ それじゃあなたは二年目？」

「そうだよ。しかし、今年は去年と違って非常に楽に感じてる。『習うより慣れろ』ってことかな。あんたもすぐに慣れるよ。人間ってのはもともと好戦的な動物なんだ。自然に身を任せればいいさ」

「あなたは人を殺すことに何のためらいもないと？」

「ないね……私は去年家族を全員殺したんだ。あの時はさすがに辛かったが、あの後はもう全然」

「なぜ……家族を？」

「なぜだろうねえ……実を言うとあの晩のことはあまりよく憶えていないんだ。飲み潰れちまってね。ただ……子供の鳴き声が聞こえ

て……ふふふっ、なあにあの時は気が動転したが冷静になりやあたいたことじゃあない。気にするほどのことじゃない」

男は美しい思い出を語るかのように笑みを浮かべながら答えた。その男の笑みに克行は自分のなかの狂喜を垣間見たような気がして思わず身震いがした。

狂ってる。この男は狂ってるんだ。克行は必死にそう思いこもうと努力した。目の前にいるこの男が正気であるはずがない。

「おや？　なぜそう驚いたような顔をしているんだ？　人殺しが罪だとしても？　もしそう思っていたらそりゃあ大きな間違いだ。君は理性で動いている。正義のために動いている。そう思っているだろう。だがね、この世の中にそんなものは存在してなんかいない。こいつが全てを教えてくれる。誰も彼も人を欺いて生きているのさ」

「だから人を殺してもいいと？」

「人を殺すのは真実を導き出すため。嘘で生きるのはつらいことだ」
「あなたの言っていることは僕にはわかりませんね。少なくとも僕はあなたのような考え方はしたくない。僕にしてみればそこらへんの酔っ払いのほうがあなたよりもよほどまともな頭をしていると思いますよ。あなたも彼らを見習ったらどうです？」

「ごめんだねえ、こいつを手にして酒を飲む気にはならんよ。酒なご口にしたら自分の頭にこいつを当てちまいそうだ。それになにより君は嘘をついてる。私にはわかる。君はそれに自分で気づこうとしていないだけだ。……さてと、私はもう行くよ。今夜は忙しいんだ」

男はふわりと立ち上がると紙切れを眺めながらゆらゆらと駅へ向かって歩き出した。その紙切れが特命者リストであることはすぐにわかった。男の背後から弾丸を打ち込んでやりたくなった。だが、この男のリストのなかには麻美の名前はない。そしてこの男がリストをもとに人殺しをするのなら麻美に危害を加えることはないだろう。克行はしばらくの間、その男の後ろ姿をじっと見送っていた。男がいなくなってから三十分後、克行はやっと麻美のマンション

へ向けて動きはじめていた。いつまでもためらっているわけにはいかない。

それにしても気になるのは涼子の持って出たという書類のことだ。それがシークレットファイルの内容であることはほぼ間違いないだろう。問題はその内容がいったい何であるかだ。

克行と麻美に関わること。

――彼女は大丈夫！

（なぜあんなことが言えたんだ？）

だが、涼子がいい加減なことを言ったとは思えなかった。

涼子が言ったように麻美には危険はなかったのかもしれない。

（なぜ？）

考えれば考えるほどわからなくなっていく。しかし、涼子を死に追いやったほどの内容に克行と麻美が関わるというのはどういうことなのだろう。

シークレットファイル。

特権者としての克行と特命者の麻美。

涼子の死。

それがどういう意味があるのか。それらがどのようにつながるのか。

麻美の部屋の明かりが見える。どこか安心感があった。

（今日と明日……とにかく彼女を守る！）

決意を新たに克行は階段を登り始めた。

その間も克行の頭のなかはシークレットファイルのことでいっぱいだった。

――知らないほうがいいこともあるのよ。

（どうということだ？）

――ミスよ。

――姉は死にました。

（？）

ふいに克行の心のなかに恐怖の一線が走った。だが、そんなこと

があるはずがない。

死のクリスマスイブ・28

二十八

克行の帰りを麻美は心待ちにしていたかのように出迎えてくれた。克行は両腕で麻美の手をきつく握りしめた。

麻美は何も聞こうとしなかった。克行も強いて涼子のことを伝えようとは思わなかった。何よりも涼子の死のことを麻美に話したくなかった。その麻美の様子がどこかおかしいことに克行は気づかなかった。

「終わったのね」

つぶやくような声で麻美が言った。その顔はやけに白く、疲れているような様子が見受けられた。もしも、克行がいつもの冷静さで麻美をそして部屋を見ていたならばその様子がいつもと違うことにすぐに気づいたことだろう。だが、今の克行にその冷静さはなかった。

「そう……全て終わったんだ」

克行はぼんやりとソファに座ると全ての特権者が消えたリストをじっと見つめた。もう麻美を狙う特権者はいない。そして、今年の特権者優遇計画もじきに終了する。

ふいに涼子のことが思い出された。

（あいつが助けてくれたんだ。あいつがいてくれなければ俺はどうすることも出来なかった）

悲しみで克行に冷静さを取り戻した。そして、克行はやっと部屋の様子がいつもと違うことに気づいた。

本や衣服が乱雑に散らばっている。奇麗好きの麻美には珍しいことだ。

ベッドの下の小さな闇のなかに青い一對の目が見えた。それはすぐに猫のルシファーだということがわかった。克行が来ている時に

はいつもベッドの下に隠れている。しかし、今日はいつもとは様子が違った。しっぽを微かに揺らしながらルシファーは何かにじやれつくようにしてベッドの下からのっそりと姿を現した。

その瞬間、克行の鼓動はいっそう激しくなった。

ルシファーの姿を見たからではない。そのじゃれついているものが目に飛び込んできたからだ。

克行はそっとそれを広いあげた。ルシファーが非難を込めた鳴き声を発したが、それは克行の耳には届いていなかった。

それは金色の弾丸の一発だった。弾丸には克行の持つそれと同じようにコードが刻まれている。

（なぜこいつがここに？）

克行はそのままの状態ですっと視線を動かしさらに注意深く部屋の様子をうかがった。コートの胸のあたりが焼け焦げ、ベッドの下に隠すように突っ込んである。

（焼け焦げ……？）

階段を登ってくる途中に頭をよぎった不吉な考えが再び思い出される。

克行はそっと手を伸ばすとコートを無理やり引き抜いた。

血が微かにこびりついている。

――スタンガンよ。FBC2X、あなたも名前くらい知ってるでしょう。

――姉もスタンガンを発射したあとはあったんですけど……。

――涼子が来ることになってるんだ。

――涼子さんいつ克行のところに行くの？

（嘘だ……そんな馬鹿なことが……）

粉々に散ったジグソーパズルの欠片がしだいに一ヶ所に集まっていく。まだあちこちが穴だらけのジグソーパズル。そのパズルが出来る上がることが克行には怖かった。

克行は必死になって考えを打ち消そうとした。だが、考えれば考えるほど全ての答えがそこに集まってくる。

（なぜだ？　なぜ、俺がこんなものを見つけないきやいけないんだ？
ルシファー、おまえは俺を地獄へ落とすことが出来る！）

目の前をうろつくこのうす汚い黒猫の体中に残った弾丸全てを撃ちこんでやりたい衝動にかられた。しかし、そんなことをしてみてもどうにもならないのがわかつている。

パズルの欠片がこれ以上現れないことを克行は祈った。だが、その反面心の奥底で見えない欠片を捜そうとしていることにも気づいていた。そして、それがどこにあかということも。

左腕が今になって痛みだし、激しく克行を襲っていた。

背後からガチャリと拳銃のシリンダーの回る音が聞こえてきた。

「……麻美……」

やっこの思いで声を絞り出した。

「ごめんね……」

窓ガラスに麻美の姿が映ってみえた。その手には拳銃が握られている。拳銃は克行の物と同じように特権者優遇計画に使われる物のように見えた。拳銃は真っ直ぐに克行に狙いをつけている。

また欠片の一つが集まり始めた。もう逃げることなど出来ない。

（さあ、残ったピースを渡してもらおうじゃないか）

「……どういことなんだ？」

窓ガラスに映った麻美の姿を見ながら克行は尋ねた。ガラスの向こう側で雪が舞いはじめている。

「……」

「……答えろよ。まさか……おまえが……おまえが涼子を？」

「……」

「涼子を殺したのはおまえなのか？　これはその時の跡なのか？」

「……そうよ」

小さな声で麻美は答えた。

「なぜなんだ？」

「あの人は知ってはいけないことを知ってしまった。そして、それをあなたにまで伝えようとしたわ」

「あいつは俺のために、そしておまえのためにいろいろ調べてくれたんだ」

「でも結果的にあの人は余計なことをしてしまったのよ」

「余計なこと？　　いったいあいつは何を知っていたんだ？」

「……」

「答えてくれ……俺はおまえのために人を殺したんだ。知る権利くらいあるだろう」

「そうね。あなたは私のために特権者たちを殺してくれた。本当は全てさつきで終わってれば良かったのよ。あなたは裏のことなど何も知らないのが……いえ、それよりあなたが特権者に選ばれさえしなければ一番良かったのよ」

「おまえ、何を知ってるんだ？」

「おそらく全てについて……それにね、私が特命者に選ばれたことは克行に伝えられる前から知っていたことなの」

「前から？」

「そうよ。以前、克行に父さんのこと話したことあったでしょう」

「公務員だって言ってた」

「そうよ、国家公務員。ただ、普通の公務員じゃないの。政府の裏に回っているいろいろと政治家のやるようなこともやっているの。例えば――」

「――特権者優遇計画？」

「そう、特権者優遇計画。父さんは昨年まで国家委員会の委員長だった。だって特権者優遇計画を考えだしたのも父さんだもの。だから今でも少しは情報が入ってくるの。克行が教えてくれる前に父さんから手紙が届いて私が特命者に選ばれること教えてくれたの」

特権者選ばれたことを麻美に伝えた夜、麻美が慌てて隠した手紙のことを克行は思い出した。

「なぜ？　なぜそんなおまえが特命者に選ばれたりしたんだ？」

「父さんが失脚したの。委員会にもいろいろと勢力があって、父さんは新しい力によって委員長を解任されたの」

悔しそうな麻美の声が背中に伝わる。

「……」

「そして、私は父さんに恨みを持つ人によって特命者に加えられたのよ。私と父さんが逃げのびるには私を狙う特権者たちを全て殺さなければならなかったの」

「全て？ それならもう全てが消えた」

「そうあなたを除く特権者たちがね」

声がやけに冷たい。

「俺のことも殺すつもりか？」

「本当は殺したくなんかない。でも、私もまだ死にたくないの」

「俺がおまえのことを殺すとも思っているのか？」

思わず克行は叫んだ。

「いいえ、あなたが私を殺すなんて思っていないわ。でも、私が生きるためにはあなたの死が必要なのよ」

「なぜだ？」

「それがシークレットファイルの内容だから……」

「シークレットファイル？」

「そうよ、シークレットファイルには私の父のこと、そして、私のことが書かれていたのよ。私の父は特権者優遇計画国家委員会の前・委員長。そして私はその手伝いをして多くの特権者たちを集めていた。そして父の失脚のため私は特命者リストに名前を載せられたのよ。けれど一つだけチャンスが与えられた。私を殺す予定になっている特権者たち、その全てを殺すことによって私も、父も、そして家族たちも元どりの生活が出来るようになるの」

「何だって？」

「立花も私が見つけ出した特権者よ」

「立花が？」

「私はあの男の名前をあなたの言う殺人者リストのなかに見たとき、これはチャンスだと思った。立花を使って特権者たちを殺すことが出来るって。その時はまだシークレットファイルのなかを知らなか

ったから、私自身を守るために必要だと思ってた。この拳銃はあの男のものよ。いざという時のためにあの男から預かっていたの」

克行は先日、麻美の部屋に訪れた時のことを思い出した。波川、坂本を殺したあと麻美のマンションに来る途中、立花の姿を見かけたような気がしたことを……。

富士川を殺すときになぜ拳銃を使わなかったかがこれでわかった。おそらく桜川部長を殺したのは別の特権者だったのだろう。

「なぜあんな奴を……」

悔しかった。自分のことではなく、立花のほうを信頼した麻美の気持ちたちが悔しく感じられた。

「あなたはよくやってくれた。あなたがあそこまでやってくれるとは思わなかったわ。本当なら立花に全て任せようと思っていたのに大半はあなたが殺してくれた。でもかえって私はあなたが怖くなった。立花は私が見つけた男よ。私があつた男に特権者という権利を与えた。だからあの男は私を絶対裏切らない。でもあなたは違う。いくら私を愛してくれていても私を殺さないという保証はどこにもないわ」

「そんな……」

「金曜も立花が来ていたのよ。本当ならあの男にあなたのことを殺してもらおうと思っていたの。でも考え直したわ。あなたはやっぱり私が殺す。あなたのことは他の誰にも殺させるわけにはいかない」

「立花も殺すつもりでいたのか？ 君が助かるには君を殺す可能性のある5人全てを殺さなければいけないだろう。それともあの男だけは特別だとしても？」

「殺したわ」

「何だって？ あいつは事故で――」

「いいえ、事故なんかじゃないわ。見える？」

克行がガラス窓に映っている麻美を見ていることを知って彼女は克行に小さなガラス瓶を軽くあげてみせた。右手は相変わらず克行に拳銃を向けつつづけている。

「それは？」

「SDSKっていう薬。ほんの少量でも人が死ぬには十分な強い毒薬よ。しかも飲んでからすぐではなく一、二時間過ぎてから突然苦しみに襲われる。まだ政府内でも一部の人が知らない暗殺用の薬。解剖によっても毒殺だとは判定出来ない。あの日、立花にはコーヒーといっしょにこれを飲んでもらったの。あなたにも出来たらこれを飲んで欲しい。そして全てを終わりにしましょう」

「本気で俺を殺すつもりか？」

「本気よ、あなたたち5人の特権者の命によって私は救われるの」
確かに麻美の目は真剣だった。その真剣な眼差しが克行の心のなかに憎悪に似た感情を生み出した。

（なぜだ？）

今までの全てのものががらと崩れていく。そんな音が聞こえてくる。

「これを飲んでくれる？」

あんなに愛していた麻美の声がまるで悪魔の声に聞こえてくる。

「なぜ……涼子を殺した？」

「……」

「なぜ俺を騙した？」

「……」

「なぜだ！」

怒りの全てが麻美に向かって流れ出した。この二週間の苦しみ全ての原因が見つかったような感じがしていた。

「あなたにはわからないの？ 苦しんだのはあなただけじゃない。私だって苦しみぬいたのよ。私だって好きで涼子さんのことを殺したわけじゃないわ！ 私はあなたに私が特権者優遇計画を支えてきた人間ということを知られなくなかった。あなたに嫌われたくなかった。だからあの人に余計なことをして欲しくなかった」

「俺を嫌われたくない？ 涼子がおまえのことを俺に伝えようと伝えまいとおまえは俺を殺すつもりだったんじゃないのか。現に今、

こうして殺そうとしているじゃないか？ それとも……最後まで俺を騙すつもりだったのか。全てを知られることなく、おまえのことを愛したままで俺は死んでいく。それがおまえの望みだったのか？」

ひよっとするとそれが一番の理想だったのかもしれない。心のどこかでそれに気づいていた。だが、今となってはもう遅い。全ては動き出してしまった。

克行は振り返った。その怒りに満ちた目で麻美を睨んだ。麻美もまた避ける事なくその目を見つめ返した。その目にいくぶん怯えた感じがあった。

「あなたはそんなにまであの人を信じているの？」

「どういふ……ことだ？」

「私がどうしてシークレットファイルの中身を知っていたと思うの？」

「？」

頭のなかを黒い靄が渦巻いている。

今まで気づかなかったが確かにおかしい。麻美が涼子を殺し、シークレットファイルを奪ったのは昨夜のことのはずだ。それなのに麻美の口ぶりではそれ以前にシークレットファイルの中身を知っていたことになる。だからこそ立花を使い富士川を殺させたんだ。それに本来なら麻美が涼子を殺せるはずがないのだ。麻美は涼子の顔を知らない。ほんの一度か二度、名前があがったにすぎない。

（それなら……）

「気づかなかったみたいね。あの方はシークレットファイルの中身を知ると、あなたに伝えるよりも先に私に連絡をくれたのよ」

「君に？ あいつが？ なぜだ？」

「私を脅迫するために。シークレットファイルに書かれていることからあの方は私の立場を知った。そして、その結果あの方は私を脅迫したのよ」

「……馬鹿な」

「馬鹿なもんですか。あの方は確かに克行に深い思いを持っていた

わ。いえ、あれは克行に対する愛情かもしれないわね」

麻美は意識したうえか愛情という言葉に力をこめた。涼子との関係を麻美は知ったのだろうか。「どちらにしても私に対するものじゃなかった。しかも、同時に野心家だった。公務員なんてつまらない職業に飽き飽きしてた彼女は私を脅し、新たな地位を要求したのよ。もちろんそれ相応のお金も同時にね。仕方なく私はそれをOKしたのよ。あなたにシークレットファイルの中身を教えないことを条件に。それなのに……あの人は私を裏切ったのよ！ あんな人を殺したからって何だって言うのよ！」

——麻美さんのことは私に任せて。

涼子の言葉。

（任せてくれてってそういうことか……）

信じ切っていただけに失望があった。確かに彼女は克行が問いつめるのを待っていた。麻美との契約で口を閉ざすことになっても、それでも克行に喋らなければいけないそれだけの理由を待っていた。しかし、だからといって克行には涼子を責めることは出来なかった。責めることなど出来るはずがない。彼女はすでに死んでいる。特権者優遇計画に関わったために、そして克行に関わったために。

「それじゃ……あの時も……俺が訪ねていった時にはもう——」

「そうよ、知っていたわ」

水曜の夕方、麻美のマンションを訪ねていったときの事を克行は思い出していた。自分自身の精神的な疲れを隠し、克行を優しくいたわってくれたあの時の麻美の姿。だが、麻美はあの時にはもうシークレットファイルのことを知っていた。あの時にはすでに克行に対する殺意が存在していた。

「麻美……」

「確かに私も浅はかだったわ。どのみち私は家族を捨てることなんか出来ないのよ。あなたを切り捨てられないのよ。あなたを殺すことによって私は救われる。父さんも母さんも家族みんなが救われる」

麻美は迷いを打ち消すかのようにまっすぐに克行の顔に向けて拳銃を向けた。

手が震えている。

克行は今日、ここへ来て初めてまっすぐに麻美の顔を見た。目を赤くさせ、顔は真っ白に染まって今にも倒れそうに見える。

麻美の様子、部屋の様子、全てが麻美の苦しみを物語っている。その様子に克行は自分がしくじったことを知った。

単なる特権者と特命者の関係だと思いこんでいた。その関係に苦しめられることを避けるためにほとんどといっていいくらい麻美と連絡を取ろうとしなかった。昨日ですらほとんど目をあわそうとしなかった。

（麻美の苦しみを俺はわかってあげられなかった）

もし、毎日のように一緒にいてあげられたならこんなことにはならなかったかもしれない。

「やめろ……やめるんだ」

静かに克行は語りかけた。

死に対する恐怖が麻美の頭をパニック状態にしている。その状態から少しでも救ってやりたいと思った。

「あなたも死ぬのは怖いでしょう。私だって怖いよ。それに私だって私だけの命なら克行のために捨てる事が出来るわ。でも……でも……」

涙が頬を伝わっていく。

「拳銃をおろせ」

「……お願い、薬を飲んで……。私だってあなたのことを殺したくないの。こ……こんなことになるならやっぱりあの男に頼めば良かった」

ぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。麻美の苦しみが伝わってくる。

「……」

克行はゆっくりと首をふった。

麻美の苦しみは克行にもよくわかった。けれどこんな形で麻美と

の関係が終わらせたくなかった。それにこういう形で克行が死を選んだとしても麻美は自分の犯した罪に耐えることは出来ないだろう。克行は麻美の左手首の包帯に気づいた。うっすらと赤く血がにじんでいる。

「……克行、なぜ？　なぜわかってくれないの？」

「俺が死んでもおまえが救われるとは思わない。俺はおまえのためにこの一週間の間何人も殺した。だからこそ言えるんだ。おまえは人を殺すことなど出来ないんだ。おまえは俺を殺すことによって自分自身を殺すことになる」

「……そ、そんなことない。私は昨夜だってあの人のこと……涼子さんのことを殺したわ。私にも人は殺せる」

「けど、その罪の意識におまえ自身押しつぶされてるじゃないか」

「私が？　そんなことない」

声が震えている。必死に恐怖を打ち払おうとしているように見える。

「麻美、拳銃をおろすんだ」

「……いやよ、私は死にたくさんかない。死ぬのは私じゃないわ、あなたよ。そうよ、あなたよ。あなたがみんないけないのよ。特権者になんか選ばれるから……私を殺す特権者になんか選ばれるから……だからこんなことになったのよ」

ふいに麻美の声のトーンが変わったように感じられた。やけに目が虚ろでさっきまでの目付きとは変わっている。

狂気的感覺。

克行は自分も感じたあの感覺を麻美も感じているのだと知った。

「よすんだ」

何度も何度も麻美を落ち着かそうと克行は声をかけた。しかし、それでも麻美の気持ちを変えることは出来ないことは克行にもわかっていて。克行はそっと右手をコートのポケットへいれると拳銃を握った。

「私は罪の意識なんか感じない。押しつぶされたりなんかしないわ

！人を殺したことなんか今に忘れることが出来る。きっとあなたのことも忘れられる。忘れてみせる！」

薬の瓶が麻美の手からぼろりと落ちて絨毯の上を転がっていく。麻美の決意が強くなっていく。麻美は拳銃を持ち変えると一度ブラウスで汗を拭い、改めて両手でしっかりと拳銃を握りしめた。

殺意がひしひしと伝わってくるのを克行は感じていた。

「麻美……」

「さよなら」

思いを打ち消すように麻美はつぶやき、その手に力がこもる。

時間が止まり、全てのものがまるで遠いものを見るように感じていた。

（死……死……死）

いいさ、死んでしまえばいい。どうせ、彼女を救ってはやれないんだ。コートのポケットのなかで克行は一度握った拳銃をそっと放した。

死を覚悟した。

だが次の瞬間麻美は突然奇妙な微笑みを浮かべた。それはいつもの少女のようなあどけない微笑みだった。そして、彼女は克行に向けた拳銃を、突然向きを変え、自らの胸に押し当てた。

「や……やめ——」

部屋のなかに轟音が轟く。

麻美の目がぼんやりと克行を見つめている。そして、ゆっくりと麻美の身体が崩れ落ちて行く。

「麻美！」

克行は崩れ落ちた麻美の身体を抱き起こした。

「……ご、ごめんね……」

溜め息にも似た声で麻美はつぶやいた。

「麻美！」

「……なぜ？　なぜなの？　なんで……こんなことになっちゃったのかしら」

「……」

「……克行」

ぎゅっと克行の腕にすがりつく。

「俺が……俺が死ねば良かったんだ」

苦しみを吐き出すように克行は言った。そんな克行を麻美はじつとすがりつき、見つめている。

「俺はおまえを助けるためにあいつらを殺してきた。おまえのためなら死んだって良かったんだ……おまえが望むなら……」

涙が溢れた。自分でも信じられないほど涙が次から次へとこぼれ落ちた。

ぽつりと麻美がつぶやいた。いや、つぶやいたような気がして克行は涙を拭い麻美の顔を見つめた。

だが、何も聞くことは出来なかった。その目は静かに閉じられ、すでに麻美の命は消えてしまっていた。

「……麻美？　麻美！　あさみいいいいいいいい！」

あらん限りの力を込め克行は叫び続けた。麻美が生き返るわけでもなく、悲しみが救われるわけでもなかった。それでも叫ぶことによって自分の意識が暗闇に吸いこまれて行くことから逃げたかった。

一晩中、克行は麻美の体を抱き抱えたまま泣き叫び続けた。

ジングルベルが街に流れる。

死のクリスマスイブ・29

二十九

薄暗い部屋のなか、二人の男がテーブルを挟み話し合っている。

街は正月休みのためにひっそりと静まりかえり、時間の流れが止まってしまったような錯覚さえ覚える。しかし、二人はそんなことなどまったく気にならないようにテーブルに置かれた書類を満足そうに眺めていた。

「驚くほどうまくいきましたね」

まだ三十そこそこに見える男が言った。もし、その男を克行が見たならばすぐにその男が市役所で見た職員の人であることに気づいたことだろう。分厚い眼鏡の奥で薄気味悪く目が光っている。

「どのケースもなかなか面白い結果だったよ。全て君のおかげだ」

白髪の混じった比較的年配といえる男が満足そうに答えやニ臭い息を吐いて笑った。スーツの襟には金色のバッヂが誇らしげに光っている。

「とんでもありません。最初に先生からこの話を聞かされた時は正直言って私も驚きました。けれど全てが終わった今、先生が私を選んでくれたことに感謝しております」

職員は軽く男へ向かって頭を下げた。

「この実験の結果で家族、恋愛、そんなくだらない人間関係全てが特権者優遇計画を実施するのに障壁になるものではないということが証明された。いや、むしろそれを逆手に取ることによって計画はもっともっと面白い方向へ進むと言ってもいい。それに特権者優遇計画だけではない。これから実施しようとする全ての計画がスムーズに進むことが実証されたと言っている。特に風間克行と五十嵐麻美、数あるモデルケースのなかでもなかなか面白い。これはこれらの計画に非常に役立つことだろう」

「このケースには恋愛、家族、友情、人間のわずらわしい感情が全て入っていますからね。特権者にも数人の犠牲は出ましたが、結果的には十分満足いくものとなりました。しょせん特権者たちも捨て石に過ぎませんからね。それに何よりも三浦涼子、彼女が意外にも役立ってくれました。初めはもっと別の形でシークレットファイルの中身を彼らに伝えるつもりでしたが彼女がいてくれたおかげでそれもスムーズにいきました」

「三浦涼子か……彼女にしてみれば不運としか言い様がないだろうな。友人のためにやったことが結果的には友人を追い詰める形になったのだから」

「現実には友人というよりも自分のためだったようですがね」

「どういうことかね？」

「私のほうで調べた結果わかったのですが、三浦涼子はなかなかの野心家らしく、シークレットファイルの中身を種に五十嵐麻美を脅迫していたふしがあるんです」

「脅迫？ あんな娘を脅迫していったい何の得になるというのだね」

「素人なんですよ。へたに特権者優遇計画のことを知っていたために五十嵐麻美の父親が特権者優遇計画の委員長を務めていたことを知り、未だに政治的に大きな力を持っていると思いきんだようです」

「馬鹿なものだ。今更彼にいったいどんな力があるというのだ」

男は呆れたように言う。とタバコを一本口へ運んだ。それを見てもかさず職員はライターで火をつけようとした。だが、男はそれを断わった。

「今、禁煙しているんだ。私も長生きしたいからねえ」

そう言って笑うとすぐにタバコをケースへと戻した。

「それにしても五十嵐前委員長、このまま黙っているのでしょうか」

「君まで彼にそんな力があると思っているのかね？」

「いえ……そうは思いませんが、ただ、家族を殺されてはさすがにこのまま黙ってはいないでしょう」

「黙るしかないのさ。この計画を初めに打ち出したのは彼だ。しか

も彼にはもう何の権限もありはしない。委員会を降ろされた今、彼は一介の国家公務員でしかない。一時、我々も彼に騙された。素晴らしい思想の持ち主かと思っていたが……そもそもたかが国家公務員が我ら政治家を振り回そうなどと企んだことが彼の失敗だよ」

「しかし、このことをマスコミにでも公表されれば――」

「それも心配する必要はない。マスコミにはすでに圧力を加えてあるし、彼もそんなことはすまい。何しろ自分の娘を自分の発案した計画で殺してしまったのだからな。自分が殺したようなものだ。それに彼にも消えてもらおうかとも考えている」

「……」

「一度裏を知ってしまった人間をそのままにしておくわけにはいかんからね。ともあれ、彼が消えることで一気に計画は進歩することになる」

「はい」

職員は男の言葉に素直に頷いた。

「ところで話は変わるが一つ不満がある」

男は一度外を眺め、それから再び視線を職員へ向けてから思い出したように言った。

「不満……ですか？ 何か落ち度がありましたでしょうか？」

職員は思いもよらぬ男の言葉に思わず身を固めた。

「私が不満なのは君のところの笠原市長のほうだよ」

「市長……ですか？」

「ああ、今回も彼は自分自身に権利を与え、しかも特命者までも割り当て殺人……いや、削除を行った。やり方があまりにも露骨すぎる。我ら政治家がやりたい放題やっているように見えるではないか。これではマスコミもいかに圧力を加えようともいつまでも黙ってはいまい。何しろマスコミというのは政治家をつぶすことが正義と考えているところがある」

「はあ……私も意見したのですが。何といっても私は身分を隠して一介の職員として委員会に加わったものですから……」

職員はどう答えていいか狼狽した。

「君を責めているわけではない。君は国家委員会の人間としてこの市役所にもぐり込んだだけなのだからね。ただ彼の行為だけは許すことが出来ない。上層部にも彼の行為は伝わって批判の声があがっている」

「いったいどうすれば……」

「風間克行を使えばいいだろう」
はっきりと男は言った。

「風間？」

「そうだ、彼を使って特権者優遇計画をさらに一歩進めるんだ」
「は？」

「以前から言っていた計画を進めるんだ」

男の目は新たな楽しみへ向かって光り輝いていた。

死のクリスマスイブ・30

三十

前略、風間克行殿。

私がこのような形で手紙を出したことに驚いていることと思います。

貴方とは面識ありませんが、娘から以前より貴方のことは聞き及んでおりました。一度お会いしたいと思っておりましたが、このようなことになってしまい残念で仕方がありません。

娘の死を伝えられた時、私の人生の全てが壊れたことを知りました。私ども夫婦にとってはかけがえのないたった一人の娘。娘の死は私自身の死でした。

決して貴方のことを責めるつもりはありませんし、そんな資格私にはあるはずありません。全て私の過ちなのです。

貴方がどこまで特権者優遇計画について知っているのかわかりません。娘から全てを聞き及んでいるのか、まったく知らないまま今回の結果になってしまったのか私にはわかりかねます。しかし、貴方には知る権利がある。そしてまた私も娘のためにも貴方に全てを知っていただきたい。そういう気持ちでこの手紙を出すことにしました。

十年ほど前に私は国家公務員としてあるプロジェクトに入るように上司から命令を受けました。プロジェクトの名前は人口対策委員会。三十名ほどで組織された国家プロジェクトでした。あの当時から人口の増加は年々問題になり、日本の人口問題をどうするか、どう乗り切るか、そういったことを連日連夜話し合われました。

その頃はまだ殺人行為によって人口削減を行おうなどとは私自身夢にも思っていないかったです。しかし、ある日同じプロジェクトに入った同僚から驚くことを耳にしました。プロジェクトのなか

の一人が人口削減のために「戦争」を持ち出したというのです。つまり国民たちがいくつかに分かれて武器を持ち戦争を行うべきだということです。しかもその提案に上層部がかなり関心を示しているということです。確かに人口の増加は以前より問題になりつつあったというものの本格的に拍車がかかったのは「世界統一宣言」以来とって過言ではありません。つまりそれまでは「戦争」が必要悪となり人工増加を防いでいたとも言えるわけです。しかし、その「戦争」を再び、しかも人口抑制のため国政として行うなど考えもしませんでした。

私は驚き、動揺しました。

委員会はある方向性を決定するために設けられたもので、方向性が決定すればまた委員会は別の形で再編成されることになっていました。その時、私がその委員会に加われるかどうかは定かではありません。

すぐに私の家族を思い浮かべました。そのようなことになれば家族がどうなるのか、そのことだけが心配になりました。その瞬間に私は私的な立場で物事を見るようになってしまったのです。

どんなことになろうとも家族は助きたい。そう願いました。そのためには私自身が方向性を決定し、新たに設けられる委員会にも加わらなければならなかったのです。

その晩私は悩みました。いかにして人口削減を行うべきか、連日のように話し合って決まらなかったことを私は一人頭を悩ませました。そして、ある一つの考えにいたりました。「戦争」という大きな殺人ではなく、それを小規模なものにすることにより多くの人々を救えるのではないか、そして何よりも家族を守ることが出来る。そう私は考えました。それが「特権者優遇計画」です。

翌日、会議の席で私は「特権者優遇計画」を提案しました。その会議の席には運良く上層部も出席しており、上層部はひどくその考えを気に入ってくれました。殺人という形で人口削減を行うことには変わりありませんが、上層部も「戦争」という形がいかに危険な

ものか不安に感じていたのでしょう。

他にもいくつかの提案はありましたが最終的には私の提案が皆にも受け入れられ、その結果私は特権者優遇計画国家対策委員会の委員長として残ることが出来たのです。

それは私にとって二つのチャンスでした。一つは家族を守ることが出来るということ。もう一つは私が計画の鍵を握ることによって計画をこれ以上危険なものになるのを防ぐことが出来るということです。そして、最終的にはもっと別の政策をもって計画を白紙に戻すことが出来るということを私は考えていました。

当然敵もいました。もっと別の意味の政策を考える人々は絶えず私の失脚を狙っていました。そのために私が計画を白紙に戻すためには計画を成功させなければならなかったのです。まったく世の中というのは皮肉なものです。

私は友人や親戚に頼み、委員会以外でも広く特権者たちを選び出すことにしました。委員会として選ばれた者ではなく、私個人の選んだ特権者たちを登録しておきたかったのです。そして、万が一委員会内で争いが起こった時にその特権者たちを使うことによってその場をしのぐと考えたのです。娘もその考えに従い私の手伝いをしてくれました。

特権者優遇計画について私はなるべくあやふやな基準を設け、出来るかぎり不幸な殺人が行われないように務めました。しかし、そのことが私の失脚につながりました。上層部は怒り、私は今年、特権者優遇計画の国家対策委員会から外されたのです。

突然のことでした。特権者優遇計画実施の二週間前に突如私は解任されたのです。全ては計画されたことでした。

私は驚き、恐怖しました。特権者優遇計画直前という時期、それが何を示しているか私にはすぐにわかりました。私はすぐに親戚や家族にそのことを伝えました。娘にも危険が及ぶことは当然考えました。彼らは私だけでなく私に関わる人々全てを消し去ってしまおうと考えていたのです。特権者優遇計画の二週間前というその数字

が全てを物語っていました。いくら彼らといえども通常私たちを消そうとすれば「殺人」の行為を隠すことは出来ません。そして、もしもう少し私に時間があれば私が改めて力をたくわえ反撃することも可能です。彼らは今回の特権者優遇計画で全てにケリをつけてしまうつもりだったのです。逆に私たちにしてみれば今回の特権者優遇計画を無事にしのぐことが唯一助かる方法だったのです。

しかし、彼らの方法は巧妙でした。娘の恋人である貴方を特権者を選び、娘を特命者を選定する。私はそのことを電話で娘から聞いたとき、彼らの意向をすぐに読み取ることが出来ませんでした。娘もまた自分の考えを私には伝えませんでした。もし、その時私が彼らの計画を読み取っていたら、そしてもし娘の意志を感じていたら……そう思うと残念でしかたありません。

詳しいことは私にはわかりませんが、おそらく奴らは特権者全てを殺すことが娘にとって助かる方法だと思い込ませたのでしょう。私たち家族と貴方の間に立たせることで奴らは人間の守るべき「愛情」を取り去ろうとしたのです。

娘は貴方のことを心から愛していました。帰省するたびに、そして電話や手紙で連絡を取り合うたびに貴方のことが話題になりました。娘の死に際していかなることが貴方との間にあったか、私には想像もつきません。人間というのは「死」というものを目の前に突き出された時、自分では思ってもいなかったことを口にしたたり行動に移したりするものです。先日、娘の死を目の当りにし妻は哀しみのためその夜自分で命を絶ちました。どんな時にも冷静さを失わない気丈な妻だと結婚して以来ずっと思っていた妻が一日中泣き続けその夜首を吊ったのです。死に際して私に宛てた遺書には私への恨み言が一言だけ殴りつけるように書かれていました。

「あなたが殺した」

その一言が全てでした。

その時になって初めて私は自分の犯した罪の大きさに気づきました。やはり家族を巻きこむべきではなかったのです。もし自らが犠牲になったとしても計画を推し進めるべきではなかったのです。

悔いの念が心を支配しました。

重ねて申し上げておきますが、今回のことで決して貴方のおつた行動を責めるつもりはありません。むしろ私としては貴方に深く感謝したいと思っています。

先ほど今回の特権者優遇計画をしのぐことによって私たち家族が救われるかのようなことを書きましたが、実際にはどうだったか自信はありません。たった今、私の弟が車に跳ねられ死んだという連絡が入りました。それがただの事故でないことは誰でもわかることです。おそらく奴らは私たち家族、そして私の味方をした全ての人々を抹殺するつもりなのでしょう。

娘は貴方の手で死を迎えることが出来た。それは娘にとって唯一の救いだったと思います。ありがとうございました。

それにしても奴らの行動は許しがたいものがあります。といっても私にはもう何の力もありません。貴方に奴らの手が及ぶようなことになれば私も娘に会わず顔がありません。もし貴方が身の危険を感じた時は、内務省大臣大野敏氏をお訪ね下さい。そしてこの手紙を見せて下さい。あの人ならばきっと貴方を助けてくれるはずです。私の不始末で貴方をも巻きこんでしまったことを重ねてお詫びさせていただきます。申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197z/>

死のクリスマスイブ

2012年1月4日17時53分発行